
僕と妖し

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と妖し

【NZコード】

N4323D

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

一見すると平凡だけどある物に大人気な僕と、エス気質で人をからかうことが生きがいみたいな姫と、一見するとお金持ちの大和撫子なんだけど、ときどき暴走する志保。これは、そんな僕達の、というか、僕のちょっとだけ災難なお話。

序話（前書き）

連載が別にやっていますが、気晴らしとして、とこづけで、いろいろの
も載せてみようかと。

とりあえず、肩肘張らずに呑気に読めるものを書いてみました。

季節は夏。

燐々とした太陽がじりじりと肌を刺すように光を降り注ぐ。そんな午後のひとときの中、僕は、森の中を歩いていた。自然と共に遊ぶ事を忘れた現代人にしては珍しく、その足取りはしつかりとしていて、森の中だと言う事を感じさせないほど、軽やかに土を踏みしめていく。

ここは、僕の庭みたいなところだから、当然と言えば当然だけど。特にこの時期になると、いつもお世話になつていて。

もちろん、理由はたつた一つ、昼寝だ。

やはり、この時期は、普通にしていると、ものすごく暑い。どんなに風通しを良くしたところで、たかが知れている。

おかげで、家にはいられるわけもなく、だからと言つて、そのまま外を出歩くわけにもいかないため、こつしてここに来てしまうのだ。もちろん、文明の利器であるクーラーに頼れば、また話は変わつてくるだらうけど、我が家にはそんな物はないし、僕自身、クーラーに長い間、あたつていると、頭痛がしたりと、体調が悪くなるのだ。そんなものには、頼れるわけがない。

よつて、自然に頼る事しか出来ないのだ。

とはいって、ここでも十分に涼しい。

やはり、木々が鬱蒼と茂っているため、日の光はとこねるが、木漏れ日程度でしか入つて来ない。

しかも、山の中と云つ事もあって、そよそよと吹く風は涼しく、心地いい。

この時期、一番の納涼スポットと言つてもいい。

それからしばらく歩いた後、木に背をあずけると、座り込む。

そこだけ、土の色や草の生え方がまちまちになつている。いつも、ここで昼寝をしているからだ。

ここが、一番涼しくて、座る十や背中をあずける木の具合もかなりいい。

腰を降ろした後、軽く伸びをすると田を瞑る。

そよそよと吹く風が僕の頬を、髪を優しく撫でていく。

それがとても気持ちいい。

やっぱり、こうして外に出て、風に当たるほうが、ずいぶんと安らぐ。

きっと、クーラージャ、こうはいかないはずだ。

あれは、体力をどんどん奪っていくものだし。

ざわり

不意に強い風が吹いた。

目を瞑っていても、分かるぐらい、髪が大きく揺れる。

それに合わせて、木々がさわさわと音を立てて揺れ、陽の光がこぼれてくる。

涼やかな風に吹かれ、本来ならば暑いはずの田の光はどこか優しげで、じりじりと照らすような事はない。
どこまでも穏やかな世界。

ざわり

また、強い風が吹いた。

だけど、今度は、先ほどとは違つて、どこか底冷えするような冷たさを含んでいる。

おまけに、さきほどまでの穏やかな空気が嘘だつたのかのよう、元気と張り詰めた物に変わっている。

思わず、変な不安にかられた僕は、田をあけた。

熱を奪つていた涼やかな風は止み、木漏れ日も届かなくなり、辺りはすっと暗くなつていた。

そのせいか、先ほどまでの夏の暑さはどこかへと飛び出してしまつたのだろうか、打つて変わつて、身体の芯が冷えるようなそんな寒さが辺りを満たしている。

不意に、視界の端に、影を捉えた。

けれど、その姿はぼんやりと白い靄のよつたもので覆われており、はつきりとしない。

それは、しっかりと見直しても変わらなかつた。

もちろん、僕の目が悪いわけではない。

その薄い靄に隠れた影以外は、はつきりと見える。

その瞬間、ようやく、その影の主が何か分かつた。

靈だ。

その独特的、なんとも形容し難い身体中にまとわりつくような感触で分かる。

周りの空気が凜としている分、余計にそれが目立つ。僕がこうしてここに来る理由のもう一つがそれだ。どこまでも、平凡な僕だけど、少しだけ、変わったところがある。靈を引き寄せやすい体质なのだ。

理由は分からぬが、気がついたら、見渡す限り、靈で囲まれている事なんて、何度もあつた。

それに、辟易して、友人のつてで、そう言うものから身を守る方法は、習つていたのだが、さすがにそれを人前で堂々とやれるわけがない。

端から見れば、その姿は、確実に妖しく見えるだろう。

そのため、こんな人気のないところでしか納涼ができないのだ。とはいへ……舌打ちをして、慌てて、立ち上がり、逃げ出そうと身構える。

どうにも、今回は、そんなものでは、役には立たないみたいだ。元々、厳しい修行をした分けでもないので、僕が使えるのは、せいぜい気休め程度の物。

そんなもので、明らかにこちらを狙つてゐる物相手に通じるわけがない。

向こうがこちらに向ける物は、明らかに友好的なそぶりはない。だいたい、友好的な存在ならば、薄靄の中に隠れて、こんなかにも、と言つた感じの雰囲気で、近づいてくる事はないはずだ。

だから、せいぜい、僕にできるのは、逃げる事。

少々情けないような気もするけど、無茶な事をして、身に危険があるんで、元も子もない。

にじり寄つてくる影のスピードがあがつた。

どうやら、逃げ出そうとしている事に、気がついたのかもしれない。

こつなつては、一刻の猶予もない。

すくつ、と立ち上がると、影に背を向け、足を踏み出す。

まだ、距離は、そんなに縮まつていなければ。

十分逃げられる、そう思つていた。

だけど、なぜか気がついたときには、何かに腕を掴まれた。

先程までの凜とした空気も、身体にまとわり付くような感触も、いつのまにか消えていく。

この原因はいったい何なのだろうか？

いや、そんな曖昧な言い方なんてしなくても良いだろう。

何かではなく、影なのだろう。

ここにいるのは、僕とその影だけなのだ。

内心で舌打ちをする。

こつして、捕まつている以上、もう、逃げられないだろう。

力づくで振りほどいて逃げられるほど、僕には腕力はない。

こうなれば、仕方がない。

覚悟を決めると、影の方へと振り向いた。

第一話 八月三十一日 前篇

カレンダーを見てみる。

田めぐり式のそれは、しつかりと八月三十一日と示している。つまり、高校生である僕にとっては、夏休み最後の日を表していると言ひ事になる。

それを見て、僕は心の奥底から思つ。

あつという間の事だつた、と。

もちろん休みなんて物は学生にとつてはあつという間の物で、すぐに過ぎ去つてしまつ物だつて事ぐらいは僕だつて分かつている。実際昨年の夏休みだつて、その過ぎて行く日々の早さに驚いたものだ。

けれど、今回の夏休みに關しては、そんな理由じゃない。

別に楽しい事がたくさんで充実していたから、なんていうありきたりな理由ではない。

むしろ騒動が多すぎて心休まる暇がなかつたから、と言ひのが正しいところだらう。

もちろん、その原因となるものは一人しかいない。

今思えば、きっとあの時から全てが始まつてしまつたのだろう。

そんな事を考えながら、隣で呑気に漫画を読んでいる少女を見る。彼女の名前は姫。

とは言つても、本名ではない。

どれだけ聞いても、教えてくれなかつたのだ。

だから、仕方なく、僕が付けた。

たつぱりとした色艶のある長い髪に、黒曜石を埋め込んだかのようない、綺麗に透き通つた黒瞳。絶妙なバランスの上で整つた顔。服の上でも分かるすらりとした肢体。その姿が、まるで絵本から出てきたお姫様のようだから、姫。

まあ、世間知らずで、天然で、どこか抜けたようなといひがあるか

ら、なんていう理由もあつたりするけど。

とはいって、それで姉と言つのも、かなり安直なようにも思えた。つけた僕自身だつて、そのセンスのなさに辟易したものだ。ただ、彼女がそれを嫌がらなかつたから、結局、それになつたわけだけだ。まあ、大して自分の呼び方に興味がなかつたと言つのが正しいんだろうけど。

僕が必死になつて名前を考えているときも、彼女は今と同じよつて漫画を読んでいた。

それを考へると、自分のしていいた事が無意味にも思えるけど、それはこの際、記憶の奥底に押し込んでおく。

そんな自分が可哀想だから。

それに、今考へるべき問題は、僕が置かれている状況だ。とりあえず、この呑気に漫画を読んでいる少女は、何を思つたか、僕の家に住みついている。

しかも、せめて、もう少し、殊勝な態度でいてくれれば、まだ、我慢できると言うのに、さも当然そつこ、堂々と居座つていて。だいたい、自覚があるのだろうか。

地元の高校に通う僕は、当然家族と暮らしている。

だから、もし、この状態が家族にばれでもしたら、それこそ惨事だ。知らない少女を、無断で居候させているのだ、蠶ざきにならぬいほうがおかしい。

よつて、当然、本来なら、こそこそとしないといけないといつのこと、元の先にいる彼女は、相変わらず、呑気に漫画を読んでいる。それが、いつも続いているのだ。

おかげで、氣を使うのはいつも僕で、氣が休まる暇がなく、平穏だつたはずの僕の生活があつさりと音を立てて崩れ去つたのだ。もちろんその原因は、忘れもしない、あの夏休みの出来事だ。

あの時、振り返つた僕の前にいたのは彼女だつた。

彼女はどこか悪戯っぽい笑みを瞳に浮かべて、僕の事をじつと見つめていた。

その視線は、どこか僕の事を值踏みしているかのようにも思えて、居心地が悪くて、身体中がむず痒く、今すぐにでも逃げ出したかった。

幸い、相手は女の子なのだ、振りほどく事ぐらい簡単に出来るかもしない。

だけど、僕はそれをしなかった。

いや、できなかつた、というのが、正しいか。

今まで見た事のない、まさに完璧と言つべき、美貌を前にして、僕は動く事が出来なかつたのだ。

なんとも悲しい男の性と言つものだらう。

けれど、そんな僕を置いてきぼりにした彼女は、しばらくじつくりと僕を吟味した後、

『決めた。今日から、私は君に憑く』

そう言つたのだ。

その言葉に、僕はようやく我を取り戻したけど、時、既に遅し。彼女は、すつと僕の腕を引くと、そつとキスをしたのだ。

一瞬何事だと思って、驚いたし、恥ずかしながら、彼女居ない暦が実年齢と言つ恥ずかしい記録を持つてしまつているほど、全くもないでの、これがファーストキス。

別に大事に取つていた分けじやないけど、それでもこんな望まぬ形となり、ショックを受けていた。

けれど、身体中の力が抜けた事で遅まきながら現状に気がついた。魂を抜かれたのだ。

しかも、身体の力の抜け方が半端じやないという事は、かなりの量を抜かれていると言う事。

下手したら、死にかねない量だ。

だけど、だからと言って、何をされたのかが分かつたからと言つて、それに対する対応策なんて物は知らない。靈感の類は少なからずあるとは言つても、それに対する対応策なんてしらない。

あくまでも、僕は一般庶民なのだ。

『うん、『うそうさま。これで、憑依完了ね』

結果、何も出来ずに、なすがままの状態で、かなりの量を抜かれた。
なんとか、意識が残っている分、致死量ではないのだろう。まあ、
憑くと言つてたからには、すぐには殺すつもりはなかつたのだろう
が、それでも、手違いで抜き過ぎた、なんて事も十分ありえる。
まあ、実際は、無事に死んだりはしなかつた。とりあえず、しばらく
くひどい脱力感に苛まれてまともに動く事も叶わなかつたけど。
そして、その日から、僕は迷惑千万な彼女との共同生活が始まつて
しまつたのだ。

「ねえ、由貴」

彼女と出会ったばかりの頃を思い返していると、横合いから声がした。

この部屋には、僕と姫しかいないから、その声は彼女の物なのだろう。

ちなみに、自己紹介が遅れたが、彼女が呼んだように僕の名前は由貴。

苗字は、名前みたいだが、志亜。

たいていの人は、僕の事を、由貴と呼ぶけど、たまに、白雪と呼ぶ人もいる。

『しあゆき』と『しらゆき』で、音の響きが似ているから、というのがしようもない理由からだ。

とはいって、だからと言って、それが嫌なわけでもない。

確かに、男らしくないし、それでからかわれたりするから、手放しで喜べるようなものではない。

だけど、逆に、それが親しみやすくて、クラス替えの時などで、自己紹介をする際、掴みのネタとして使えるから、初めての場所でもあまり困らない。

「お腹すいた」

そんな事を考へて、彼女は、次の言葉を続けていた。僕が全く無反応だったから、それに業を煮やしたからなのだろう。それ以前に、単に欲求に耐えられなくなつたと言つ事のほうが大きいかも知れないが。

彼女が食事をしたのは、僕と出会った時に見たのが最後。

それ以前の事は、当然知らないし、それから以降の事は、僕が、出してないから、食べていなければだ。

「んじや、どうかに餌探しに行つたら?」

けれど、僕は、それをまともに取り合はない。

もちろん、意地悪をして、彼女が何も食べられないようにしているわけではない。

彼女が、人間が食べる食事を食べると言うのならば、さすがに、毎食と言つわけにはいかないが、飢えない程度にはきちんと出すつもりではいる。

とはいって、一見すると、ほとんど生きているのと変わらないようこ見えて、そこは靈、人間が普通に食べているものでは、飢えをしひぐ事は出来ないらしい。

まあ、本来ならば、靈がお腹をすかせる事事態おかしこと言えばおかしい。

死んでしまっている以上、靈には、肉体がないのだから、それを維持するためのエネルギーは必要ない。

けれど、それはあくまでも普通の靈の事で、普通とは言ひがたい彼女は、他の靈とは少し違う。

そもそも、彼女とは出会いの時点でおかしそぎるのだ。

なぜ、靈である彼女が、僕に触れる事が出来たのか、と言つ事だ。靈は物質的存在じやないから、当然物に触れる事はできない。

ポルターガイストなんて言つ靈障もあるが、あれは実際に靈がその物を触つてしているのではなく、靈の持つ力で動かしているだけの事。もちろん、動かすだけの力を持つてゐる靈なんて言つのは、本当に強い力を持つてゐる靈だけで、ほとんどいない。

だけど、彼女は、そんな一般例とは違い、普通に僕に触ってきた。それはつまり、彼女が物質的に存在していると言う事になり、当然、維持するためにエネルギーも必要になる、そういう事だ。

ただ、そのエネルギーと言つものが、僕としては非常に困ったものなのだ。

「田の前にいるんだから、わざわざ、探す必要なんてないでしょ。ほら、早く魂を抜かせなさい」

そう、そのエネルギーと言つのは、人の魂なのだ。

彼女は、人の魂を抜き取つて、それを糧に物質化しているのだ。
「ほら、こんな綺麗な女の子と、公然とキスできるんだから、嬉しいでしょ?」

しかも、その手段と言つのがキスなのだ。

もちろん、他にも、いろいろと手段はあるにはあるらしが、なぜか教えてくれない。

まあ、どうせ、からかうためなんだろうとは思つけど。
僕が、以前、キスされたことに関して、文句を言つた時、それはそれはおもしろそうに笑つていたし。

純情な男子高生の心を弄はないで欲しいものだ。

「結構です。だいたい、好きでもない人とキスが出来るほど、器用な性格してないんです」

僕は、彼女の言葉を、あつさりと切り捨てる、彼女から漫画を奪い返し、本棚に戻す。

放つておいたら、そこら辺に散らかしたままにするからだ。
以前なんか、ほんの少し、それこそ、小一時間ほど、部屋を空けて
いる間に、この少女は、思わず呆然とする事しか出来ないほど散ら
かしてくれたのだ。

あの後、母親にその大惨事を見られて、じつてりとしばられてしまつた。

もちろん、彼女は、あつさりと、姿を隠して、我関せらずと言つた面
持ちをして、ふわふわ浮いていたが。

実体化ができれば、姿を消す事もできるらしいのだが、あの時は、
そんな事すら気にならないほど、殺したい程憎かつたものだ。

「またまた、由貴ちゃんてば、照れちゃつて可愛いんだから」

「由貴ちゃん言つな」

おまけに、僕が女性慣れしてない事を良いことに、セクハラまがい
の発言もしてくる。

本当にた迷惑な人なのだ。

まあ、死んでしまつていて以上、人と呼ぶのもなんとなく、変なよ

うな気もするけど。

「今時、ファーストキスを大事に取つておくれよな可愛い男つてい

ないわよ？ある意味、絶滅危惧種ね」

「悪かつたな、彼女の一人もいなくて！」

ただ、本当に死んでいるのか、怪しい物だけど。

ここまで、俗世にまみれた靈なんて聞いた事ない。

靈だけに例にない。

「いや、そんなに落ち込まなくて！」

そこまで、考えたところで、あまりの寒さに、打ちひしがれてしまつた。

傍にいる彼女は、何か勘違いしているらしく、哀れみのこもった目で僕を見ている。

どうせ、今まで彼女がいなかつた事に、打ちひしがれないとでも思つたのだろうが、見当違いもいいところだ。

彼女いない暦が実年齢なんて事ぐらいで、誰が絶望するものか。いつか、僕にだって、素敵な彼女ができるはずだ。

まあ、そう言って、全く出来なかつた十七年間だけど、この際、そんな事は華麗にスルーしておこう。

悲しいだけだし。

「ね、ほら、なんなら、お姉さんが慰めてあげるから？」

「お断りします」

ただ、だからと言つて、彼女と、ビックリするつもりは、毛頭ないけど。

靈相手に、と言つのあるけど、それ以前に、性格の方に難あり、だ。

見た目に関しては、文句なしなんだけど、やつぱり、性格が良くなないとどうにも、その気にはなれない。

「ていうか、お姉さん、て言つ年齢でもないでしょ？」
まあ、年齢もネックになつていると言えば、そなんだけだ。

実際の年齢は良く分からぬけれど、確実に僕よりも相当上なのは

分かる。

まだ、一いつ上なら大丈夫だけど、彼女の持つ雰囲気は、軽く僕の何倍も生きているように感じさせてくれる。

「そんな事言つてるから、もてないのよ」

だから、素直に思つた事を言つてみたのだが、噛みつかれてしまつた。

まあ、確かに、女性に対して、歳の事を言つのは、あまり褒められた事じやないのは分かつてゐる。

ただ、それも時によりけりだ。

だいたい、彼女のこめかみと頬を見てみれば、良く分かる。こめかみには青筋を浮かべ、頬はびくびくと痙攣させている。図星をさされて、逆上しているのだろう。

なら、素直に相手してやる必要はない。

これ以上一緒にいても、言い合いになるだけの事は必至。いちいち相手しててはこつちが疲れるだけだ。

だつたら、さつさと離れてしまつたほうがいいだろう。手のひらをひらひらとさせると、彼女を置いて部屋を出る。ただ、だからと言つて、家の中でやることなんてない。

時間はまだ昼を過ぎたばかり。

当然、テレビで面白い番組をやつてゐるわけもなく、仕方なしに僕は外へと出る。

途端に、日本の夏特有のむつとした熱気が身体中にまとわり付く。家の中も十分暑かつたが、それに比べ物にならないぐらいの暑さ。地獄だ。

何もしていなのに、すでに滝のよじに汗をかき、シャツは軽く濡れて張り付いている。

ため息を履きながらも、足を進める。

いつまでも、こんなところにいては、確実に脱水症状を起こす事は容易に想像が付く。

だからと言つて、あつさつと家に帰つては、外に出た意味もない。

それに、中に入つたところで、風も吹かなければ、冷房器具がある
わけでもないんだから、涼が取れるわけでもない。
なら、このまま歩くしかない。

それに、歩いているうちに、納涼にちょうどいい場所が見つかるか
も知れない。

それから、しばらく歩いたけれど、結局行きついた先は、いつもの場所、つまりは姫と出会った場所だった。

元々、僕の知つてゐる納涼スポットなんてここしかないのだから、当然と言えば当然なのだが、少々釈然としない。

けれど、それでも、相変わらず、そこは、山から吹きあがるされる風は涼やかで、夏のうだるような暑さから解放してくれる。

疫病神と寸分変わらぬ彼女に出会つた忌わしき場所だけど、やっぱりここは僕にとつては一番落ち着ける場所には変わりない。

瞳を閉じる。

彼女がいるおかげで、僕には安息の時はない。

変に気を許しているうちに、いつそりと魂を抜き取られるような事だつて十分に考えられる。

意外と彼女はしたたかなのだ。

僕が初めて出会つたとき、その美しい容貌に見とれて、呆然としている間に、魂を抜き取り、憑依した事が、いい例だ。

だから、ちょっとでも隙は見せられず、いつでも気を張つてなくてはいけなくて、最近ではそのプレッシャーのせいで、まともに眠れない状況になつていてる。

おまけに、彼女は何が何でも僕から魂を抜きたいらしく、いろいろと画策して、数々の作戦で翻弄してくれている。

その作戦は、軽く思い出すだけでも、両手では数え切れないほどの事なのだ。

まず、最初は、彼女が僕に憑いて初日の事だった。

何とかして、彼女を振り払おうとしたけれど、いくらやつても、どうにもならない事を悟つた僕は、諦めて家に帰つた。

もちろん、見ず知らずの見てくれだけはいい少女を、堂々と家の中に招き入れるわけには行かない。

変に詮索をされた結果、余計に話をこじらされるわけにはいかない。一応、僕の靈感と言う物は、血筋から来ているみたいで、祖父からそういう体質を受け継いだと言つ事になつていて。

あまりにも、靈が寄つてくるので、親に聞いてみたら、そう答えられたのだ。

とはいへ、だからといって、僕の家族が、靈能力者家族と言つわけでもない。

あくまでも、祖父がそうだつただけで、僕以外の家族は、集まつてくる事はおろか、見る事すらできないのだ。

そのため、一度として、靈なんて物は、見た事もなければ、感じた事もないのだ、いきなり現れた少女を靈だと言つたところで信じてもらえる可能性は薄い。

むしろ、氣でも違えたかと思われる可能性の方が高いだろう。

もちろん、彼女が消えるところを見せれば、それで解決するのだろうが、その時の、僕には、彼女が消える事が出来るなんて事は知らなかつたわけだし、それに何より、目の前で、少女が消えたなんて事になれば、大騒動になる事ぐらい予想できる。

ならば、結局、こつそりと彼女を家に招き入れるしかなかつた。

とはいへ、そこまでは良かったのだ。

彼女をどんなに振り払おうとしたところで、完全に憑いてしまつている以上、靈に対する特別な修練を積んだわけではない僕には、どうすることもできない。

なら、抵抗する事を止めて、氣が澄むまで、憑かれていればいいだけの事。

彼女とて、いつまでも、僕に憑くような事もないだろうし、運が良ければ成仏してくれるかもしれない。

例え、それが叶わなかつたとしても、その時はその時で、専門家に頼めばいいだけの事。

幸い、僕には、一応、そういう事を専門に扱う知り合いがいる。

僕が使つてゐる簡易結界だつて、その知り合いに教えてもらつたの

だ。

もちろん、その実力は折り紙つきで、何度も僕にとり憑いたたちの悪い靈を祓ってくれた。

いくらでも対応策がある分、まだ、諦めはつくのだ。

けれど、家に帰り、部屋に戻った辺りで、気が付いた事があった。

僕の目の前で堂々と座り込んでいる彼女。

先ほど言ったように、後々、面倒な事が起きた事を未然に防ぐために、彼女の事は内密にしておく。

ということは、家族に秘密なのだから、彼女の居場所は僕の傍、僕の部屋しかない。

つまり、僕と彼女は、同じ部屋で過ごす事になり、狙われている僕としてはかなり危険な状態に陥る事になると言う事だ。

もちろん、それは、当たり前の事で、すぐにでも思い当たるような事なのだけれども、僕は、それに全く気が付かなかつたのだ。

いきなり自分でもどうしようもないような相手にとり憑かれた挙句、その靈は、実体化ができ、更には、まるで淫魔かのように、キスを迫つてくるのだ、まともな思考回路に戻るには少々時間が必要だつた。

けれど、問題点がわかつたからと言って、彼女を僕の部屋から追い出すわけには行かない。

世間一般的な家庭である我が家は、一軒家ではあるが、部屋数はそんなにない。

そのため、全部屋綺麗に使われてしまつてゐるため、空いている部屋なんて物はないため、適当に彼女を押し込んで置けるような場所はない。

だからと言って、親に事情を説明するわけにもいかない。

それでは、本末転倒もいいところだ。

僕は、進んで、騒ぎを起こすつもりはない

結局、彼女と一緒に過ごす事に決めたのだが、その決断を後悔するような事ばかりが起きたのだ。

恋人いない暦十七年の僕は、当然、女性経験はなく、そのため、女性と言う存在は未知なもの。

何一つとして、知らない。

そんな僕を前にして、彼女は、わざわざ無防備な姿をさらすのだ。まずは、いきなり、僕の前で、意味もなく、服を脱ぎ始めたのだ。おそらく、誘惑でも何でもして、僕から魂を頂こうと言う魂胆なのだろう。

唇を突き出しているから、すぐに分かった。

彼女も、家の中では孤立無援で、さらには、あまり僕にひとつては有利ではない場所だと言う事が分かったのだろう。

彼女が迫つてくるのを逃れようとして、助けを求めたり、騒いだりしたところで、彼女の衣服が乱れていれば、逆に僕の方が危うくなる。

僕が彼女に襲いかかって誤解されてもおかしくはないだろう。

けれど、それが分かっていても、彼女のその姿は僕をぐらつかせた。逃げる事も受け入れる事も出来ずに、ただ耐える事しか許されないせいなのもあるだろう。

だけど、それ以上に、やはり、僕とて、年頃の男。

女性と言つものに、全く興味がないわけではない。

むしろ、全く未知の領域な分だけ、余計に興味が強いかもしない。そのため、どうしても、すっぱり振り払えない、抗えない。

そんな反応に困っている僕を見て、効果ありと思った彼女は、今度は、下着姿になつたかと思つたら、僕にしなだれかかってきたのだ。いきなりの事に驚いた僕は、慌てて彼女を引き剥がしたが、その際に触れた、彼女の女性特有の柔らかさに、理性が飛びそうになってしまった。

いや、もしかすると、その瞬間的には、飛んでしまつっていたのかもしない。

その時の、僕は、半ば本気で、

『このまま流されてもいいかも』

なんて、思いかけていたのだ。

やっている事は単なる変態。

それも物凄くたちの悪いタイプの変態なのだが、どうしようもない男の性が、反応してしまうのだ。

もちろん、すぐに、我を取り戻したため、流される事はなかつたのだが、その対応があからさまだったのだろう、彼女ももう一押しだと、拳句の果てには、更に下着を取つて、シーツを身体に包ませるだけの艶姿になると、いじらしげに濡れそぼつたような瞳をして、僕をじつと見たと思ったら、ふと視線をそらすのだ。

その姿を見た瞬間、強烈に僕の中にある男の部分を刺激し、一瞬頭が真っ白になつた。

男は本能的に、逃げる物を追いかけてしまうため、その一瞬引かれた事に対して、火が付いてしまつたのだ。

ただ、それと同時に、運良く、携帯がなつたため、なんとかぎりぎりのところで我に帰り、そのまま流されるような事はなかつたのだが、もうほんの少しでも遅ければ、完全に僕は、彼女に落ちて、襲いかかつていだらう。

今思い返しても、もしそうなつた時の事を考えたら、そつとしない。その時に電話をくれたのは、学校の友人だつたのだが、本当に心の奥底から感謝したものだ。

まあ、その友人は、僕の妙なテンションに引き気味で、用が終わるとさつさと切つてしまつたが。

「んん~」

軽く伸びをすると、そのまま背を木にあずける。

一日目の事をちよつと思いだしただけなのだが、軽い疲労感を感じた。

まあ、彼女との間に起こつた出来事は精神的にかなりきついものがあるから、それは仕方ないのかもしれないけれど、思い返すだけでも、疲労を感じるのは少々辛いものがある。

そう思うのなら、思いださなければいいだけの事なのだが、それも

うまくいかない。

彼女との出来事はインパクトが強いせいか、忘れる事はおろか、考
えないようにしてしまう。

悲しい事だけれども、彼女に憑かれて以来、彼女中心の生活になっ
てしまっているのだ。

ただ、唯一何も考えないでいられる時間だつてある。
それが、この瞬間だ。

一応、彼女に憑かれているのだが、僕と彼女はワンセットではない。
お互にお互の居場所が分かるような事もないし、お互がお互
い繋がつてゐるわけでもない。

そのため、一緒にいなければ、お互の事なんて全く分からな
い。つまり、お互に干渉し合う事はない。
それは僕にとっては非常に大きい。

彼女からの干渉がなければ、のんびりと出来る。

もちろん、彼女の行動があまりにもインパクトが強いせいで考
えにはいられないけれども、眠ってしまえば問題はない。

さすがに、夢の中まで彼女が占めるような事はない。
幸い、今は、周りには誰もいないため、眠りの邪魔をするものは居
ない。

当然、彼女も僕の居場所が分かるはずもないの、彼女が乱入して
くる事もない。

それでも、一応、気休め程度に簡易結界を張り巡らせておく。
彼女に関しては、場所が分からぬ以上、必要かもしけないけれ
ど、それ以外の靈の事だつてある。

ただでさえ、姫で手一杯だというのに、これ以上、増えられたら、
それこそ今度こそ、死んでしまいかねない。

もし、綺麗な女性との甘い一時を夢見て、僕の事を羨んでいる人が
居るなら、何度も口を酸っぱくして言おう。

性格の悪い美人ほど手に終えない物はない、と。

特に、歳と経験を重ねた女性なんかは、理解の範疇外の話しだ、と。

それでも、夢見る事を忘れない人なら、その時は、彼女を貸そう。
彼女と一緒にいれば、嫌でも分かる。
そのあまりにものひどさに。

毎日毎日、もう泣きそうになるほど、一いつは全く手を出せないと
いうのに、誘惑され、迫られ、押し倒されるのだ。

確実に、そのストレスで、白髪が増えるか、ハゲるはずだ。
僕だって、最近、ストレスのせいか、抜け毛が増えてきて、ハゲや
しないか、戦々恐々の日々を過ごしているのだ。
もし「冗談だと思っている人がいるなら、僕が入った後の浴場を見て
みるといい。

排水溝に抜けた僕の髪が溜まっているはずだ。

それでも、本当にそれでも、まだ羨むと言つのなら、僕はその人を
心の底から尊敬したいと思つ。

その勇敢な心意気に。

それと同時に、その無謀な諸行に呆れもするだらうけど。

「ふあああ

まあ、そんな冗談はさておき、そろそろ毎晩でもしてみよう。
睡眠不足を解消するにはついつけなのだ、ここに寝ることで寝
ると言うのだ。

僕は、そつと瞳を閉じて、眠りに付いた。

第三話 八月三十一日・後篇（後書き）

とりあえず、これで、八月三十一日編は終了です。
このくそ寒い時期にやるネタじゃあないですか
気にならないでください　ｗｗ

第四話 九月一日・幻想（前書き）

ちょっとやばめかもしだせんね。
でもでも、大丈夫……
だと思いたい。
てか、大丈夫だと願いたい。
ホント、僕つて、どうにもこんな感じのきわどいネタが好きなんですよねえ。

海上に写る街のネオン。

その色とりどりな輝きは、陳腐な表現だが、まるで宝石箱のようで、見るもの全てを魅了する。けれど、それを窓越しに眺める僕には、どこにも熱はなく、むしろ、まるでそれには、一片の見るべき価値は見受けられないとも言つてゐるかのように、どこか冷めたような眼で見ている。

いや、真実、それには見るべき価値などない。

それ以上に、見るべき物、愛るべき物がすぐそばにあるのだ。

視線の先を窓から部屋の中に変える。

キングサイズのベッドが一つにテーブルセットが置いてあるだけの部屋。

宿泊だけを目的とした部屋である事がすぐに見て取れる。

けれど、宿泊目的だけの部屋にしては、そこは、まるでおどぎ話に出てくるお城のように、一つ一つ丹精込められた豪奢な小物が、全く嫌味にならないほど、極自然に置かれている。

確かに、それは海の上に散らばる偽物の宝石よりも、ずっとずっと価値はあるだろう。

例えば、自分のすぐ傍に置いてある何でもなさそうな花瓶。

けれど、そこに、施されている装飾は、美しい女神の裸体を、植物のつたが複雑に絡み合い、決して下卑たいやらしさなどない、上品で高貴な色気をかもし出しており、その価値は、一般サラリーマンの年収にも匹敵するほどの物。

家宝にするには、十分な代物であり、また、眼の保養にする事も可能だろう。

僕とて、その花瓶の美しさには、心を奪われかけた。

けれど、それが、僕の言つてゐる見るべき物、愛るべき物かと聞かれたら、答えはノーだ。

それよりも、もっと美しく、もっと心奪われる存在が、すぐ傍にある。

僕は、また視線の先を変える。

今度は、ベッド。

いや、違うか、ベッドの上にある存在。

まるで神々の芸術作品かと思わずにはいられない、至高の存在。

極上のビロードを闇夜の空に広がる漆黒で染めたような髪。高純度でその先が見えてしまいそうなほど美しく澄んだ黒曜石のような瞳。シミやそばかすなどが全く見られない白磁器のような白く滑らかな肌。抱きしめれば脆く優しく折れてしまいそうなほど華奢でありながら、出るべきところはしっかりと出ている肢体。

その一つ一つが強烈に己の美しさを象徴しているが、決してそれがいびつになる事はなく、むしろしつかりとした調和が取れている。まさしく、それは、完成された美。

誰もが羨み、望み、手を伸ばしながらも、決して届く事などない至高の存在。

その芸術作品……彼女の名は、姫。

そして、彼女こそ、見るべき、愛るべき存在。僕が心の奥底から、愛さなくてはならない存在。不意に眼が合つた。

相変わらず、澄んだ黒瞳は、僕の胸を、心を射抜き、誘つ。

それが、彼女の合図。

僕は、そつと一步踏み出し彼女に近づく。

緊張しているのか、はたまた期待しているのか、彼女の頬や肌は、上気して薄いピンク色に染まっている。更に一步踏み出す。

美貌の女性は、もう僕の目の前。

手をほんの少し伸ばしただけで、彼女に振れる事も、この腕で抱きしめる事も、更にそれ以上の事も出来る。

頭の中に、僕の腕の中に包まれる彼女の姿が浮かぶ。

惜しげもなくさらされた裸体。その姿は、まるで花瓶に描かれた女神のよう、エロティックながらも、全くいやらしさなどなく、どこか神々しさを秘めている。

彼女が瞳を閉じる。

先ほどまで強烈に惹き付けていた黒瞳は、姿を隠したが、逆にそれがよりいつそう強い瞳の印象を与える。

もう一度あの澄んだ瞳を見たい、と。

そして、その瞳を見るためには、何をすべきなのか、と。

僕は、手を伸ばし彼女の肩に手を回す。

彼女が何を望んでいるのか。

そんな事、閉じた瞳を見れば分かる。

そつと彼女の唇を指でなぞる。

ふつくりと弾力のあるそれは、僕の指を軽く弾きながらも、どこかでしつかりと吸い付くようにしてまとわり付く。

「焦らないで」

その行為の後、彼女は瞳を閉じまま、ねだるよつよつと舌く。

その声は砂糖菓子のように甘く、吐かれた吐息は、首筋を優しく、撫でる。

一瞬、被虐心のうつそくに火が灯り、このままもう少しの間焦らしてみようかと思ったが、すぐに切り捨てた。

確かに、このまま、彼女を焦らしてみるのも楽しいだらう。仔猫のように甘えてくる彼女は、美しいその外見とは違つて、愛らしくて、可愛らしくみえる。

けれど、だからこそ、そこに盲点があるのだ。

美しいながらも、愛らしく、可愛らしい彼女。

その姿が、僕の心の中にある男の部分を、強烈に刺激し、理性の鎖などあつさり引きちぎつてしまえと甘く誘惑するのだ。

そして、それに耐える必要など、今ここにはない。

僕は彼女を求め、彼女もまた僕を求め、受け入れている。

焦らすという行為を行う気などすぐに消えてなくなってしまったの

だ。

彼女の肩を抱く力を本の少しだけ強める。
彼女がそれに小さく反応したが、気にせず、彼女との距離を縮める。
彼女の吐く息は、既に耳よりも肌で感じるほつが早く、まだ触れ合つてもいのに、僕の唇は熱く熱を持っている。

興奮しているのだろう。

この神々の芸術作品である彼女の唇を我が物にできる事を。
更には、それから起るであろう出来事に。

瞳を閉じる。

上気し、熱を持った朱色の頬を、彼女の照れたような表情を見てみたいと思つたが、キスをするときに、それをするのは野暮な事。瞳は閉じ、心の眼で、彼女の姿を捉える事こそ、この瞬間に相応しい。

一瞬だけ止めた動きを再開する。彼女の息遣いが、心音が、瞳を閉じた事によって、さらに強く感じられる。
そして、もう後一コマ。

次の瞬間には、唇が触れる。

第五話 九月一日 一人だけのブレックファースト（前書き）

まあ、いろいろあつて予定遅れて一日開きましたwww

第五話 九月一日 一人だけのブレックファースト

「ぬあ！」

もう少しで触れる、そう思つと同時に、眼を開け、その場から飛びのいた。

既に、僕の眼が捉えている世界は、先ほどまであった豪奢で煌びやかな物ではなく、普段良く眼にする世界。

いつも、僕が過ぎす世界。

そう、自分の部屋が写つている。カーテンの脇から陽光がわずかながらも差し、ベッドを照らしている。

そして、そのベッドの上には

「あいたたたた」

姫がいた。

ただ、その姫もまた、先ほどとは違い、しっかりと服を着てている。つまり、先ほどまで見ていた物は、夢、と言つ事。

まあ、だいたい、キャラが違ひすぎるのだから、すぐに分かる事だろう。

あんなキザつた台詞や、いかにも女性慣れしてますよ、と言わんばかりの仕草のどれを取つても、僕には繋がらない。

と言うよりも、僕の本当の姿と全く逆方向に向かつている。

「もう、女の子には優しくしなさいよね」

ベッドで打ちつけてしまつたのだろう。しばらく、頭をさすつてい

た彼女が、ぼやきながら、ベッドから降りてくる。

「なら、寝込みを襲うのは止めて欲しいものだね」

けれど、言わせてもらえば、それは自業自得。

彼女が性慾りもなく、眠つてている僕にちよつかいを出すからそうなるのだ。

一応、僕は寝るときにも簡易結界をはつてている。

もちろん、僕程度の力では、彼女の事を近づけさせないような事は出来ないし、眠っているのだから、意思の力が働かず、結界自体の効力も弱くなってしまう。

けれど、その代わりと言つてはなんだが、その結界に触れた途端に、眼が覚める。

どうも、僕のはつてている結界は、僕自身に直結しているらしく、それに触れられると、まるで、自分の身体を触れられたよつて感じるため、眼が覚めてしまうのだ。

そして、眠りが浅いとき、つまり、人が夢を見るよつなタイミングで、結界を触れる、または越えた場合は、夢にも影響を与えるのだ。もちろん、あんな場面は年頃の僕にしてみれば、心臓に悪いし、彼女が結界に触れるたびに眼が覚めるのだ。

正直勘弁して欲しい事なのだが、

「由貴が隙を見せるのが悪いのよ

目の前にいる女性は、悪びれることなく、あつさつとそつ答えてくれる。

全く、悪いともなんとも思つていらないのだろう。

まあ、悪いと思つていれば、僕に憑いたり、迫つて来たりなんてしないだろう。

きつと、言つだけ無駄なのだ。

「……さつさと着替えるか」

内心でため息をつくと、服に手をかける。

すぐ傍に、姫がいるけど、気にしない事にする。

どうせ、出て言つてくれ、と言つたところで聞いてくれない事は承知済みの事。

以前、かなり口を酸っぱくして言つたときも全く聞いてくれなかつたのだ。

なら、言つだけ無駄と言つ事だろ。

こと彼女の事に関しては、もう無駄な事はしたくない。

と言つよりも、そんな事をする余裕なんてない、と言つのが正しい

とにかくなんだろうけども。

前田の内にハンガーにかけておいた制服に袖を通すと、部屋を出る。それに留つよみうりして、彼女も僕に付いて出でくる。

もちろん、姿は消して、である。

階下に降り、ダイニングに向かう。

けれど、そこには、朝食どころか、母親の姿すらない。

まあ、今日は始業式。

午前中で終わつてしまつため、弁当はいらぬ。

おまけに、母は低血圧のため、朝に非常に弱く、なかなか起きられない。

つまり、お弁当の準備をしないでいいんだから、ついでに朝食の準備だつてしなくてもいいだらうと考へ、完全にベッドの中ですやすやとお休み中なのだ。

まあ、だからと言つて、普通に弁当がいる田にて、朝食を作ってくれているのかと言つと、そういうわけでもなく、パンや朝食の材料に、インスタントのスープ類があるのでから、自分でどうにかしが、と、完全に僕任せにしている。

とはいへ、僕とて、そんなに料理がうまいわけでもなければ、作る事に生きがいを感じているような人間でもないので、たいていは、パンとインスタントコーヒーですませてしまつ。

まあ、そのせいで、三限目あたりで、お腹の虫が鳴りだしてしまうけれども。

それはさておき、壁にかけてある時計を見る。

部屋を出る際に、時計を全く見ずに来てしまつたため、時刻が全く分からぬ。

目覚ましなんかをかけていれば、まだ、見る機会もあるだらうが、残念ながら、そんな物は、僕の部屋にはないし、それ以前にかけない。

かけるだけ、無駄なのだ。

姫がちょっとかいを出してくるせいで、田覚ましが鳴るよりも早く、

眼が覚めてしまつた。

そつ言う意味では、彼女のせよつかいも少しごらい感謝してやつてもいいんじやないか、と思うかもしれないが、それをやられるのが早朝なのだ。

ただでさえ、彼女のせいで寝付くのが遅いのに、そんなに早く起きたては、まともに休む事が出来ない。

案の定、今日もまた時計を見てみれば、針は六時を差している。

高校は、八時半までに登校すれば良く、距離的に見ても非常に近いため、歩きでも十分程度で付いてしまう。

そのため、七時過ぎに起きても十分に間に合つた。だというのに、こんな早い時間に起こされると、逆にする」とがなく、暇をもてあます事になるため、彼女のやつている事は非常に迷惑なのだ。

だからと言つて、文句を言つたところで、素直に言つ事を聞く彼女でもないのだから、何も言えない。

それなら、無駄に労力を使つよりも、もつと別に使つべきだ。彼女のせいでも、時間はいくらでもありまつていいのだ。

冷蔵庫を開けて、中身をチェックする。

とはいえ、朝の早い時間にやる事なんて限られる。

せいぜい、朝食作りぐらいだ。

けれど、大した腕をしてるわけでもない僕なのだ、当然作れる物は限られている。

冷蔵庫の中から、卵とベーコンを取り出すと、閉める。

この材料で分かる通り、作るのはベーコンエッグだ。

それに、食パンとインスタントスープとインスタントコーヒーをつけておしまいだ。

インスタントが多いような気がするが、インスタントじゃないと作れないのだから、どうしようもない。

もちろん、エプロンを着ておく事も忘れない。

油とかがはねて、制服が汚れでもしたら、きっと母に小言を言われ

てしまつ。

食パンをトースターに入れて、タイマーをセットし、ガスコンロに火をつけ、フライパンを暖め、温まつたところで、油を入れ、フライパン全体になじませる。

それに、合わせて、卵をフライパンの上で割り、僕は半熟で片面焼き派のため、少量の水を入れて、ふたをする。

しばらく、待つた後、ふたを開けると、水蒸気が、ぱあつ、と視界に広がる。

朝とは言え、まだまだ暑さの残るこの時期に、熱い水蒸気を浴びるのは少々辛いが、我慢するしかないだろう。

水蒸気が全部飛んだところで、蒸らしている間に取つてきた皿に、目玉焼きを盛り、ガスコンロのスイッチは切り、ベーコンは余熱で温める。

かりかりのベーコンも好きなのは好きだが、少々柔らかさが残つたベーコンも割りと好きなのだ。

まあ、ベーコン好きが聞いたら、邪道だ、と呼ばれるかもしけないが、それでも、僕はそれが好きなのだ。

それはさておき、「一ヒーカップとマグカップをそれぞれ出すると、それぞれに合つた物を入れ、お湯を注ぐ。

それと同時に、それなりに芳しい匂いが鼻腔を掠める。

安価なものだけれども、それでも、大して肥えていない僕の舌を満足させるには十分なものだ。

チーン

そして、そういうしている間に、どうやら、トーストの方も焼けたらしく、トースターの小氣味いい軽快な音が鳴つた。

それを取り出すと、マーガリンを塗る。

ジャムとかもいいけど、あれだと少々しんなりとしすぎるので、

やっぱり、トーストは、芳ばしい香りにさくさくとした食感をしてないと食べた氣にはならない。

「いただきます」

それら全てを準備し終えると、Hプロンを脱ぎ、元の場所に戻し、席に付き、そう言って手を合わせてから、朝食を取り始める。なんだか、その動作は子供っぽく見えるが、昔からやっているため、どうしても抜けないのだ。

まあ、食卓での行儀を考えると当然の事と言えば当然の事なのが。「ねえ、私には何もないの？」

トーストにかじりついたところで、不意に隣に浮かんでいる彼女がそう尋ねる。

僕が朝食を食べようとしている姿を見て、彼女もまたお腹がすいたのだろう。

まあ、かれこれ僕に憑いてから何も食べていないのだ、その状態で、目の前で何か食べられていたら、そう思つてしまつてもしかたないだろう。

「ない」

だからと言つて、彼女に出すものは、やはりない。

普通に人が食べるもののじや、飢えがしのげるわけでもないし、だからと言って、魂なんて物をやるつもりは毛頭ない。

それに、別に彼女は何かを食べなければ消えてしまつと言つわけでもない。

あくまで、彼女にエネルギーが必要なのは、実体化するためだけの事であつて、靈として存在するには必要ない。

よつて、僕が彼女の餌になつてやる必要もないと言つわけだ。

まあ、例え、消えてしまつとしても、餌になつてやるつもりはない。せつかく、邪魔者が消えてくれる絶好の機会なのだ、見逃す手はないだろう。

ただし、そうなれば、彼女もまた、かなり手段を選ばないようになるかもしない。

自分が消えてしまうのだ。彼女もなりふりかまわなくなるだろう。

そう考へると、今の状態で助かったのかもしれない。

呑気にそんな事を考へながら、朝食の続きを再開する。

なんだかんだ言つて、かなりきつい状況ながらも、少々の救いはあるみたいだ。

不幸中の幸いと言つのはこの事なのだろう。

ただ、やはり釈然としないものは心に残るが。

「むー、けち。いいじゃん、少しごらい」

いまだ隣でふわふわと浮いていた彼女が、恨めしげな目をしながら、僕の頬をつつく。

どうやら、少し拗ねているのだろうが、そんなものは無視してもかまわないだろう。

下手にかまつて、迫られたらたまつたものじゃない。

とは言え、それにしても、彼女もまた器用な事をしてくれる。
実体化していなければ、もちろん、彼女は僕に触れる事は出来ない。
そのため、僕の頬をつつくために、わざわざ指だけを実体化してい
る。

ただ、まだ僕は彼女が見えるから、かまわないかもしれないけれど、もし、見えない人が見たら、卒倒物だ。

空中に指だけが浮いて見えるのだから、怪奇現象以外なんでもない
だろう。

それを考えたら、すぐさまやめさせるべきなんだろうが、幸い、ま
だ誰も起きていないし、眼下のところ、彼女の事は無視する方向。
なら、言う必要もないだろう。

せめて、食事の時間の時だけは静かにしたい。

もちろん、にぎやかなのも嫌いなわけじゃないけど、彼女との場合
は、にぎやかではなく、騒がしいのであって、疲れるだけだから、
その範疇には入らないだろう。

第六話 九月一日 お支度タイム

「「ううそつせーま」

ふにふにと頬を彼女につつかれながらも、箸を進め、綺麗に完食する。

比較的食べるのが早い僕なのだけれども、やはり彼女の邪魔が気になつて、意外と時間がかかつてしまつた。

時計を見てみれば、既に時計の針は七時を指そうとしていた。
まあ、時間が有り余つていたのだから、ちよつどいこといえばちようどいのかもしれないが、なんとなく時間の無駄遣いをしてしまつた感が否めない。

「はい、邪魔

相変わらず、飽きもせずに僕の頬をつづいている彼女を、そつ言つて、どかすと、食器をまとめて洗い場に持つて行く。
その場に置いておいても、母は洗つてくれない。

作るのが自分ならば、洗うのも自分。最後まで自分が責任持つてやれ、との事なのだが、たぶん、自分でやるのが面倒なだけだろう。
うちの母の面倒くさがりは筋金入りなだけに、十分に考えられる。
先ほど使つていたエプロンを再度着直すと、軽く水でゆすいだ後、洗剤を泡立てたスポンジで磨き、また水でゆすいで汚れを落とす。

「汚れがまだ残つてゐる

「うるさいな、分かつてゐよ」

一旦水でゆすいだ後、まだ落としきれていない汚れがあつたのだが、
目ざとく見つけた彼女は横でぼそりと呟く。
なんだか、物凄く腹が立つた。

まるで姑の嫁いびりのようで、お前は、ビニの姑だ、と突つ込みたくなる。

もう一度、磨きなおして、水でゆすぐ。

今度はしっかりと汚れは落ちたらしく、軽く水を切ると流し台にか

けておく。

そうすれば、後は勝手に乾くだろう。

「はい、由貴の朝ご飯も終わつたわけだし、次は私の番だよね」「どこか洗剤臭さを残す手を、軽く水でゆすいでから、傍にかけておいたタオルで拭くと、エプロンを脱いで元の場所に戻したところで、彼女は再度おねだりを始めた。

どれだけおねだりされたところで、僕が了承する事はないのだから、蒸し返さないで欲しい。

「ほらほら、さつさと田を閉じてしまいなさいって。そうすれば、後は、お姉さんがしつかりとリードしてあげるから」
なので、それを相手にせずにいたのだが、さらに、言い募つてくるが、それを無視すると、洗面所に向かう。

少々煩わしかつたのもあるが、朝食が終われば、次は歯磨きをしなくてはいけない。

朝食を食べる前に歯磨きをする人もいるが、僕にはどうしてもそれが納得できない。

歯磨きと言つのは、口の中を綺麗にするための行為。なのに、朝食を食べる前に歯磨きをしてしまつては、それは無意味としか思えない。

食べたら結局また汚れてしまう。

それとも、また、食べた後に歯磨きをすると言つのだらうか。

なんだか、それじゃ食べる前にした歯磨きの方が無意味にも思える。洗面所に立てかけてある歯ブラシを取ると、水で一旦ぬらした後、歯磨き粉を付け、再度ぬらすと、口の中に入れ、磨き始める。泡立ちのいいそれのおかげで、口の中はすでに泡だらけ。

それを使って、綺麗に歯垢を落としていく。

とは言つても、一応、毎食後に歯磨きをするよつむがけているため、そんなに汚れてはいない。

それに、元々、僕がしつかりと歯磨きをするのは、コーヒーが理由なのだ。

母に似たせいか、少々低血圧で、朝に弱いところがある。

そのため、目を覚ますためには、どうしても、カフェインが欲しくなり、コーヒーに手を伸ばしてしまつ。

もちろん、コーヒーを飲み過ぎると、歯は黄ばみ、口を開けて笑うわけにもいかない状態にまでなる事もある。そんな不潔そうな口の中を見せられるほど、羞恥心が欠如しているわけではない。

結局、出来る限り白い歯を見せるためには、しっかりと歯磨きをするしかないのだ。

五分ほどかけてしっかりと磨くと、口をゆすぐ。

どこかのテレビ番組で言っていたけれど、口の中の歯垢を全て除去するためには最低でも十分必要らしい。

それぐらいやらないと、細かい部分まで綺麗にならないのだろうが、そんなに長い間、歯磨きなんてしていられない。

そんなに長い間口に入れていたら、歯磨き粉は唾液で、泡立ちが悪くなるだらうし、そもそも口の中が歯磨き粉の味で気持ち悪くなってしまう。

それに、僕はあくまでも、黄ばみ防止のためにやっているわけで、完璧に歯垢を落とすつもりはない。

それを聞いて、眉間にしわを寄せるような人もいるかも知れないが、何を言われたところで僕は頷いたりはしないだらう。

人として最低限の身だしなみさえ整えられればそれで僕は十分なのだ。

綺麗に口の中をぬすぎ終えると、洗顔フォームを手に取り、顔を洗い始める。

普通なら、起きてすぐにやる事なんだろうけど、どうせ朝食を食べた後に、歯磨きをしに来るのだから、その時に呑わせてやってしまつまうが、効率的なので、後回しにしてしまつのだ。

もちろん、髪のセットも、このときにあわせてやる。まあ、髪はそんなに長くないし、そもそも髪型にこだわりだわって

いるわけでもない。

せいぜい、寝癖を直す程度なので、すぐに終わる。

身支度をすつかり終えると、洗面所を出ると、自分の部屋に戻る。背後を見てみれば、洗面所に行くときには置いてきたはずの姫が、いつの間にか、僕の後ろにぴったりとくっついていた。

うつかりと物には触れないため、暇つぶしはできないし、僕以外と話せるわけでもないのだから、僕に引っ付いているしかないだろう。とは言つても、別に部屋に戻つてもすぐに、下に降りるので、付いて来る必要はないが。

僕が部屋に戻つてきたのは、単に、カバンを取りに戻つただけの事。始業式だけなので、当然荷物はなく、本当なら持つていく必要もないのだけど、さすがに手ぶらで学校に行くわけにもいかない。机の上に置いておいたそれを手に取ると、すぐに部屋を出る。

そして、相変わらず姫はその後ろをひょこひょこと付いてくる。

なんだか、知らない人が見たら、変な二人組みだと思われるだろう。またはご主人様とそれになつく仔犬みたいな構図だろうか。

実際は、彼女の方が圧倒的有利な立場にいるわけだから、その構図には当てはまらないだろうが。

どちらにしろ、変なのには変わりはない。

それをやる羽目になつている僕ですら、変な二人組みだと思つているわけだし。

ただ、彼女の方は全く気にするどころか、むしろ、憑いているわけだから、当然と思つてゐるだろつ。

第七話 九月一日 学校へ行こう。

階下に降りて、玄関にカバンを置いておくと、リビングに入る。壁にかけてある時計を見ると、時刻は、七時半前。家を出るにはまだまだ早い。

内心でため息を吐きつつも、とりあえず、テレビを付けてみるが、興味の惹かれるような物はなく、むしろ、朝から萎えてしまいそうなニュースばかりが流れている。

政治家の汚職やら、凶悪犯罪、異常気象など、明らかにマイナスのニュースなんて流さずに、もう少し、元気の沸いてくるような明るい物を流して欲しいものだ。

「あ、お兄ちゃん、もう起きてたんだ？」

テレビを消して、新聞でも取りに行こうかと、立ち上がりつとしたりで、声がした。

突然の事で、思わずびっくりと反応して、そのままの勢いで振り返ったのだが、そこには妹の美樹の姿があった。
まあ、この家に、僕の事を『お兄ちゃん』なんて呼ぶのは一人しかいないから、すぐに分かるといえば分かるのだが。
「眼が覚めちまつたからな」

「ふーん。いつもは冬眠中の熊よろしく清眠をむさぼっているのに、珍しい事もあるんだね」

とはいって、この妹が本当に可愛くない。

兄の欲田じやないが、顔に關しては割りと整っているし、スタイルだってそんなに悪くないため、学校ではそれなりにモテるみたいではあるのだが、口を開くとがらりと印象が変わる。
少々きついところがある。

今みたいに、くすくすと笑いながらひり皮肉を言つ事なんてしつちゅうだ。

「て、うわっ。もしかして、もつこ飯食べて終わってるの?何、お

兄ちゃん、槍でも降らしたいわけ？」

しかも、流し台に僕が使い終わった食器が並んであるのを見つけると、大げさに驚いて見せ、更に続けてくれる。

本当に可愛くない妹だ。

確かに僕は、美樹の言つとおり、朝に弱くて中々起きず、布団の中でごろごろとしてしまっていたが、だからといって、そう言つ言い方はないと思つ。

僕だつて、普通に朝早く起きる事だつてある。

もちろん、今日は姫に邪魔されたから、と言つのが理由だけ、姫に憑かれる前も、起きれるときは普通に起きていたのだ。

もう少し兄を敬つて欲しい。

「そりや、ちようどいいな。槍なんかが降つてくれれば、学校に行かなくてすむし」

だからと言つて、そんな事を言つたところで、美樹はまともに取り合はないのは、分かつてるので、適当に流しておく。

この家の力関係は、完璧に決まつてしまつていて。

一番強いのが、母。

財布の紐を握つているのと家事の一切を取り仕切つているのだから、逆らえない。

次に来るのが、美樹。

皮肉屋で毒舌家、かなりきつい事を言つし、何より目つきが悪い。ややつりあがつた切れ長の瞳は、強烈な威圧感を放ち、その目で睨まれでもしたら、すぐさま萎縮してしまう。

以前、母に頼まれて、美樹を起こしに部屋に行つた時、まだまだ眠たかつたのだろう。

軽くノックをしてから、ドアの隙間に頭だけ入れて

『そろそろ起きろ、だつてよ』

背中を向けて眠つている君に向かつてそう言つたのだが

『つるさい。眠い』

首だけを捻つて、静かながらもすっしりとしたプレッシャーを込め

た声で、言い返されたのだが、その時の田なんて、もう本当にすこしかつた。

修羅とか鬼とか、そういうもののすら裸足で逃げ出していくような、それこそ筆舌に尽くしがたいほどの恐怖を植えつけられてしまった。もちろん、その後は、半泣きになりながら謝つて、ほつまつたの体で逃げ出した。

たぶん、あれから、僕と美樹の力関係が決まつてしまつたんだろう。そして、三番田が父。

普通に考えれば、悪くても一番田に来るものだろうが、仕事が忙しいため、ほとんど家にいないため、家の発言権はほとんどないに等しい。

家長であり、一家の大黒柱であるはずの人だと言つのに、少し可哀想な気もするが、それ以上に辛いのは、間違いなく一番弱い立場の僕だ。

靈を無意識の内に引き寄せてしまつという変な体質を持ち、母からは、面倒くさいからと言つて家事を押し付けられ、断る食事抜きと脅される。

妹には、その恐ろしさから頭が上がりず、常に皮肉と毒舌を浴びせられる。

父には、家で肩身の狭い、と嘆く愚痴を延々と聞かされ、お酒を飲みだすと泣きながら絡まれる。

もう、家にはどこにも僕が力を發揮する場所などないのだ。いよいよに周りにいじられるだけなのだ。

しかも、唯一のオアシスだった自分の部屋も姉に侵略されてしまつてている。

これを、辛いといわずに何を辛いと言おうか。

とりあえず、普通の人なら家出を考えてもおかしくない。

例え、そなならなかつたとしても、きっとこんな生活に耐えられるわけがない。

こうして、まともに志田家が機能しているのは、ひとえに僕が我慢

に我慢を重ね、耐え忍び、損な役回りを一手に引き受けってきたからこそだ。

そのところをしっかりと理解して、むしろ感謝して欲しいものだ。
「お兄ちゃん、邪魔。テレビ見ないんだつたら、テレビの前に陣取らないでよ」

そんな心からの願いをあつさり打ち砕き、僕を押しのけて、座りこむ。

しかも、蹴り倒して、だ。

我が妹ながら、本当に足癖の悪い。

だからと言って、文句を言つたところ

『邪魔だから悪いのよ』

そんな事を言つて、にらまれてしまつのがおちだ。

本当にいい性格をしている。

「……学校にでも行くか」

結局、僕には逃げる道しかない。

ため息をつきつつ、ぼやきながら、玄関に向かつ。

リビングを出る途中に、一応時計を見てみたが、八時前。ぎりぎり登校するのは、あまり好きじゃないから、家を出るのにはちょうどいい時間帯なのだが、家を出る理由はかなり情けない。靴を履き、玄関に置き去りにしておいたカバンを手に取り

「いってきます」

そう言つて、家を出る。

ただ、誰からも返事はない。

母はいまだに夢の世界だろうし、父は仕事で出張中のため不在、美

樹はたぶん無視。

なんだか、本当に、やるせなくなつてくる。

家族がいるはずなのに、どうして、一人暮らしの独身男性の寂しい出勤みたいな事をしないといけないのだろう。誰でもいいから、せめて一人ぐらい

『いってらっしゃい』

そう言つて欲しいものだ。

そうなれば、今日一日も頑張らつと誓ひ氣にもなれると誓ひに。元の通りにならぬと、これで、今日何度目になるか分からぬいため息をつくと、歩を進める。

外に出ても、まだ朝のため、うだるような暑さではないが、それでも、やはり十分に暑く、学校に付く頃には汗だくとまではいかないだろうが、確実に汗で制服をぬらす事になる。

せつかく新学期が始まるというのに、これでは、爽やかさなど微塵も感じられないものになつてしまつ。

心機一転、高校でリフレッシュしようと思つて、出鼻からくじかれてしまつた。

どうやら、神様はどこまでも、残酷らしい。

しかも、更に試練をお与えになつてくれるらしく、その場に立ち止まり、そのまま視線を横に変える。

登校の時は誰とも約束していない。

そのため、基本的に一人なので、隣には本来なら誰もいなはず。だけど、家を出た時から、僕の隣にはずっと人の気配。いや、実際は人じやないんだから、そういう方は間違いなんだろうけど、それ以外にうまい表現の仕方を僕は知らないから、結局そう言うしかない。

それに気にするべきはそんな事じゃなくて、隣にいる存在。ふわふわと浮いて、僕に付いて来ている輩だ。

ある程度覚悟はしていたが、本当に付いてくるとは思わなかつた。というよりも、思いたくなかつた。

「どうしたのよ、こんなところで立ち止まつて」

呑気にふわふわと浮いているもの 姉は、急に立ち止まつた僕を見て訝しげにそう尋ねる。家にいた間も一緒にいる事をさも当然そうにしていたんだから、僕がくつづいて来ている事に対して、頭を痛めているとは全く思っていないのだろう。

「なんで付いて来るわけ？」

トラブルメーカーである彼女を学校につれていけば、せつと騒ぎを起こしてくれるだろう。

静かに僕の傍でふわふわ浮いているだけならいいだろうが、落ち着きのない彼女だ、うるちゅるして、問題を起こしてくれるに違いない。

しかも、今日は退屈な式なのだ、絶対に、我慢なんて出来ないだろう。

「別にいいじゃない。家にいたって暇だし」

とはいって、だからと言って、家に押し込んでおいたところで、また問題は起こしてくれるだろう。

昨日、昼寝をして、しっかりと休養を終えた後、自宅に帰ってきたら、本当に大変だった。

しまったはずのマンガ本をまた引っ張り出していたかと思うと、過去の再現かのように、床中に本を散乱させていたのだ。

彼女を置いて出て行つた時にある程度覚悟していたのだが、まさかここまでとは、と思うような惨劇だったのだ。

もちろん、また母にそれが見つかって、じつにじとじぼられてしまった。

「それとも何？私が行っちゃいけないとでも言つつもり？」

よつて、まだ、家に置いて行くよりかはましだらうが、だからと言つて、素直に連れて行くわけにもいかない。

やっぱり、騒ぎを起こされるわけにはいかないし、何よりせめて学校ぐらには安息の地にしておきたい。

「いや、別に。ただ、あんまり騒がないよう

とはいっても無駄だろう。

彼女も僕が通つている高校の事は知つていて、置いて言つたとしても、勝手に来るだろう。

そうなれば、もう彼女の独断場。

僕を探すためだとでも言つて、やりたい放題やつて、騒ぎを起こしてくれるに違いない。

なら、最初から、一緒にいて、彼女が暴走しないように気を配つて置くほうが、まだなんとかなるかも知れない。

まあ、抑えられる自信はあんまりないけど。

僕が嫌がる事や困る事をやるのが大好きな彼女なのだ。

嬉々として僕の事をいじつてくるだろう。

結局、どうあがいても、僕に心休まる場所はないと言つわけだ。

第八話 九月一日 姫と僕の痛い登校風景

しばらく歩いた後にようやく学校が見え始めた。

ここに来るまで、本当に苦労した。

元々、家の中にいたときのまま出てきたために、彼女は姿を消しているため、周りには見えない。

そのため、基本的に、端から見れば、僕のやっている事は、誰もない虚空に向かつて話しかけている、ちょっと痛い人だ。

その時は、運良く誰もいなかつたため、変な目で見る事はなかつたので、助かつたけれど、いつまでも、そんな事をしていくわけにもいかない。

通学路のど真ん中なのだ。いつ人が通るかわからない。

すぐに、会話を打ち切り、歩き始めたのだけれども、そんな僕の立場など無視して、彼女は延々と話し続け、相手にされないと分かると、今度はいきなり実体化しようとしたのだ。

彼女にしてみれば、相手にされないのは、姿が見えないから、つまり姿が見えれば、相手にしてくれる。

そう単純に考えただけの事なのだろうが、僕にしてみれば、たまたものじやなかつた。

いくら実体化されたところで、部外者である彼女は学校には入れないから、追い出される事になるのは必至の事で、おまけに、容姿に関しては、飛びぬけていいから、周りにかなりバッシングされるだろう。

そして、それ以上に、問題なのは、状況なのだ。

もちろん、その時には既に、周りに人がいたため、いきなり、先ほどまでいなかつた人間が、ぽんと出てこられたら、静かな朝の一時をぶち壊す大騒動になつてしまつ。

慌てて、小声で止めたから、なんとかなつたけれど、もし僕の対応が一瞬でも遅く、彼女が実体化するような事になつていたら、ぞつ

としない。

結局、そのままなし崩し的に、小声でぼそぼそと彼女と会話をしたのだが、その光景が少々怪しすぎて、痛い人を見るような目で数人に見られてしまった。

こう言うとき、テレパシーみたいなものが出来ればいいと思うのだが、現実はやっぱりそううまくはいかないらしい。

まあ、憑かれていると言つても、別々の存在なのだ。

魂が繋がっているわけでもないのだから、頭の中だけで会話しようというのも無理な話だろう。

「とりあえず、ここからは、黙つていて。話しかけても、答えられないから」

なので、話をするためには、言葉にしなければならないけれども、さすがに学校に憑いたらそんな事も言えない。

まだ、お互い知らないような相手なら、どんなふうに思われても我慢できるが、さすがにクラスメイトや友人にまで痛い人だとは思われたくない。

まあ、一応、僕が靈に憑かれやすい体质だと言う事は、友人だけなら知っているから、彼らの前に關してなら相手してやる事は可能なのかも知れないけれども、あんまり広めるような事はしたくない。もし、彼女が、美人だと知れば、絶対に実体化させようとするだろう。

僕の周りには基本的に飢えた獸ばかり、きっとなりふり構わず迫つてくるだろうし、おもしろそうな事が大好きな姫はきっと勝手に実体化しようとするだろう。

そうなつたら、もう僕では收拾はつかなさそうだ。

「えー、やだ。相手しないと人前で襲うよ？」

「お願いだから、それだけは勘弁」

だから、一番無難な方法を選んだのだが、当の本人は全く納得いかないようす。

まあ、一人でふわふわ浮いてるだけじゃ、確かにおもしろくないの

は分かるし、僕に話しあうになつてもういたがるのも仕方ないだろ
う。

ただ、どうして、脅し文句がそれなのだ。

これじゃ、まったく立場があべこべだ。

普通、そういう言葉は男の人が女人の人に言つものだし、やつであつ
ても、言つ人自体はほとんどない。

その言葉を言つ自体で、もう犯罪だ、手が後ろに回つても文句は言
えない。

なのに、彼女は、そんな危険な言葉を平氣で言つ。

いつたいどんな頭の仕組みをすれば、やつてつ発想になるのか、教
えて欲しいものだ。

「んじや、相手しなさい」

「だから、無理だつてば。帰つてからしつかりと相手してやるから、
我慢してくれつて」

とはいへ、今はそんな事を議論している暇はない。

もう、どんどん学校は近づき、校門は田の前にある。

これ以上、ぼそぼそと独り言のよつに話すにも限界がある。

「……分かったわよ。その代わり、帰つたらしつかりとおもひやこ
させてもらうからね?」

だから、何が何でも、彼女には、黙つていてもらわないと困るので
が、ようやく彼女にもそれが分かつたらしい。

後半部分がちょっと怖い気もするが、この際、そんな事は無視だ。
とりあえず、今この場を何とか乗り切れただけでもましだと思つた
い。

「んじや、私は家に戻つているから」

そして、彼女はそう言つと、反転して、今来た道を戻つていく。
どうやら、これ以上、僕にくつついてくるつもりはないらしい。
まあ、話す事も出来ないのでから、一緒にいても仕方ないだらう。
校門をくぐり、昇降口を抜け、そこで、靴を履き替えると、教室に
はいる。

そこには、見慣れたクラスメイトの姿がちらほら。

思わず、その姿を見た瞬間に心の奥底からほつとした。

今の今までずっと休まるときなんてなかつた。

何かしらの制限付きで行動をするしか出来なかつた。

昨日だつて、一応、いつもの場所で昼寝をする事は出来たけれども、結界を張ると言つ条件下での事。

何も気にせず、何もしないでいたられたとこうわけではない。

だけど、今、この瞬間は違う。

確かに、式は退屈だらうし、ホームルームとかで、いろいろと面倒くさい話し合いもあるだらう。

だけど、そんな事は、延々と気を張り続けて、四六時中周りを気にしないといけなかつた事に比べると、蚊に刺された程度だ。もし、こゝして学校にいる限り、姫の魔の手から逃れられると言つのならば、僕は喜んで、いくらでもこの退屈な時間を我慢しよう。

「おはよー」

クラスメイトに、そう声をかける。

僕の席はやや窓際よりの教室の真ん中辺り。

つまり、ものすごく中途半端な場所なわけで、まさしく平々凡々たる僕にぴつたりと言つた感じだらう。

そんな事をぼんやりと考えながら、僕は席に付いた。

第九話 九月一日 苦しい言い訳（前書き）

中途半端に切つたせいで、中途半端な始まり方になっちゃいました

……
なので、まあ、そちらへんは気にしないでください。

……お願いします。

第九話 九月一日 苦しい言い訳

「おはよう。元気にしてたか？」

僕の隣、つまるところ、ちょうど教室のど真ん中の席なのが、今僕に挨拶をしてきた人。

このクラスでは比較的仲のいい友人。

名前は、稻森誠次。

ただ、誠次と言う名の割りには、兄はおらず、一番上。どういうネーミングセンスで、両親は、彼の名前をつけたのか知りたいものだ。

まあ、そんな事を言つたところで、一番変なネーミングセンスを持つてるのは、間違いなくうちの両親だらうけれども。

普通のネーミングセンスを持つてている人間が、男に由貴と名づけるだろうか？

たとえ、いたとしても、自分の苗字を考えたときに、疑問を抱くべきだ。

志亜由貴。

初めて自己紹介された人なんか、絶対『白雪』と勘違いするはずだ。男なのに、白雪。

僕が、まだその名前をネタとして使えるからと言つて、気に入つているからいいかもしれないけれど、もし、それでぐれたりしたらどうするつもりだつたのだろうか。

まあ、うちの母親なら

『結局、ぐれなかつたんだからいいでしょ』

あつたりそう言つてくれるだろうが。

結果論からしてみれば、確かにそれは間違いないんだらうけど、やつぱり少々納得いかない。

「まあ、それなりつてところかな」

「ふーん。それなり、ねえ？」

この際、両親の素晴らしいネーミングセンスは横に置いておいて、カバンの中に突っ込んでおいた筆箱を机の中になまつと、カバンを机の横にあるフックにかけ、答えておく。

とりあえず、クラスメイトとの親交を深めるのもいいだろ。家に帰つたら、それはもうきっと思わず涙を瞑りたくなるような地獄の惨劇が待つていいのだ。

せめて、後生だから、この瞬間ぐらいは、のんびり穏やかに年頃の少年らしく青春を謳歌しても構わないだろう。

やっぱり、青春と言えば、血と汗と涙と友情だ。

そんな言葉は、ひと昔どころかふた昔もみ昔も前のドラマでしか使われない、と、思いつきり突っ込まれるかもしぬないが、そんな事ではくじけない。

今の僕は無敵。

あの何でもかんでも押し付ける、我が家の中の女王である母や、恐怖の魔王である美樹や、傍若無人でわがままな姫はいないのだ。

机にひじを突いて、ぼんやりと窓の外を眺める。

昔は、いつでもできた事だし、そんなに特別な事ではないと思つていたが、今思うと、本当に貴重なものだと思う。

良く失つて初めてその存在の大切さに気付くと言つが、まさしくその通りだ。

ぼんやりとすることが、どれだけ難しいのか、と呟つ事を姫と一緒にいる事でじっくりと学ばせてもらつた。

けれど、今この瞬間は、僕は自由。

僕をこき使つたり、にらんだりするものはいない。

当然、セクハラまがいの発言をしていじり倒して食えるよつた工スキヤラはどこにもいるはずはない……

「あ、そう言えれば、あのいつも一緒にいた後輩とはどうなつたんだ？」一夏のアバンチュールでもしたのか？」
と思つたかった。

けれど、悲しいかな。

やっぱり、そんなに現実は優しくはないらしい。

神様が残酷な人なのだ。

あの三人と離れたところで、神様はしっかりと僕の事をターゲットにしている。

そういう事なのだろう。

ただ、一つ言わせてもらえば、夏休みはほとんど姫のせいで潰れてしまつたのだから、そんな嬉し恥ずかしきわく体験、みたいなことはなかつた。

だいたい、誠次が言つてゐるいつも一緒にいる後輩だつて、単なる僕の体質に関係する知り合いでしかなく、そんな事をしあうような仲ではない。

彼女が以前言つた、僕に簡易結界を教えてくれたり、たちの悪い靈を祓つてくれていた恩人で、良く一緒にいるのは、彼女の傍にいれば、靈が寄つて来ないから、と言う理由だけなのだ。

決して、誠次が思つているような関係ではない。

「……あのね、彼女とはそんな関係じゃないの。ただの先輩と後輩。分かる？」

とはいゝ、だからと言つて、本当の事は言えない。

僕は比較的オープンだし、ネタとして使えるなら別に良いか、と開き直つてゐるからいいけど、彼女の方は僕と違つて、隠してゐる。

彼女の場合は、靈が見えるだけではなくて、それを祓う専門の家系でもある。

僕が彼女に簡易結界なんて、端から見たら胡散臭そうな物を教えてもらえたのも、それがあるからだ。

けれど、もし、彼女が靈能力者、しかも、本職の専門家だと知つたら、おそらく周りは彼女を氣味悪く思つて、遠ざけようとすると思う。

いくら、靈能力者が、世間的に認知されているからと言つて、必ずしも受け入れられてもうえられるとは限らない。

人は、自分の知らない、理解できないものに対しては、少なからず

恐怖を覚えてしまい、敬遠してしまう性質がある。

たぶん、未知の恐怖や危険から逃れるための自衛手段、生存本能から来る物からなんだと思つけど、やはり、実際に敬遠されたら、本当にきつい。

ただ見えるだけの僕ですら、奇異や侮蔑の目で、たまに見られるのだ、僕よりもっとすごい彼女になれば、それはもっとひどいことになつてしまつだらう。

見られるだけではなく、実際に攻撃される可能性だつてあるだらう。「あれだけ親密なのに、ただの後輩なのか? しそつちゅう一緒にいる姿が発見されているのに、それでもただの後輩と言つつもりなのか? 仲良く私服姿でお出かけしている姿も発見されているのに、後輩だなんて言つつもりなのか? 彼女の家に入つていくお前と彼女の姿さえも何度も発見されていると言うのに、まだただの後輩だなんて、いつつもりなのか?」

「うう……」

とはいゝ、さすがに、それでは誠次も納得してくれなかつた。
まあ、誠次の言う通り、僕と彼女は一緒に居過ぎた。

理由が理由なだけにしかたないと言えば仕方ないのだけれど、事情を知らない誠次にしてみれば、年頃の男女がそれだけ親しげに一緒にいれば、そう思つても当然だらう。

普通、ただの先輩と後輩だけの関係で、そんなにしそつちゅう一緒にいたり、拳句の果てに家に上がるような事はない。
絶対何かあると思っても仕方ない。

とはいゝ、何一つ事情を話せない僕にとっては、どう反論しようもないのだ。

「はい、お答えは?」

そして、どどめの一言。

にこにことした笑顔で、そう言つているが、目は全く笑つてはいない。

『今度こそ、眞面目に、しつかり吐け』

暗にそう言つてゐるような目だ。

「好ましくは思つてゐるよ。彼女はどうだか知らないけどね」

結局、白旗を上げるしかなかつた。

とりあえず、少しごらりは誠次の言葉を認めておかないといけないだろう。

ただ、嘘をつかないといけないのは心苦しい。

彼女は、僕に取つては友人だし、恩人だから、好きか嫌いかと言えば、間違いなく好きなのだが、誠次の言うような、恋愛対象としての好きではない。

確かに、見た目は可愛らしいし、性格だつていいから、割ともてるらしいから、そういう対象に思えてもおかしくないが、それでも、やはり僕には彼女にはそういう感情は持てない。

誠次だつて、彼女の姿がいいから、しつこく絡んできたのだろう。ちょっとした嫉妬つて奴だらう。

まあ、その嫉妬のおかげで、こつしてつきたくもない嘘をつかないといけないといけないのは、ちょっと辛いが、

「ふーん、好ましく、ねえ？ これまた、曖昧な言い方だな？」

「悪かつたな、曖昧で」

「まあ、お前はそういう性格だから、仕方ないか。今日はこのぐらいいにしておいてやるよ。ちょっとは素直になつたみたいだしな」

それでも、こうして誤魔化せただけでもましと考えよう。

下手に勘ぐられて、せつかく一生懸命になつて彼女が隠している事がばれるようなことになつてしまつては、目も当てられない。せつかくの恩をあだで返すようなものだ。

「……ありがとよ」

僕は、ため息を吐きながら、そう答えたのだった。

第十話 九月一日 相方な後輩

退屈な始業式も無事終わり、学校は放課となつた。

周りの生徒は散り散りになつて、教室で友人と話したり、恋人とこれからデートの予定を話し合つたりと、各自好きな事をしている。そんな中、僕は、一人静かに、廊下を歩いていた。

とはいえ、だからと言って、そのまま帰るわけではない。

姫の事が心配と言うか、心残りと言うか、早く帰らなかつたら、いつたいどうなるのかが、怖いけど、このまま帰るわけにもいかない。

視線を上げる、ドアの上にあるプレートを見ると

『図書閲覧室』

そう書かれていた。

図書閲覧室、つまりは図書室。

僕の用事とはこれ。

実は、僕は、図書委員に入つていて

とは言つても、自分で立候補したのではなく、他薦で、推薦したのは、誠次。

しかも、その推薦理由が、

『ほら、由貴つて、なんとなく図書室が似合いそうな雰囲気だろ。それに、白雪姫だつて本が好きだつたじゃないか』

そんなわけのわからない物なのだ。

だいたい、白雪姫が、本が好きだなんて、聞いた事ない。

もしかしながら、『不思議の国のアリス』と、『こちや混ぜにして、適当に言つただけなのだろう。

とはいって、誰だって、委員会にはいるなんて、面倒な事はしたくないのだろう。そんな適当な理由に頼み、僕に無理やり押し付けたのだ。

さて、そんな、僕が図書委員になつた時の昔話はいいとして、中にに入る。

中央にはいくつかの大きな机があり、そこにはすでに数人の人が集まっている。

「おはよう。それともこんにちは、かな？」

その中にいる一人の少女の隣に腰掛けると、挨拶をする。良く見知った人物。

と言うよりも、今朝、学校に来た時に、誠次が言っていた、いつも一緒にいる後輩だ。

彼女の名前は、鈴原志穂。

後輩と言つだけあって、僕の一つ下で、現在高校一年生。もちろん、図書室にいるのだから、彼女も当然図書委員で、そもそも、僕と彼女が知り合つたのも、同じ図書委員だったから、という理由なのだ。

「時間的には微妙ですね。でも、まあ、こんにちは、でいいんじゃないですか？それなら、ある程度誤魔化しがききますし」

その後輩は、くすくす、と笑いながら、そう答える。

まあ、確かに彼女の言つ通り、こんにちはならある程度誤魔化しが効くだろう。

おはよう、とか、こんばんは、それにおやすみ、とかは、時間限定なところがあるけれど、こんにちは、には、厳密な時間の決まりはないし、ある程度、大まかに出来る。

「そうだな。んじゃ、改めましてこんにちは」

「はい、こんにちは、先輩」

そして、改めて挨拶をしなおし、それと同時にお互いくすくすと笑い出す。

わざわざする必要なんてないのだが、まあ、こないかんは単なる遊びだ。

彼女はのりがいいので、こないう言葉遊びみたいな事はショッちゅうやつしているし、それがまた、本当に楽しいのだ。

我ながら良い相方を見つけたと思つ。

まあ、相方といったところで、漫才を始めるわけではないし、そん

な独特なりが通じ合えるから、周囲に誤解されるのだろうけれど。

「そう言えば、先輩は夏休み、どうでしたか？」

ひとしきり笑いあつた後、彼女は、いまだ表情に笑顔を残しながら、問いかけてきた。

彼女と最後に会つたのは、七月の末。つまり、一月以上あつていな
い事になる。

「うーん、まあ、いつもどおり、かな？」

夏休みの事を思いだしながら、そう答える。

姫のせいで、心休まるときはないし、今にも発狂しそうだったのは
確かだつたけれど、靈が僕に憑いたり、その靈が悪さをしてくるの
は日常茶飯事の事。

そう考えるといつもどおりと言えばいつも通りと言えなくはないの
だ。

まあ、それが日常だなんて、あまり嬉しいとは思えないが。

「やつぱり、そうですか。ごめんなさいね」

彼女も、僕の言葉の裏を読み取つたのだろう、申し訳なさそうに返
す。

確かに、彼女が一緒にいれば、僕があの場所で、姫に憑かれるよ
うな事はなかつたかもしれないし、例え、憑かれたとしても、彼女の
力で、祓う事だつてできたかもしれない。

「いや、構わないよ。それより、そう言えば、夏休みはどうだつた
？ 確か、旅行に行つてたんだよな？」

「だけど、だからと云つて、彼女が悪いわけではない。

あくまでも、靈を呼びやすいのは、僕の体質のせいであつて、彼女
のせいではない。

それに、好意で祓つてくれているのだから、感謝こそすれど、非難
するのは間違いだし、彼女に責任を押し付けるのは、問題外だ。

「……旅行、ですか？」

だから、さつさと話を変えてしまおうと思つたのだが、彼女は何の
事だが分かつていらない様子。

まあ、それも仕方ないのかもしれない。

実際には、彼女は旅行には行っていないのだから、思い当たる節がないのは当然の事。

ただ、ここは学校で、周りには人がいるため本当の事を言えない。

「そう、旅行。八月にはいると同時に行つた旅行」

「……ああ、あれですか。はい、そうですね。確かに、旅行に行きました」

そのため、今度は、少しだけ言い方を変えてみたのだが、どうやら今度は理解できたらしい。

実際に彼女が行つたのは旅行ではなく、修行。

奥秩父に両親に連れられて山籠りしてきたのだ。

だから、さつき、僕の事で彼女がすまなさそうにしていたが、どうしようもなかつたのだ。

彼女には彼女の用事があつたのだ。

まさか、その修行をやめろ、なんていえないし、言つわけにはいだらう。

こんなに良くしてもらつてているのだ、これ以上わがまま言つわけにはいかない。

それこそ、そんな事をしたら、姫の仲間入りじゃないか。

どんな事があつても、それだけは、お断りだ。

「で、どうだつたの、その旅行？」

修行のための山籠り。

当然、僕みたいな一般人はやつたことないから、どんなものか分からぬ。

以前は、滝に打たれたり、断食をしたり、お経を唱えたりするものだと思っていたのだけれども、あつさりそれは彼女に否定された。

昔ならいざ知らず、現代では滝で打たれたり、断食をしたりはしないらしい。

それらは、そもそも邪念を祓つたり、身体を浄化させるためにあるらしく、単に修行をするのなら、そんな事はする必要はないらしい。

「はい、充実したものでしたよ」

そのため少々気になるのだが、どうやら良いものだったらしい。
そう答える彼女の顔は本当にいきいきしていて、その言葉にはどうにも嘘がないのが良く分かる。

「そう良かったね」

言葉どおりそれなら良かったと思つ。

無事に楽しく出来たのなら最高だね。

まあ、嫌な雰囲気を払拭できた事も、良かつたと思つてゐるけど。
人の事を、自分の事以上に心配する、彼女の優しいところは、本当に良いところだと思うけど、そのせいで、暗い雰囲気になるのは嫌だし、やつぱり、せつかく一緒にいるのだから、楽しく話したいし、
彼女には笑つていて欲しい。

なんて、そんなふうに思つてゐるのが、誠次にばれたら、それこそ、本当に勘違いされそうだが、それが僕の偽らざる気持ちだし、それに何より、やつぱり友人だらうと誰だらうと、やつぱり話している時は、笑つてもらいたいと思うのは、誰だつて同じだと思つ。

「はい、そろそろ委員会を始めます」

カウンターからそう言つ声がした。

二人して、視線をカウンターに持つていくと、そこには司書の先生の姿があり、周りを見てみれば、すっかり人はそろつている。
どうやら、彼女と話している間に、集まつていたみたいだ。
もう少し、いろいろと話してみたいが、さすがに話し合いの時まで話すわけにはいかないだろう。

「んじゃ、後で、もう少し詳しく聞かせてくれる?」

また、話し合いが終わつた後にでも、ゆっくりと話せば良いだけの事。

わざわざ、こそこそ隠れて話す必要もない。

時間はたつぱりとあるんだ。

それに、その時ならば、変に取り繕つたような話し方をしなくてもいいだろうから、もつと気楽に詳しく話せると思つ。

「はい、そうですね」

彼女も、それに頷いたので、ここで僕達は一日会話を終えると、二人そろって委員会に参加した。

第十話 九月一日 相方な後輩（後書き）

とりあえず、ここに来て、ようやく主要登場人物が勢ぞろい。
長かつたなあ……
しかも、この時点でのうそろそろで物語の折り返し地点になるわけ
ですけどね。

第十一話 九月一日 夢ぶむ壊し

「これからもよろしくな、相棒さん」

僕は、そつ言ひと彼女の肩をぽんと叩く。

「はい、よろしくお願ひします」

彼女も、頷くと、くすくすと笑いながらそれに答える。

もちろん、僕達がそんな事を言ひ合ひには、ちゃんと理由はある。

今日、委員会が行われた理由がそれだ。

図書委員の仕事は大きく分けて二つある。

本の受け入れや整理などの裏方。

そして、もう一つは、昼休みや放課後の当番。

司書の先生の手伝いだ。

それをうちでは、一人一組でやるのだが、その一緒にやる相手と言
うのが、僕の場合は彼女なのだ。

僕が彼女の事を相棒と言ひたのは、そつこつわけだ。
ちなみに、彼女と組むのはこれで一回目。

一学期の当番も同じだった。

まあ、基本的に、当番は一学期の当番を引き継ぐから、僕達が、ま
た同じ日の当番になるのは、当然と言えれば当然なのだが。

「んじゃ、やるそろ帰るか?」

周りを見渡してみれば、もう誰もいなかつた。

どうやら、それぞれ帰つたらしく。

それなら、僕達もそろそろ帰つたほうがいいだらつ。
姫の事もあるし。

「はい、そうですね」

彼女も、頷くと、カバンを取つて立ち上がつたので、彼女を引き連
れて図書室を出る。

その時、一瞬だけ、またこの姿を見て、勘違いられるんだろうな、

そう思つたが、この際気にしない事にした。

「じゃじゃ考えるよりも、楽しいなら、楽しい。

それで十分だ。

特別教棟から出て、昇降口に向かい、それぞれの下駄箱で靴を履き替えると、昇降口を出る。

その際に、ちらりと田の端に、誠次の姿を捉えたが、気にしない。にやにやといやらしい笑みを浮かべていたが、そんなものは記憶からテリートしておく。

「んで、修行の方はどんな感じだったの？充実したとは言つてたけど」

そして、校門を出て、周りに人がいなくなつたところで、話を切り出す。

彼女と、いろいろ当たり障りのない世間話をするのも好きだが、今は、彼女の修行の話しが聞きたいた。

八月中ずっと山に籠つてやつていたのだ。

気にするな、と言つぽうが無茶な話しだ。

僕のような一般人の知らない特別な修行方法で、特訓をしているかもしれないし、はたまた、たくさんの靈を、びしひし祓つていたのかもしれない。

いや、もしかすると、新しい技を伝授されているかもしれないのだ。鈴原流奥義、何々、とか。

まあ、最後の奥義云々の話しさは冗談だけど、それでも、やつぱり、いつたいどんな生活だったのかは物凄く気になつてしまふのだ。

「うーん、そうですね。たいしたことはやつてないんですね。山に籠つて修行と言つても、どちらかと言つて、別荘に遊びに行つた、ていう感じですし。修行らしい修行だって、ほとんどまともにしていませんから」

が、期待虚しく彼女の答えはあまりにも悲惨だった。

「せいぜいともにやつた修行だって、軽い長刀の練習程度で、それ以外は本当に、学校の宿題やつたり、お昼寝したりでしたし……」

なんか、もう夢も希望もない、と言うのはこの事なのだろうか。

せめて、もつ少し幻想を持たせて欲しかつた。

と言つよりも、こんな单なるお遊びのために、行つたとでも言ひの

だらうか？

「あと、そうですね、テレビも普通に見てましたよ。いや、ちゃん

と写るもんなんですね」

そして、それに答えるかのよつこ、とどめの一言。

ありがたみもなにもない。

そんな適當なものなのだろうか、修行と言うものは。
なんだか、そんな適當なものに助けられている自分が情けないし、
頼ろうとしている事自体恥じるべき事なんじやないのかと思ひ。
だいたい、なんで奥秩父にテレビの回線が繋がつているのだ。
あんな人里はなれた秘境のような場所なんだから、もっと神秘的に
して欲しいものだ。

これなら、別に修行なんかに行かずに、ここに残つてくれても良か
つたんじやないかとさえ思えてくる。

とはいへ、さすがに実際にはそれは言わない。

少々不満があると言えばあるのだけれども、やはり、それは言つて
はいけない。

「まあ、楽しかつたなら、それでいいよ、うん」
だから、とりあえず、適当にお茶を濁しておく。
これ以上、このネタでは盛り上がりそうにもない。
それに、もうそろそろ切り出してもいいかもしない。
元々、今日の本題は別にちゃんとあるわけだし。

そもそも、そのために、修行ネタをふつたわけだし。

「それよりも、ちょっと頼みたい事があるんだけどいい？」

「はい？」

「あつてもらいたい靈がいるんだ」

そして、ついに切り出す。

それは彼女にいつもお願いしていた、たちの悪い物を祓つてもうつ
事。

もちろん会つてもらいたい靈なんて物は、一つだけ。

姫だ。

姫たちの悪さは筋金入りだから、大丈夫だろう。
あんな淫魔やらサキュスバスみたいな人をたちの悪いと言わずに、
なんと言つ。

僕なら、絶対にたちの悪い、と判断する。

とはいって、だからと言つて、別に会わせて、祓つてもらいたい、
いうわけでもない。

確かに、騒ぎは起つたり、セクハラをしたり、迫つてきたり、魂
を狙つてくるなど、僕にして見れば非常に迷惑極まりない事ばかり
をしてくれたんだけれども、それでも、祓う、というよりも、無理
やり成仏させるような事はしたくない。

彼女とて、そんなに悪い靈でもないし、実際に実害を出したわけじ
やない。

ほとんど、あれは単に遊びの範疇の事だと思つし、まだ笑つて済ま
せられる事もある。

時々、本当に心の奥底から殺してやりたいと思つときも、確かにあ
るけど、それだって、本当に心の奥底から憎んで言つてているわけで
もないし。

ただ、それでもやつぱりいつもいつもやつこめられてはいるのは、僕
としては悔しいし、それになりにより、いつまで理性が持つかも怪
しい。

というわけで、せめて、彼女にとつて脅威となるものの存在を僕が
持つてている。

その事を示して起きたいのだ。

そうすれば、さすがに、彼女も少々は自重してくれるかもしれない。
つまり、ペットのしつけみたいなものだ。

自分が上位者である、そう思わせるのだ。

まあ、とはいって、もしかすると、それでは靈に対しても甘いのかもし
れないとは思う。

確かに、今は実害はない。

彼女の性格のおかげだろうが、誰かを呪い殺したりするような事もなければ、僕の身体をのつとひつとしている様子もない。

力を全く使おうとしていない。

そのため、現状ならば、比較的安全なものなのだ。

けれど、だからと書いて、そのまま、彼女が何もしないとは限らない。

今は、キスを迫り、魂を少し抜こうとするだけにとどまっているけれど、それがいつエスカレートするかはわからない。

いきなり、誰彼構わず襲つたり、志穂ですら、手のつけられないような状況になつてしまふ可能性だって十分にあるのだ、それを考へると、できるだけ早く、後々の事を考えて、成仏させてしまつまうがいいのかもしれない。

いや、そうすべきなんだと思つ。

だけど……

「その憑いた奴がちょっと変でね、困つてるんだ。だから、軽く脅しをかけて欲しいんだ」

僕にはやつぱりできない。

例え、その結果として、かなりの被害が出たとしても、やつぱり、彼女が成仏する事を望むならまだしも、何もしていない状況で、いきなり成仏させようなんて、僕には出来ない。

誰かの意思を無視して、自分の気持ちを押し付けるような事はしたくない。

それが、たとえ、生きた人ではなく、靈であつたとしても。

「だめ、かな？」

そして、僕は、彼女に問う。

結局は、全てを決めるのは彼女。

僕が、お願いをしたところで、彼女にそれをするだけの体力がなかつたり、または、する必要がないと感じれば、彼女は何もしない。実際に、お願いしても断られてしまった事は何度もある。

だから、今回も断られる可能性だって十分に考えられる。
そろりそろりと、彼女の表情を盗み見る。

だいたい、聞いたときの反応で分かる。
申し訳なさそうな顔をしていなければ、基本的に、断わられたりはしない。

さて、彼女の浮かべる表情とはどんなものなのだろうか。

第十一話 九月一日 僕と後輩と痛い下校風景……テジャヴ？

そろりそろりと彼女の顔を見てみる。

「はい、いいですよ」

けれど、彼女は、どこにもそんな表情を浮かべる事なく、穏やかな笑顔を僕に見せ、そう頷いて見せた。

ほつと一安心。

ここで、断られたら、どうしようもなかつた。

とりあえず、僕の穏やかな生活への道も一步前進。

「うちにいるんだけど、構わないよね？」

ただ、一応、もう一度確認。

姫がいるのは、僕の家。

確かに、誠次が言ったように、僕は志穂の家に何度もお邪魔している。

ちろん、たちの悪い靈に憑かれた時の事で、祓つてもうつために、わざわざ行つた。

別に、何か特別な道具が必要だつたり、家に帰らないと出来なかつたりするわけではない。

単に、彼女の家なら、誰にも見られる事なく、しかも、安全に行えるから行つているわけに過ぎない。

除靈をして入るときの姿は、やはり異質で、人が見たら、奇行にしか見えないから、そうするしかないのだ。

とはい、今は違つ。

ただ、会うだけで、祓つたりする必要はない。

たとえ、脅しで一発かますだけだつたとしても、そんなにおどりおどろしいような事はせず、軽い物でも十分に出来るはずだ。

だから、ほとんど遊びに行くようなものなのだ。

しかも、当の靈と一緒に連れて来ていないので、かなり怪しい物だつてある。

別に、僕は彼女をどうこうするつもりはない。

というか、そんな事が出来るようなならば、彼女に頼るような羽田にならず、いくらでも、姫をやりこめる事ぐらい出来たはずだ。

でも、それは僕の中での話で、世間一般的に見てたら、やっぱり少々危ない感じもするだろう。

だから、そう聞いたのだが

「はい、構いませんよ」

あっさりと頷いてくれた。

信頼してもらえた事が素直に嬉しい。

そんな甲斐性がないと思われているだけなのかも知れないけれど。

「それにしても、先輩の家か。ちょっと楽しみかも」
どちらにしろ、助かった事には変わりはないので、その言葉を聞いて、安堵の声を漏らしていると、彼女はそう続けた。

その表情は、どこか晴れやかで、嬉しそう。

なぜ、そんなに嬉しそうなのかは、全く分からない。
もしかして、身の危険とか、そういう事を、全く考えず、条件反射に答えたのかもしれない。

それだけ、僕の事を信用してくれているだけの事なのかもしれないけど、もう少ししつかりとえて欲しい。

と言つよりも、自分の容姿について、自覚があるんだろうか。

……いや、ないだろうな。

自分に寄せられている好意に全く気付かない鈍い人だし。

以前、机の中に、ラブレターが入つてたときの話を聞いたときなんて、本当に相手の人が可哀想に思えた。

そのラブレターには宛名はなく、ただ、裏にそのラブレターを書いた人の名前が書かれていただけだった。

もちろん、普通なら、宛先はなかつたとしても、自分への物だと思うだろう。

何度もラブレターをもらつたり、告白を受けているんだから、そう思つるのは普通なのだ。

まあ、そのたびに、何で私がそんな物をもらったり、されたりするのだろうと、首を傾げていたが。

そこらへんから、自分がどれだけ整った容姿をしているのかを、全く分かつていいのだが、それでも、ショッちゅう告白されているのだ、それが自分の物だと思ってもおかしくはないはずなのだ。なのに、彼女は、こともあるうか、そのラブレターを書いた本人に『これ、間違つて入つてましたよ』

そう言つて、返してしまつたのだ。

もちろん、書いた本人もびっくり。

まさか、そんな反応されるなんて思つてもみなかつたのだろう。彼女の話では、しばらく呆然とした後、

『あ、ありがとう』

そう言つて受け取つたらしいのだが、あまりにも切ないお話だ。それを聞いた瞬間、思わず、大爆笑してしまつた。

書いた本人にしてみれば、悲劇だろうし、もし、それを書いたのが僕だったら、余りの恥ずかしさに悶え死ぬ事になつていたと思うけれども、他人から見れば、これ以上の喜劇はない。

ふられるならまだしも、相手にすらされていないのだ、笑い物以外なんでもないだろう。

もちろん、隣にいた彼女は、そんな僕の姿を見て、きょとんとしていたが。

まあ、そんなわけだから、彼女は恋愛関係においては本当に鈍い。未発達と行つてもいいと思う。

もしかすると、初恋だつてまだなのかもしね。

そんな彼女なのだ、きっと身の危険とか、そういうのすら全く考えおよびつかないのかもしね。

そう考えると、少々頭が痛くなつた。

姫の事だ。

もし、初恋すらまだのような純情で純真無垢そうな志穂が、姫に会つたら、いったいどうなるのだろうか。

あまつさえ、姫お得意の下ネタや卑猥で教育上不適切な単語を連續してきたり、いつたいどうなるだらう。

そんな絶望的な世界を想像すらしたくない。

僕は、呼んだ事を、恐ろしく後悔する羽目になるかも知れない。

とはいって、だからといって、今更、やめにするわけにもいかない。

「ふんふん 先輩のおうち」

隣にいる彼女は、非常に「機嫌そ�で、なんだかネジが一本や一本ぐらい抜けてしまったようなテンションで、わけのわからない歌を小声で唄っている。

こんな嬉しそうな彼女を見て、やっぱり、行くのを止めよう、なんていえるだろうか。

しかも、その理由が、相手の靈が下ネタや卑猥で教育上不適切な単語を言って来るから、なんてものじや、彼女も納得しないだろう。というか、そんな理由すら言えないかもしれない。

下ネタや卑猥で教育上不適切な単語なんて、彼女には、縁遠いもの。女の子同士で話しているうちに、そういう会話になる事だって普通はあるのだろうが、彼女の場合、周りの友人も彼女の純情さと言つか、箱入り娘度を見て、彼女の前ではそんな会話なんてほとんどしない。

したとしても、本当に可愛らしいものだ。

当の彼女は、何の事だが全く分かつていなかつたらしいが。やつぱり、霊能力者一族と言うのは、あんまりよろしいものではないらしい。

そこまで箱入り娘にするのは、問題だ。

もう少し危機感を持たせるために外を見させるべきだ。

まあ、志穂の場合は、手遅れだろうけど。

もうそんなふうに育つてしまったのだから。

「ふんふんふーん。おうちで一人きり

さらに、彼女は歌い続ける。

たぶん、僕には聞こえていないと思っているんだろうが、こんな傍

にいれば、聞こうとしなくとも聞こえてしまつ。

しかも、なんとなく危険なワードが飛び交つていたような気がする。だいたい、一人きりと言つても、妹の美樹も僕と同じく、今日は始業式で、その後、昼まで部活があるみたいだから、いないんだけれども、母もいれば、姫もいるのだから、そんな物になるわけがない。そもそも、彼女はこんなキャラクターだつただろうか。

僕の知つてゐる彼女は、もう少し物静か、といふか、大人しい子だつた。

いつたい、何が彼女をそつさせるのだろうか。

少々気になるし、できればそこのところを詳しく聞きたいのだが、

「ふふんふーん。どきわく体験

」

ちょっと怖いから、できそうにもない。

なんだか、彼女が知らない人、といふか完璧に痛い人に見える。

それに、

「はい、到着

家に着いてしまつたのだ、そんな暇もないだろつ。

「ただいま

「おじゃまします」

二人そろつてそれぞれそう言つて、家の中に入った。

第十二話 九月一日 僕と姫とのひきわべ体験！？

家の中は意外と静かで、荒れている様子もない。

まあ、姿を消してはいるはずだし、部屋の中にはまだから、ここへんが散らかっているわけもないが。

靴を脱いで、家に上がる。

けれど、靴は僕と、今脱いでいる志穂の一人分だけ。姫はもちろん靴なんて履いていないから、なくて当然なのだが、母の分がない。

どこかに出かけたのかもしれない。

そう言えば、もつすぐお昼だし、お昼ご飯の材料でも買いに行つたのかも知れない。

「あー、しまつたかも」

と、そこまで考えたところで、自分の失敗に気が付いた。少々自分の事で一杯一杯になつていていたせいか、志穂のお昼の事を全く考えていなかつた。

彼女も僕と同じで、今日は昼まで。

当然、お弁当なんて物は持つてきていらないだろう。

そうなれば、彼女のお昼はない。

これは、大失敗だ。

「どうかしましたか？」

「いや、気にしないで」

「そうですか？」

彼女はきょとんとしながらも、頷く。

せめて、お昼ご飯ぐらい食べてから来てもらえれば良かつたのかもしれないが、今まで一度も彼女を僕の家に呼んだ事なんてないのため、道は全然知らない。

そうなれば、逆に僕達が行くしかないんだろうけど、絶対に姫は付いて来ないだろう。

もちろん、つまく謀魔化せば最初の内ぐらいはどちらにかできるだらうけれども、やはり、彼女の家が近づくと難しいと思つ。

彼女の家の外見は、そんないかにも靈能力者一族の家、みたいなおどろおどろしい感じはしないけれど、それでも雰囲気は凜としていて、ちょっとした威圧感を持っている。

勘のいい姫の事だ、あっさりと逃げてしまふかもしれない。なら、ここに呼ぶしかなかつたのだ。

お皿ご飯の事も、後で母に頼めばいいだらう。変に誤解される可能性もあるが、そのときはその時だ。

「あの、それで、この家族の人は？」

ひとまず、たつむと姫と会わせてしまおう。

やつ思つて、自分の部屋に案内させよつとしたところで、彼女は、きょりきょりと周りを見まわしながら、そう尋ねる。

思わず、背中に嫌な汗をかく。

もともと、母がいると思っていたから、彼女を家に呼んだのだ。もちろん、何度も言つてはいるが、いかがわしい事なんてするつもりは毛頭ない。

けれど、それでも、やはり、女の子を安心させるためには、やはり親がいなければきつい。

別に紹介するとかそういう事をするつもりは全くないけれど、それでも、家に一人きり、と言つのは少々まずいだらう。とはこゝえ、だからと言つて、嘘をつくるのはまずい。

あんまり嘘をつくるのは、つまくな。

すぐに顔に出てしまう。

それに、話しこんでいる途中に帰つてきたら、かなり気まずい。

「えーと、いないみたい。たぶん、お皿の買い物にでも行つたと思

う

「…え」

結局、正直なところを言つしかない。

それはそれで気まずくなるかも仕方ない。

嘘をつくよりかはましだ。

案の定、それを聞いた彼女と言えば、ちょっと驚いたような顔をしている。

来るまで、変な歌を唄つてはいたが、やはり、想像上で一人きりになると、実際に一人きりになるのとでは、大きな違いがあるみたいだ。

もじもじと恥ずかしそうにしている。

僕としては、そんな態度を取られるほうが逆にびきまぎしてしまう。まあ、ただ、唯一の救いと言えば、

「ま、まあ、上にその会わせたい靈がいるから、あがるうか？」

上に姫がいる事。

彼女がいれば、とりあえず、変な事はまず起きる事はないだらう。まあ、へたれで甲斐性なしの僕だから、変な事なんてないだらうけど。

とんとん、と彼女を連れて階段をのぼる。

「ふ……り……り、ど……くた……ん」

後ろにいる彼女がぼそぼそ何か言つているが、小声のせいが全く聞こえない。

少々気になるが、この際無視しておこう。

「ここが僕の部屋。んで、会つてほしに靈もここにいる

階段を昇りきり、部屋の前に立つと一旦止まり、彼女の方に向き治るとそういう。

さすがに、いきなりあけるのもなん。

この部屋にいる姫はとりあえずかなりインパクトが大きい。いきなり会わせて、あまりのショックに倒れる、なんて事はないだろうけど、それでも、かなりのショックをうけるとは思つ。ワンクッシュヨンぐらい置いておいた方がいいだらう。

「んじや、開けるね」

しっかりと彼女がドアの前にたち、ちゅうどい間を取り終えると、そう言ってドアを開け

「えつと、名前は姫。見た目はいいけど、性格はあれだから気をつけてね」

即座に、もう一度彼女の方に向き直り、紹介をしておく。

帰ってきたと同時に突撃してくるであらう姫の機先を制すため、だ。が、目の前にいる彼女からは反応はない。

そして、なぜか、背後からの反応もない。

嫌な予感がした。

それに合わせて、背中に冷たい汗をかき始める。

ざきざき、とまるで油の切れたぜんまいのような音を脳内で感じながら、ゆづくゆづくりと自分の部屋を見てみる。

本来なら、そこには、姫がいて、大騒ぎをしているはず。いや、やつしていなければはずなのだ。

なのに……

「あの、誰もいないんですけど」

「うそーん」

けれど、そこには姫はいなかつた。

綺麗さっぱりどこにも姫の姿はなく、散らかった部屋があるだけ。

思わず、あまりのショックに、分けの分からぬ反応を取つてしまふ。

おそれらしく、この部屋の様子からして、確実に姫は一度帰つてきたんだろう。

そうでなければ、昨日綺麗にしたばかりの部屋がこんなまるで泥棒に入つてこられたような散らかり具合になるはずはない。

そして、今いのち、暇になつたかどうかで、部屋をこのまま散らかしたまま出かけてしまつたんだろう。

とはいへ、この状況はあまりよろしくない。いると思っていたはずの親は不在で、しかも、田舎での姫もどりこもいない。

完全に一つ屋根の下に一人きり。

最初から、そんなつもりなんて毛頭なかつたから、余計に心理的に

プレッシャーを感じてしまう。

再度、彼女の方へと向き直つて見るが、見なければ良かつたのかも
しない。

恥ずかしげに、頬を朱に染め、もじもじとしている。
その姿を見て、この事を意識していると思わずに、何と思えと言つ
のだ。

「あー、うん。たぶん、どつかに出かけてるみたい。とりあえず、
お茶でも淹れてくるから、適当に座つて待つて」
あまりの恥ずかしさにいたたまれなくなつて、僕は、逃げ出すよつ
にそつう言つと、階段をどたどたと降りていく。

ダイニングに入ると、口ッ音を出すと、すぐに蛇口を捻つて、水を
注ぐと一気にあおる。

頬を触れば、明らかに熱い。

確実に、赤くなつてていると思つ。

予想外の出来事とは言え、緊張しそぎだ。

第一、僕と彼女はただの友達なのだ、何を気にする必要があるとい
うのだ。

僕と彼女が、恋人同士だつたり、または僕が彼女に気があるなら、
どきまぎするような状況かもしれないが、そんなものじゃないのだ
から、むしろ堂々としておくべきなのだ。

軽く顔をぱしつと叩くと、戸棚から、カップとソーサー、さらにボ
ットを出す。

そこに、紅茶パックを入れ、お湯をそそぐ。

一応、茶葉の紅茶もあるにはあるのだけれども、僕は紅茶の淹れ方
なんて、知らないから使えない。

しつかりとお湯に浸して、味と薰りを取ると、パックを三角コーナ
ーに捨てて、紅茶を淹れたポットとカップ、ソーサーを、それぞれ
トレイに置くと、机の上に置いてある軽い茶菓子を入れておく。
まあ、茶菓子と言つても、饅頭だが。

紅茶にお饅頭と言つ組み合わせに、違和感を感じたりはするのだけ

れども、田に付くといひあるお茶菓子はそれしかないのだから仕方がない。

確か、母が、お土産にもらってきたものだ。

それらを載せたトレイを上手に持ち上げると、いよいよ運ぶ。

ダイニングを出て、階段を昇る辺りが一番の難所だが、それも無事切り抜けると、自分の部屋の前にたつ。

部屋の扉は閉められており、おそらく、彼女は、部屋の中に入るために扉を開いた。

あんな散らかった部屋に押し込んでしまったことが、少々恥ずかしかったが、あの時の僕にはそれぐらいしかできなかつたので、許してもらおう。

コンコン、と、ドアを叩き

「お茶入れてきたよ」

そう言つと、落とさないよう、バランスよくトレイをせり、ドアを開けて中に入る。

「あ、ありがと」「やむこます」

「いいえ、はい、どうぞ」

テーブルの傍に腰を賭けていた彼女の前に、ソーサーとカップを置き、それに紅茶を淹れ、その傍にお茶菓子を置くと、僕もテーブルの傍に座る。

彼女は、僕が座る野を確認すると、紅茶に口を付ける。

そう言えば、彼女が紅茶を飲んでいるところは初めて見る。

彼女とは、一緒に、飯を食べたり、家にお邪魔した時なんかにお茶をいじ馳走してもらつた事は何度があるのだけれども、紅茶、それとコーヒーなんかを飲んでいる姿を見た事は一度もない。

ほとんど、緑茶か麦茶を飲んでいるといふしか見た事はない。

「おいしいですね」

一瞬、和茶しかダメなのか、そう思つて心配したが、どうやらそれは杞憂ですんだらしく、彼女は、美味しそうにそれを飲んでいる。

「うん、美味しい」

それに安心した僕も、紅茶に口を付ける。

まだまだ暑い、この残暑の時期に、熱い紅茶を飲むのは、ちょっとおかしいかもしれないが、アイスティーなんて物は、この家にはないから、ホットにするしかない。

「…んく」

もう一口紅茶を口に含むと、今度は、饅頭の包装紙を解くと、かじる。

しつとうとした白餡の滑らかな甘さと少し渋みのある皮が絡み合って、程よい口辺りになる。

中々、おいしい。

ただ、やつぱり難点を上げるならば、一緒に飲むのが紅茶だと書つ事ぐらいだ。

やつぱり、饅頭と一緒に飲むんだつたら、煎茶がいいだろ？

とはいって、残念ながら、この時期に煎茶は家にない。

やはり、どうしてもこの暑い時期に飲むのは、麦茶になってしまつ。

第十四話 九月一日 一人でお片づけ（前書き）

ちょっと間隔空きましたねえ。

うん、まあ、大丈夫さ。

今日は一話更新だしww

第十四話 九月一日 一人でお片づけ

「……ん、『じあわづわま』

そして、饅頭の最後のひとかけらを食べると、残っている紅茶も一気に飲む。

まだ、少々熱いが、それでも、一気に飲めないほどではない。

彼女の方も、紅茶がまだ半分ほど残つて入るぐらいで、饅頭の方は、食べ終えている。

まあ、一つしか持つてきていないのでだから、すぐになくなつてしまつのは当たり前か。

お茶も飲み終わり、手持ち無沙汰になつたので、周りを見渡す。相変わらず、物凄い散らかりよつ。

もし、これを僕が学校に行つている間の数時間の間にやつたといつのなら、すごいものだ。

ある意味才能と言つてもいいだろ？

もちろん、褒め言葉ではないが。

「……ごめんな。わざわざ来てもらつたのに、家には誰もいないわ、部屋は散らかつてゐるわ、目的の奴はいないわ、で。本当に申し訳ない」

しかも、勝手にいなくなるし。

本当に困つたものだ。

「いえ、構いませんよ。」うして、遊びに来るだけでも楽しいですし

し

「そう言つてくれると助かるよ」

彼女がまだ笑つてそう言つてくれるから、ましだけど、僕としては非常に心苦しいものがある。

できる事なら今すぐ帰つてきて欲しい。

そうじゃないと、間が持たない。

なんともなしに彼女の方をちらりと見てみる。

とつあえず、退屈じやないか心配だったが、彼女は興味深そうに、元の部屋へと戻りを見まわしてゐる。

何か、おもしろいものもあるのだろうか。

まあ、男子にしてみれば、女子の部屋なんかは完全に未知の世界で、いろいろと気になつてしまつてゐるから、彼女がそうしてしまつのも、そういう気持ちと似たような物なのかもしない。

とはいへ、この部屋には、どこにも男子特有の物はない。

それこそ、ベッドの下や本棚の裏に置かなければならぬような類の本なんて一冊もない。

そんなものが、見つかった日には、それをネタにして、姉が襲つてくるかもしれない。

まあ、それ以前に、あんまりそつとものには興味がないといつのもあるけれど。

「すごいだろ？、この散らかりよう。昨日の夜に頑張つて綺麗にしたのに、僕が高校に行つて数時間空けている間に、これだけの事をやるんだから」

「ふふ、そうですね」

床に散らばつてゐる本を手に取ると、ため息混じりにそつと呟つ。その言葉を聞いた彼女も、苦笑している。

「ある意味才能だね、ここまで来ると」

そんな彼女につられて、僕も苦笑すると、立ち上がり、手に持つてゐるマンガ本を元の場所に戻す。

お客様がいる以上、母が家に帰つてきたら、様子見ぐらうにしつくるだらう。

その時、散らかっていたら、またお小言を言われてしまつ。

「あ、手伝いますよ」

更に、床に散らばつてゐるマンガ本を拾い、元の場所に場所に戻していると、彼女も立ち上がり、手伝いを申し出してくれる。本当にありがたい。

「ありがとう」

素直にお礼を言うと、手伝つてもうらう。

一人でやるよりも一人でやるほうがはがどる。

彼女が、それぞれ同じシリーズに集めて、それを僕が本棚に並べる。散らばつて いる量はかなり多いが、それでも、彼女が手伝つてくれているおかげで、早く終わりそうだ。

これなら、母が帰つてくるまでに終わつてしまつだらう。

受け取つたマンガ本を、本棚に並べつつ、彼女の方へと視線を写す。ときどきと動くその姿は、掃除をやり慣れているように見える。たぶん、これが姫だつたら、こうはいかないだらう。

そもそも、掃除なんて物はしないし、手伝いを頼んだところで、何もしないのだが、それでも、もし手伝つてくれたとしても、足手またいになつても、戦力にはならないだらう。

本当に、どうしようもない靈だ。

「うし、終わり、と。ありがとね

「いいえ、構いませんよ」

最後のマンガ本を受け取ると、それを元に戻し、ようやく終わる。時間としては、数分とかかっていない。

思つたよりも疲れなかつたのは、彼女のおかげだらう。

一人で鬱々とやるよりも、やはり誰かと一緒に協力してやるほうが、楽でいい。

「んじや、ちょっと紅茶淹れなあしてくるから、ちょっと座つて待つてて」

とはいえ、それでも少々疲れだし、喉も渴いた。

それに、手伝つてもらつたのだから、何のお礼もしないといつのも気が引ける。

彼女を、テーブルの傍に座らせると、ポットをトレイに載せると、そのまま部屋を出て、そのままダイニングに向かう。

その途中で時計を見たが、針はもうすぐで十二時を指そつとしている。

と言つ事は、さすがに、そろそろ母も帰つてくるだらう。

昼ご飯の準備だつてあるわけだし。

先ほど取つた同じ方法で、紅茶を淹れると、また、階段をのぼり、部屋に戻る。

「ただいま。はい、どうぞ」

そして、座つてゐる彼女の目の前にあるカップに紅茶を注ぐと、差し出す。

「ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして」

彼女のお礼に答えながら、今度は自分のカップに紅茶を注ぐと、口をつける。

さつきと同じメーカーの同じ銘柄のはずなんだけど、味が少々違う。さつきよりも、少しだけ渋い。

どうやら、少々浸しすぎたようだ。

まあ、僕は、渋いものや苦いものには、ある程度耐性があるし、基本的に紅茶とかコーヒーは、ノンシュガーノンミルクで飲むので、そんなに辛くはない。

「ん、美味しい」

けれど、彼女は違うかも知れない。

そう思つて、ちらりと彼女の方を見てみたが、意外にも美味しいそうに飲んでいる。

彼女も渋い物には慣れているのかも知れない。

そう言えば、彼女の家に行つた時、茶室があつたから、抹茶とかを飲む機会が良くあつたのかもしれない。
もしそうなら、渋いのに慣れているのも分かる。

一度、小学校か中学校か忘れたが、お茶を点てる機会があつたんだけど、あの時飲んだ抹茶の味は今でも忘れない。

もう、なんと言うか、思わず顔をしかめ、口中が気持ち悪くなるほど渋かつたのを覚えている。

その時は、本当に、このんで抹茶を飲む人の気持ちが全く理解できず、舌がおかしいんじゃないのか、と、そう思つてしまつたものだ。

もちろん、今も理解できない。

もし、お茶を出されても、即座に拒否するだろう。

あんな苦くて渋くて口中が、何とも形容しがたい不思議な感覚に苛まれるような物を飲みたいとは思えない。

再び、カップに口を付け、紅茶を飲む。

ちょっとだけ渋みと薰りが増した紅茶は、それはそれで美味しい。さつきみたいに、渋みと薰りが弱いのも、好きだが、僕としては、こっちの方が割りと好きだ。

淡い味よりも、やつぱり、しつかりとした味の方がいい。まあ、舌が肥えてなくて、しつかりと味が付いてないと、良く分からないから、と言つものもあるが。

最後の一口を一気に飲むと、カップをソーサーの上に置く。彼女の方を見てみると、まだ、半分ほど残っている。

そんな彼女から視線を外すと、ぼんやりと窓の外を見る。相変わらず、窓の外から見える空は、青く澄みわたり、顔を覗かせている太陽は燦々と照りつけている。

こんな時期に、良く出かけるものだ。

姫の事を考えていると、思わずそんな事が浮かんだ。

まあ、靈だから、実体化していないかぎり、暑いとか寒いとか、そう言つたものは感じないだろうが、それでも、こんな時期に出かけたいとは思わないはずだ。

靈なら靈らしく、もっと暗くてじめじめとしたところを好んで欲しい。

それとも、もしかして、このまま帰つてこないつもりなのだろうか。全く相手にされない事に拗ねて、別の相手を探しに行つているかもしねれない。

もしそうなら、本当に助かる。

まあ、たぶん、そんな事にはならないだろうと思つけれど。どんなに、僕以外の人に憑け、と言つても、無視して、僕に憑いて迫り続けてきたのだ。

いきなり、ここであつさつと手を引くとは思えない。

それには何より

「ん、美味しい」

ここで、いなくなられたら、志穂になんて言えばいいのかわからな
い。

わざわざ余わせに来たのに、いなくなりました、では困る。

それに、下手したら、靈にあわせる事を口実に、彼女を誰もいない
家に連れ込んだ、そう誤解されてしまうかもしれない。

たぶん、彼女の事だから、氣を悪くするような事はないだろうが、
それでも、やはり気持ちがいい物ではないと思つ。

第十五話 九月一日 姫 vs 志穂 熱き戦いの始まり（謎（前書き）

まあ、熱いかどうかは知りません。

知りませんが、二人の仲では熱いんでしょう。

第十五話 九月一日 姫 vs 志穂 熱き戦いの始まり（謎）

心の中で、

『早く帰つて来て』

そんな無駄とも思えるお祈りをしていると

「ただいま」

不意に声がした。

高くも低くもない、聞きなれたアルト。

おやうく、母だ。

立ち上がり、部屋から出て、階段から玄関を見てみると、そこには、母の姿がちゃんとある。

どうやら、間違いはなかつたらしい。

とつあえず、母が帰つて来てくれただけでもましだ。

「おかえり」

僕は、そうとだけ、返すと、また部屋に戻る。

「」両親だつたんですか？」

「うん、母さんだつた。すぐ傍に買い物袋があつたから、やつぱり、買い物に行つてたみたい」

部屋に戻つてくると同時に尋ねた彼女の問いに、答えると、腰をかける。

「あの、やつぱり、『挨拶はした方がいいですかね？』

「…は？」

「お邪魔しているわけですし」

「…ああ、そう言つ事」

唐突に彼女が言つた言葉の真意が理解できずに、一瞬きょとんとしてしまつたが、付け加えてくれた言葉で分かつた。

彼女の気持ちは良く分かる。

僕も、初めて彼女の家に上がつたときは、ちゃんと彼女の『両親に挨拶をした。

家に上げても、もう、いろいろとお世話をしてもうったのだから、当然のことだ。

彼女もそれと同じような気持ちなのだろう。

「うん、んじゅ、トに降りようか」

ただ、それなら、ちよつといい。

もうそろそろお昼だ。

そのついでに、彼女の分の昼食を頼もう。

まさしく、渡りに舟、とはこの事だ。

テーブルの上に置いてあるカップとソーサーをトレイの上に載せると、立ち上がる。

田の前にいる彼女も、それに合わせて、立ち上がったので、部屋の外に出る。

……いや、出ようとした、そっちの方が正しいだろう。

ドアノブに手をかけ、ドアを開けたところで

「やつほー、おかえりー」

突貫して来た輩がいるのだ。

いきなりの攻撃に体勢を崩して、危うくトレイに載せているカップ類が落ちそうになつたが、すんでのところで、体勢を整える。

「うんうん、ちゃんと約束通りいい子に、帰ってきたみたいね。そんな賢い由貴には、お姉さんからのキスをプレゼント」

けれど、すぐに姫がへばりついてきたので、またバランスを崩す。

慌てて、志穂の方へと向き直り、視線だけで助けを請うが

「え…あ…は?」

何が何やらちつぱり理解できずに、混乱してしまつてているのだろう。言葉にならない声を漏らして、あたふたとしている。

どうやら、助けは期待できないらしい。

体勢を整える事は諦め、そのまま床に倒れこむ。

そのせいで、姫に押し倒されたような体勢になつてしまつてているが、ショックをうまく吸収する事ができたおかげで、何とかトレイの上の物を割るような事はせずにすんだ。

「はいはい、由貴は目を閉じるの。ほり、ふぢゅー、としてあげるから」

とはこえ、トレイの上の物の安全を確保する事は出来たが、自分の身の安全の確保は出来ていない。

マウントポジションを取った彼女は、しつかりと両手で、僕の頬をがっちりと固定すると、唇を近づけてくる。

「ば、ばか、やめろ」

必死になつてもがいて、姫の魔の手から逃げ出そうとするが、彼女は、器用にその衝撃を受け流す。

こんなときに、そんな無駄なスキルを発動しないで欲しい。

「大丈夫、恥ずかしいのは、最初だけだから。きっと、じぱりくしたら由貴からもねだるようになるよ」

「なるか！」

「ホントに？」

「当たり前だ！」

「んじゃ、今！」で確かめてみよう？..」

「こらんわ！」

何も出来ずにいるため、せめての抵抗に、そう叫ぶが、そんな叫びも虚しく、まともに動けない僕の唇に、彼女はじりじりと近づく。口元はだらしなく緩み、その目は恍惚と輝いている。

今まで、待ちに待つた時が、今ここに叶おうとしているのだ。

そんな表情になつてしまふのは良く分かる。

良く分かるが、もし唇を奪われれば、その瞬間に、僕の負けだ。

今まで必死になつて守ってきた物が全くの無駄に終わつてしまふのだ。

とはいって、今更、必死に抵抗したところで、それが功を奏すとは思えない。

（神様、仏様、閻魔様、サタン様、どうぞお助けくださいませ）
こうなれば、神頼みしかない。

自分の知っているあらゆる神に、祈りを捧げ、助けを請う。

サタン様は、神様どころか、悪の大王だけど、この際、そんな事は言つていられない。

溺れる者は、藁でも掴むのだ。

「ほらほら、据え膳食わぬは男の恥、て言つで……！」

果たして、本当にこのまま、唇を奪われてしまうのか、心中でさめざめと泣きながら、悲嘆にくれていたのだが、いきなり、ガン、という鈍い音とともに、身体が軽くなつた。

慌てて、目を開け、起き上がつてみると、すぐ傍に、頭を抱えてうずくまつて、いる姫の姿がある。

その目じりには軽く涙が浮かんでいる。

「とりあえず、大丈夫ですか？」

涙を流す靈なんているんだ。

そんな姫の姿を眺めて、そう思つてゐると、すぐ傍に、どうやら一つの間にかに、復活して、いた志穂の姿があつた。

どうやら、その言葉からすると、助けてくれたのは、彼女のようだ。ほっと安堵の息を吐きつつ、感謝の意を込めて、お礼を言おうと、口を開きかけたところで、彼女の手に持つて、いる物を見えた。

トレイだ。

さつき、押し倒された時に、転がしてしまつた奴だろ？

先ほどした鈍い音は、もしかしないでも、これのせいなのだろうか？

たらり、と背中に嫌な汗をかく。

いくらプラスチック製のトレイとは言え、それなりに硬いし、音からしても、きっと角で殴つたんだろうが、そういう痛いはず。それを何でもなさそうにやつて、いるのだ、少々怖い。けれど、まあ、助かつたには違ひない。背に腹は変えられまい。

感謝感謝だ。

第十六話 九月一日 姫 vs 志穂 熱せ戦（前書き）

最近、いろいろあって更新が出来てません。
すみません……

ところが、いつもやなくて、やたらやたらひとつひとつ連載ひとつにかしながら……

まあ、僕の計画性のなきは置においておこう、というか楽しんでください。

第十六話 九月一日 姫 vs 志穂 熱き舌戦

「痛いじゃない、何するのよ」

殴られた姫はジト眼で睨みつつ、そう言つたが、
「変態は黙つていてください」

ガン、とまた再び鈍い音がする。

志穂はとりあえず取り合うつもりは毛頭ないみたいだ。

また、同じように角で殴ったのだろうが、なかなかやる事が残酷だ。
なんだか、女性の怖さの片鱗を見たような気がする。
と言うよりも、彼女もこんな事をする人だつたんだ、その事実の方が、ショックが大きい。

いつも、大和撫子のように、穏やかで優しい笑みを浮かべていた姿
はそこにはない。

「変態とは、失礼ね。私たちは、相思相愛なの。恋人なの。キスを
し合うような仲なの。つまり、あなたは、お邪魔虫。お分かり？」

そんな彼女に、噛み付く姫。

そんなものになつた覚えなんてないので、文句を言いたいところな
のだが

「あなたが、先輩の恋人？冗談は休みや休みにしてください。真面
目な先輩が、あなたみたいな淫逸な人を恋人にするわけがありませ
ん」

僕が口を挟む間もなく、彼女が応戦している。

本来なら、この場面は、僕が口を出すはずだし、そもそも彼女には、
口論する理由なんて、ないのに、どうしてそつなるのか、全く予想
が付かない。

それに、淫逸、という言葉を彼女は知つていた事も驚きだ。

そういう方面には疎いとばかり思つていたから、そんな言葉が出て
くるとは思はないし、第一、そんな言葉は使わない。
僕だって、一瞬、淫逸と聞いて、分からなかつた。

「あら、由貴だつて、男の子なのよ。いつも一緒にいれば、そういう気持ちになつてもおかしくないわ」

「そんな事はありえません。密室で一人きりになつても、何もしないような先輩なんですから」

「それは、あなたが魅力ないからじゃないの？そんなちつさな胸じや、由貴だつてそんな気もおきないでしようしね」

「私は大きさじやなくて、形で勝負なんです！」

そして、さらに舌戦はヒートアップ。

とはいえ、どちらかと言つと、姫の方が優勢。

まあ、確かに、見た感じ、姫に比べると志穂の胸は、少々小さい。だからと言つて、別に志穂の胸が特別小さいわけではなく、姫が少々大きいだけで、気にする事ではない。

それに、別に僕は大きいのが好きなわけではない。

まあ、そりや、確かに大きい事に越した事はないのかもしれないけど、だからと言つて、どうしても大きくないとダメ、というわけでもない。

と、僕は何を冷静に分析しているのだろう。

二人の女子の胸の大きさ談義を冷静にしている場合じやないはずだ。一瞬、どこかに意識が行きかけたが、それを何とかたぐい寄せる。ここは、がつん、と割つて入つて止めるべきだ。

よし、行け、由貴。

ここで男を見せないといつ男を見せるんだ。

「とりあえず、落ち着……」

「あら、私だつて、形は綺麗よ。スタイルを保つために、それなりにエクササイズはかかしてないんだから」

「だから、落ち……」

「それつてつまり、エクササイズをしないと現状を保てないほど、老化してるつて事でしょう」

なんていつたところで、結局、僕の負け。

一生懸命になつて割つて入るうとはするが、全く効果はなく、完全

に無視、シャットアウトだ。

完全に一人だけの世界に入ってしまい、僕の存在は蚊帳の外になつている。

「……はあ

思わずため息が出る。

なんで、こんな事になつてているのか、いまだに分からない。だいたい、なんでこんな喧嘩になるのだ。

これじゃ、まるで、一人の男を奪い合う女二人の争奪戦みたいじゃないか。

姫は、僕の事を食料としか思つていなければ、志穂だって、ただの先輩と後輩の関係だから、そんなものになるはずはない。姫の場合は、まだ、自分の食料が取られそうになつてているから、それに対して怒つている、と言う可能性もあるのだが、それはそれで、なんとなく彼女の話している様子を見たら、素直に頷けそうにない。だからと言つて、じゃあ、どんな理由なのかと聞かれると分からないうが。

それに、志穂の事だつて、確かに、仲はいいし、親しい友人と言つても間違ひはないだろう。

けれど、あくまでも親しい友人で、それ以上の関係ではない。

例え、自分の友人がいかがわしさ満点の女性に誘惑されているのを見過ごせないから、という理由で、言い争つてしているとしても、少々行き過ぎの感も否めない。

こんな奪い合いのような喧嘩になるはずがないのだ。

それとも、本当に、僕の事を奪い合つているとでも言つのだろうか、こんな容姿も並、勉強も並、運動神経も並な、この僕を。

「違うわよ。よりいっそう、由貴に愛してもらえるための身体を作つているだけの事。つまり、愛が為せる技よ」

「残念でしたね。私の友人からリークしてもらつた先輩のフェチ情報では、スレンダーで華奢な人が好きなんです。あなたみたいに、無駄に肉付きのいい身体じゃ、先輩はなびきません」

なんとなくだが、そう思えるよくなってきた気がする。

姫は姫で、僕への愛とか言つてゐるし、志穂は志穂で、僕のフェチ情報リーグしてもらつていい。

そんな言葉を聞いたら、もうやう思ひしかないだろ。

とはいへ、今更つこむのも、なんだと思ひけど、そもそも、姫は、靈で死んでしまつてゐる以上、体重は増えたり減つたりしないのだから、エクササイズなんかをやつても意味はない。

どんな事をしてもスタイルなんものは変わりはしないのだ。

だといふのに、それに触れない志穂。

もしかしながら、目の前にいるのが靈だと氣付いていないんじゃないのだろうか。

氣付いていれば、靈相手にいちいち目くじら立てても仕方がないと割り切れるはずだし、我慢が出来なかつたとしても、あつさりと調伏させてしまうはずだ。

それなのに、それをしないと言つ事は、全く分かつていないと言つ事だらう。

明らかに、目の前にいる姫は、それと分かる雰囲気をふんふん振りまいてゐるのに、専門家の彼女がそれを見逃してどうするといつのだ。

それとも、それが分からなくぐらうに、頭に血が昇つてしまつてゐるのだろうか。

もし、そなうなら、僕の中での鈴原志穂像を少し修正する必要があるだらう。

「ふん、例え、そつだとしても、あなたみたいに、経験のないねんなの女性じゃ、由貴は満足しないのよ。私みたいに、経験豊富な大人の女性じやないとね」

「何が経験豊富な大人の女性ですか。単なる淫女なだけじゃないですか」

それでも、よくよく続くものだと思つ。

彼女達の言い合ひを、聞いてゐると、そう思える。

とりあえず、僕が何を言つても無駄な事は分かつたので、傍観者の立場を取る事にした。

観察しているだけでは、解決なんてしないだろうが、完全に無視されている以上、どう動いたところで、解決しそうにもないと思う。それに、姫の突撃の事ですっかり忘れていたが、志穂の昼食の事だつてあるのだ。

こんなところで、無駄にじたばたするよりも、せつせと下に降りて、母に言いに行つた方が建設的だろう。

「あー、たぶん、聞こえてないと思うけど、下に降りるから」

「淫女つて、失礼な人ね。言つておくけど、私は安売りなんてしないわ」

「じゃあ、どうして、嫌がる先輩を無理やり押し倒してたんですか」とはいえ、一応、何も言わずに降りた、とばれたら、二人の熱が今度は僕にきそうなので、申し訳程度に言つてみたのだが、案の定無視された。

最初から分かつていたはずなんだけど、実際に無視されると、なんだか、そこはかとなく切なくなる。

ほとんど、負け犬気分で、とぼとぼと部屋から出る。

相変わらず背後では、女一人の戦いが繰り広げられている。せめて、部屋に戻つてくるときまでには、終わつていて欲しい。

まあ、たぶん、期待するだけ無駄だろうとは思うけど。

第十七話 九月一日 ひとがすの決着、一時停戦とも言つ

階段を降りて、キッチンにはいると、母親が、料理をしてくる母の姿がある。

どうやら、今日は焼きそばらしい、キャベツなどの野菜や肉が置いてあり、母は、やっぱり面倒臭そうに、キャベツを切つている。

一瞬、そのまま回れ右をして、キッチンから出たくなつた。

この状況で、僕の姿を見つけた母はきっと、僕にバスをするはずだ。

「あ、ちよつと、起つたわ。ちょっと今疲れてるから、後よろしく

けれど、足を一步引か、そのまま回れ右をしようといたところで、見つからつてしまつた。

その母は、僕の姿を見つけるや否や、着ていたエプロンを脱ぐと、それを僕に押し付けて、さつとリビングに行つてしまつ。

本当に、わが道を付き進む人だ。

家事なんて知つたこつちやない、と言わんばかりだ。

「あー、今、友達が来てるんだけど、その子も一緒に食べさせていいよね?」

「別にいいわよ。その代わり、用賀が全部作りなさいよ」

本当は、それでも主婦か、そういうやりたいところだが、書つたところでは無駄なので諦める。

一度、そう言つた時は、

『お弁当に、晩御飯、掃除洗濯。それだけやつてもうつてゐるんだから、十分でしょ?』

なんて言つ返されてしまつた。

確かに、それだけやつてもうつてゐるのだから、十分と言えば十分なのかも知れない。

それ以上を期待するのは、もしかするとたんなるわがままなのかもしれない。

だけど、それをさも当然そつに、しかも、自慢げに言つのは、少しおかしいんぢやないか、と思つのは、僕だけだらうか。

いや、できれば、僕だけであつてほしくない。

蛇口を捻つて水を出し、手を洗つと、包丁を握つて、きりかけの野菜を切る。

ただ、出でているのは三人分なので、足りない志穂の分は、冷蔵庫から新しく出すと、それも合わせて、切り、ガスコンロのスイッチを入れ、フライパンを温める。

十分に温まつたのを確認すると、キャベツ、ニンジン、タマネギ、豚肉の順に入れて、火をしつかりと通すと、最後に中華そばを入れ、塩コショウで、軽く下味をつけてから、しばらく熱したところで、最後に焼きそば用のソースをかけて、更に麺と具になじませながら、芳ばしい匂いがして来るまで、更に、熱する。

「ふーん、少しあは手際が良くなつてきたわね

「母さんのおかげでね」

「しつかりと感謝しなさいよ」

いつの間にか、キッチンに戻つてきていた母が、後ろからフライパンを覗きこみながらそつてきつてきた母に、皮肉を言つてみたが、あつさりと返されてしまった。

まあ、亀の甲より年の功、といつことわざがあるよつて、年輪を重ねた分だけ、母の方が口達者なのだらう。

「はい、完成。呼んでくるから、皿は自分で用意して」

最後に青海苔と鰹節を散らして出来上がり。

コンロの火を消すと、母にそつと、キッチンを出て、一階に上る。

その際、また面倒臭そつに文句を言つ母の声がしたけれど、それは無視する。

いちいち、相手にしていたら、せつかく出来上がつた焼きそばが、冷めてしまう。

階段を上りきり、部屋の前に立つ。

相変わらず、ドアの向こうでは口論は続いているみたいで、部屋から声が漏れ出ている。

いつたい、どうしたら、そこまで口論を続けられるのか、本当に不思議だが、聞いたところで答えは帰つてこないだろ？

内心でため息を付きながら、ドアを開けると中に入る。

途端に、先ほどまでドア越しで聞こえていた声が、直接耳に届く。その大きさと言つたら、思わず、顔をしかめてしまつほどだ。

さつさと逃げ出しておいて正解だつたようだ。

「あー、えつと、志穂、昼飯食つていかないか？」

こんな大声での口論の最中に、そんな事を言つたところで、聞いてもらえない」と分かりつつも、一応形式的に、言つが

「いつその事、誰かに揉んでもらつたらどうなの？そしたら、そのちつさな胸も大きくなるんじやないかしら」

「そんな迷信、今時、誰も信じてませんよ！」

やはり、聞いてもらえない。

本日一回田の事とは言え、やはり少々こたえるものがある。とはいへ、だからと言つて、今度も諦めるわけにもいかない。せつからく準備をしたんだから、食べてもらいたいというのが、作つた人間としての気持ちだ。

それに、姫は良いとしても、志穂は、生きてる人間だ。

何も食べないというわけにはいかないだろ？

健康的な生活を送つて入る彼女だから、朝はしっかりと食べてきたんだろうとは思うけれど、それでも、昼は昼でしっかりと食べないと身体に悪いし、今食べておかないと、変な時間にお腹がすくかもしない。

こうなれば、強硬手段しかないだろ？

「うあえず、姫の事は放つておくとして、志穂のそばまで歩み寄ると「ああ、それとも、あなたのその無駄に大きい胸は、そいやつて揉まもが…！」

彼女の口を塞ぐ。

こうしておけば、志穂の方は、口を出すことは出来ない。

「由貴、これは女と女のプライドを賭けた戦いなの、邪魔しないで」

「とりあえず、ご飯食べてくるから、姫はそこで待っている事」

姫の方は、突然の介入で、ちょっと怒っているみたいだが、適当に流す。

真正面から相手していると、いつまでたっても、前に進まない。

そのまま、志穂を引きずるようにして、部屋を出る。

相変わらず、彼女はもがもがと口をさせながら、じたばたと暴れている。

このまま、解放するには少々怖いが、このまま口を塞いでいるうちに、窒息されはたまらないので、

「はい、もう暴れないと」

そう言ってから、そこで彼女を解放する。

先ほどまでの彼女の行動を考えたら、それを素直に聞いてくれるとは、ちょっとと思えなかつたのだが、ようやく頭が冷えたのか、冷靜さを取り戻した彼女は、恥ずかしそうに、こくん、と頷いた。

まあ、彼女にしてみれば、先ほどの姿は穴があつたら入りたいほど恥ずかしい事だろう。

普段の彼女では、考えられない姿だつたわけだし。

その逆に、相手の姫はいつもどおりの姿だらう。

あの人を小馬鹿にしたような態度は、いつでもそうだ。

もしかすると、単に、姫は志穂をからかつていただけなのかもしれない。

彼女は、変に大人気ないところがあるから、その可能性は十分に……

「逃げたわね！」

ないか。

やはり、からかっていたわけではなく、本当の喧嘩だつたのだろう。大人気ない、大人気ない、とは思つていたが、まさかここまで大人気ないとは思わなかつた。

かなりの年を食つているはずなのだから、もう少し落ち着いて欲し

い。

「これから、お昼なんだけど、志穂も食べるよね？」

とりあえず、姫の事はいいとして、さつさと腹こなしをしたい。

昼食を自分で作っていたせいか、すっかりお腹がすいてしまった。

「え？いや、それは悪いですよ」

「というか、食べてもらわないと困るんだけどね。もう作っちゃったわけだし」

とんとん、と小気味良く、階段を降りる。

彼女はいきなりの誘いにちょっと驚き、申し訳なさそうにするが、今言つてこる通り、食べてもらわないと困る。

彼女が食べなければ、誰も食べる人がおりず、余つてしまつのだ。

「とりあえず、由貴特製焼きそばなんだけど、食べ……」

「いただきます」

なので、できれば食べてもらいたいので、どうにか説得しようと試みたのだが、あつさりと僕の言葉をさえぎつて、領いてくれた。先ほどまで、申し訳なさそうにしていた彼女の顔が、今は、どこか嬉しそうに笑みを浮かべてこむ。

いつたい、何がそんなに嬉しいのか、全く分からぬ。

昼食が浮いたのが嬉しいのか、はたまた、焼きそばが好物なのか、どちらにしろ、僕にはさっぱりだ。

「うん、ありがと」

でも、とりあえず、食べててくれるに越した事はない。

第十八話 九月一日 悪戯な家族と

二人揃つて、階段を降りると、そのままダイニングに入る。そこには、母といつの間にかに帰つてきた美樹の姿がある。

ただ、帰つてきたばかりのせいのため、着替えておらず、少々汚れた体操服姿だ。

とりあえず、恥ずかしいから、できれば着替えて欲しい。

その二人は、僕、と言うよりも、志穂が入つてくると同時に、きよとんとした顔をしている。

もしかすると、僕が連れてきた友人が女の子だつたから、驚いているのかも知れない。

今まで、女の子の知り合いを家に連れてきた事はないし、連れてくるような友人がいるとも話してはいない。

「えつと、友達の志穂。うちの高校の後輩なんだ」

「鈴原志穂、といいます。よろしくお願ひします」

ちょっとしたショックから相変わらず抜けきれない二人のために、僕から、行動を起こす。

僕の知つている志穂は元来奥ゆかしくて、自分から前に出るようなタイプじやないため、僕が何か言わないと、挨拶はできないだろうし、目の前にいる二人は、問題外だ。

「由貴の母です」

「妹の美樹です」

そのおかげか、何とか凍つていた頭を解凍した二人は、なんとかそれに答える。

ただ、相変わらず、ショックはぬぐえていない。

一度フリーズした頭は、そう簡単には戻らないのだろう。

「とりあえず、志穂は席に座つて」

とりあえず、志穂に席を進めると、僕達の皿を取りに行く。

既に、母と美樹の二人の前には自分の焼きそばの入つた食器とかが

おかれているが、僕達の席の前には何もない。
どうやら自分で用意しろ、との事らしい。

やはり、どこまでも面倒臭がりといったところだろう。

そのまま、キッチンに向かう。

「あ、私も手伝いますよ」

「ううん、構わないから、座つてて」

その際、彼女が、手伝いを願い出てくれたが、彼女はお客様。手伝わせるわけにはいかない。

彼女の申し出を断ると、どうやらけやんと僕の言つ事を聞いてくれたらしく、更に焼き傍が持つてある。

それを、お箸、それから、麦茶の入つたコップと一緒に、トレイに載せると、ダイニングに戻る。

そう言えば、お茶をするときのために、使つたトレイやカップ類を部屋に置きっぱなしにしていた。

後で、戻しにおかない、母からのお小言がまた飛ぶだらう。自分の時は面倒くさいと言つて、適当にやるくせに、僕がそうしようとすると、すぐに文句を言つのだから、困つたものだ。

「はい、由貴特製ソース焼きそばです」

そんな事を、考えながら、持つてきた食器を並べる。

母、美樹が隣り合つて座つてるので、四人掛けのテーブルは必然的に、僕と志穂が隣り合わせになる。

「ありがとうございます」

「まあ、あんまり得意じゃないから、味は期待しないで」

それを受け取つた彼女は、しげしげと眺めており、その表情はあいかわらず嬉しそうに緩んでいる。

嫌そうな顔をされるよりも嬉しそうにしてくれる方がいいのだけれども、そんなに嬉しそうにされると少々照れる。

彼女の隣のいすに腰をかけながら、そんな事を言つたのも、單なる照れ隠しだ。

「なんだか、初々しいわね」

「新妻に初めて料理を作つて上げた夫、みたいだよね」

目の前にいる二人は、僕達のやりとりを見て、小声でそういつてい

二人とも聞こえていないと思つてゐるみたいだが、すぐそばにいるんだから、聞きたくなくても、聞こえてしまう。

ただ、隣にいる志穂は、いまだに僕が作った焼きそばを嬉しそうに凝視しているため、聞こえていなかつたみたいだが。

どうやら、一つの事に集中すると周りが見えなくなってしまうタイプらしい。

「また一つ、新しい彼女の
んじや、食べようか?」

「あ、は、はい」

といふにいたり、またもやそな観察されてゐる。焼きそばになくなつた。

たたてさえ
二階でのせりとりで遅くなつたせいで
少しこね始め
ているのだ、これ以上冷めさせたくはない。

『 い た だ き ま す 』

一緒に手を合わせると、そつとつて食べ始める。

味の方は意外といい。

されないものではない。

「 ちが。野菜の切つけがちがう出來た。」

「然ダメね」

が。

まあ、毎年母をやいでるので、ほとんと極めたらいいでも良いくらい料理のうまい母なのだから、そういうわれるのは仕方ないのだが、それでも少しごりごは褒めてくれても良いと思つ。

世の中には、まともに料理の出来ない人がわんさかいるのだ、包丁を扱えるだけでも、ました。

「やうですか？私は十分美味しいと思いますけど」

「あら、鈴原さんは優しいのね。こんなものに及第点をあげるなんて。だけど、そんな甘い事を言つちゃダメよ。この程度で、満足しているようじや、志垂家の台所を取り仕切るなんて、夢のまた夢なんだから。だから、こゝは厳しくいかなこと」

「うんうん、そうじすよ。お兄ちゃんは褒めるとすぐ上がって天狗になるから、とにかく貶してやるぐらこがちょっと熙いんですよ」

「…はあ」

一生懸命フォローをしようとした志穂だけど、逆にあいつ返されてしまひ。

確かに、味はまだまだだし、母の味といおつ、満足でやれるよつなんべるではない。

ただ、せっかくの彼女の好意をそりまでも否定しなくても良いことは思う。

「ありがとうございます。志穂だけでもそつ言つてくれると嬉しいよ」

「良かつたわね。採点の甘い彼女で」

だから、今度は僕がフォローをしようとしたのだけれども、今度は僕に向かつて問題発言。

明らかに、今、母が言つた『彼女』のニコアンスは、恋人としての『彼女』だ。

母の表情を見てみると、にやり、としたり顔をしてこねこねから、良く分かる。

母の隣にいる美樹もにやにやとしている。

僕達の関係を分かつていて、そんな事を言つてゐるんだろ？

「やっぱり誰かに褒めてもうれなによつじや、作り甲斐がないからね」

けれど、僕はそれを無視して、続けた。

もちろん、僕と志穂は恋人同士ではなく、ただの先輩後輩で、色恋沙汰なん全く縁のない関係。

だから、本来なら、そこで否定しないといけないところなんだけど、おそらく、そこで、反論したところで、こっちが痛手を負うのは分かりきっている。

隣には、頬を朱に染めて、おろおろと動搖している彼女の姿があった。

いい加減、鈍く、自信過剰とは程遠く、むしろ、それとは逆方向に付き進んで行く僕でも、分かつてしまつような反応をしているのだ、母と美樹でもすぐ気が付くだろう。

そんな状況で下手に反論すれば、志穂と氣まずい雰囲気になるかもしない。

そう言つときは相手にしないのが一番だ。

僕はそう言つと、さつさと、皿の中身を片付ける。

逃げるが勝ちだ。

まあ、彼女を一人にしてしまるのは、心苦しいものがあるが、さすがに一人も志穂に照準を合わせるような事はないだろう。元々、二人があんな事を言つたのも、遠まわしに僕をからかっての事。

僕がいなければ、普通に会話となるだろう。

さすがに、少しごらいはからかわれてしまうかもしねりないが、それでも、さつきのような人の悪いネタでからかつたりはしないはずだ。

「じゃあそうさあ」

あつたりと完食し終えると、さう言つて、片付けの準備をする。

「あー、逃げるつもりね」

「ばか、片付けるだけだよ」

その姿を見て、美樹が即座に僕の行動を見抜いたが、用意していた言葉を言つと、キッキンに戻る。

「『』ちあそつさま」

どうやら、考える事は同じのようで、僕に引き続き、志穂もさつさ

と食べ終えると、キッキンに逃げてくる。

お茶をしていたときもそうだが、もしかすると、彼女は食べるのが早いのかもしない。

男である僕に比べて女である彼女の方が量が少ないのは、当然だけど、それでも、同じ量の美樹や母の皿の上には、まだ半分前後は残っている。

僕達の事をからかう事に集中していたとは言え、それでも、十分に早いと思える。

第十九話 九月一日 結局の決着の終着

「「めんね、痛い家族で」

キッチンに逃げてきた彼女から、皿と「ラップを受け取ると、そう謝つておく。

気分を害している様子はないが、それでもパニックしていたのは確かだ。

謝つておくべきだろう。

「……楽しい家族ですね」

「無理して褒めなくていいから

謝罪の言葉を受けた彼女は、やや頬を引きつらせながら、精一杯誤魔化す。

さすがに、堂々と、問題あり、とは言えないみたいだ。

今一解にいる姫ならば、確実に、堂々と文句は言うだろうが。

それ以前に、堂々と、恋人宣言するだろうが。

そここのところが、姫と志穂の違いだろう。

そして、慌てふためき、困ってしまうのは僕一人だろう。

それを考えると、姫じやなくて、志穂で良かったのだろうが、それでも、やっぱり、これから的事を考えると、少々辛い。

絶対、事あるごとに、からかってくるだろう。

これから暗い未来の展望に、内心でため息を付きつつ、洗い物を始める。

いつまでも、何もしなかつたら、またダイニングにいる一人に、口を挟まれかねない。

今も、ちらりと見たが、にたにたと笑いながら、僕達の事を見ている。

「洗い物は、僕がやるから、志穂は戻つていて良いよ

とりあえず、このままいても、一人にはからかわれるだけなので、さつさと進めてしまう。

志穂に關しては、悪いが、向こうに戻つてもらうしかない。

これぐらいなら一人で十分に出来るので、彼女の手は必要ない。

「いえ、さすがにそういうわけにはいきません。せめて、手伝わせてください」

とはいって、彼女も頷こうとはしない。

言葉振りでは殊勝な事を言つてゐるが、とりあえず、向こうには行きたくないのだろう。

まあ、誰だつてからかわると分かつていて、わざわざ四分から好んで行くような酔狂な輩はいないだろう。

特に、先ほど、また恥をさらしてしまつたのだから、これ以上は、恥をさらしたくはないのだろう。

「んじゃ、とりあえず、志穂は、磨いた奴を水でゆすいどいて」

スペースを開けると、彼女を招き入れる。

また、からかわれるかもしだれないが、そうなる前に逃げてしまえば良いだけの事。

手早く食器を磨き、彼女に手渡す。

さすがは、女の子と言つべきか、受け取つた彼女は、手際良く洗い流していく。

ゆすぐだけなので、そんなにスキルはいらないかもしだれないが。

洗い物を終えた僕達は、さつさとその場から逃げ出した。

背後から、くすくす、と笑う声が聞こえたが、聞こえなかつたふりをする。

そして、今は、玄関前。

どうやら、彼女はこれから用事があるらしい、これ以上はいられないらっしゃい。

なんだか、何のために、彼女の事をこうして、ここに呼んだのか、良く分からなくなってしまった。

「今日は『』のそろそろまででした」

靴を履き終えた彼女は、ぺこりと頭を下げるといつぱり。

「いや、いつちこや、なんだが、嫌な思いばかりさせで『』めんね」とはいえ、頭を下げるにはこっちの方だ。

本当に今日は彼女に悪い事をしてしまった。

ほんのちよつとの間に、かかせなくともいい恥をかかせてしまったのだ。

平謝りしないといけないのは、たぶん、いつちだ。

「いいえ、そんな、謝らないで下さいよ。本当に楽しかったですか

ら

けれど、彼女はそれにぐびを振ると

「来たかつた先輩のお家には来れましたし、『』家族にもちやんと挨拶が出来ました。それに何より先輩の手料理が食べられましたからね。幸せですよ」

顔をほころばせて、いつぱり。

その表情からして、その言葉には嘘はないのだろう。本当にいい子だ。

こんな子に、慕われている僕は本当に幸せ物だらう。

「それに、むしろ、謝らないといけないのは、私の方ですよ

「そんな事はないだらう?」

「いいえ。姫さんの事どうにじもできませんとしたし」

「……え

けれど、緩んでいたのもそれまで、彼女は表情を硬くした。気付いていないものだと、ずっと思っていたが、それは僕の勘違いだつたようだ。

「あれだけ強い力を持つた靈は始めて見ました。しかも、実体化しているなんて……正直言つて、私にはどうにもできません。父ならあるいはもしかすると、どうにができるかもしませんが、どちらにしろ、今の私には手も足も出ないと思ひます

けれど、それ以上に驚いたのは、志穂ですら姫を調伏できないと言

う事。

今まで、彼女は、僕にとつては、雲の上の存在の人だった。僕がどうやっても引き剥がす事の出来なかつた靈を、あつさりと被つてくれた彼女。

別に、全知全能とかそういうふうに、思つてゐるわけではないが、それでも、そんなあつさりと降伏するような事があるとは思えなかつた。

しかも、その相手が、あの姫だとは。

「本当にすみません。せつかく私の事を頼りにしてくれたのに、お役にたてなくて」

「いや、別にいいよ。確かに、迫られて困つてはいるけど、殺されそうなわけでもないし。気にしなくても良いよ」

「でも……！」

「それに、勝手を言つていいのは、いつもの方だからね。志穂が氣にする事じゃないよ」

それが、ショックだつたのは確かだ。

でも、だからと言つて、やつぱり志穂が悪いわけじゃない。

彼女のせいで、姫がとり憑いたわけじゃない。

全部、僕がうかつだつたせいなんだ。

姫に会つた時に、結界をはらなかつたのも僕が悪ければ、眼が会つた時に、さつさと逃げなかつたのも、キスを避けられなかつたのも、全部僕が悪いのだ。

彼女が氣にする事ではない。

「……ありがとうございます」

けれど、それで納得するような彼女ではない。

それでも、優しい彼女は、僕の顔を立てるために、それに頷くと、

「それじゃ、私はこれで失礼しますね」

そう言つて、玄関を出て行つた。

彼女の性格を分かつた上で、言つた事なのが、心苦しい。

もしかすると、この事は、彼女には言わなかつたほうが良かつたの

かもしだい。

迷惑がかかるのはかかるけれど、別に、実害があるわけでもないし、放つておいたら、いつの間にか、いなくなる可能性だってあるのだ。それなら、志穂に頼る必要なんてない。

自分一人でどうにかする事はできたはずなんだ。

「……はあ

とはいって、今更そんな事を考えたところで、後の祭り。
どうしようもないだろ？

盛大なため息を吐くと、僕は、自分の部屋に戻った。

第十九話 九月一日 結局の決着の終着（後書き）

これで第一章で終了です。
次が最終章になります。

ここまで静かですが、この後どうなるか。
まあ、作者のみぞ知る、と言つ事でww

第一十話 九月一日 男の嫉妬はそれはそれで怖いのよ？

今日一日の荒行を終えると、おもむろに立ち上がる。

今の僕は一人。

傍には、姫の姿はない。

今日もお留守番だ。

もちろん、帰つたら、精一杯御奉仕するように仰せつかつてしまつた。

しかも、どうやら、昨日の事をずいぶん根に持つていろいろしく、しばらくは、名前どおりにお姫様扱いしなくてはならない。

せめてもの救いはキスを強要して来ない事ぐらいだろうか。
とはい、それでも、衣服を剥ぎ取られ、もう少しのところで、操を奪われてしまつところだつたけれども。

あの時は本当にあせつた。

志穂にさよならを言つた後、部屋に戻つた僕の背後から襲つて來たのだ。

そして、押し倒されたと思つたら、次の瞬間には、あつという間に上半身裸にされてしまった。

必死になつて抵抗して、マウントポジションと言つ圧倒的不利な体勢から、彼女にアイアンクロールを食らわせて、なんとか逃げ出したのだ。

僕としても、女人に暴力を振るうのは、あまり好きじゃないのだが、背に腹は変えられなかつた。

やはり、操を奪われるのだけはどうしても、勘弁して欲しかつた。

昨日のハプニングを思いだし、たまらずため息を付いたのだが、それが隣にいる誰かさんと重なつた。

誠次だ。

今にも死にそうなほど、真っ青な顔をしている。

「ああ、ショッパンから崖っぷちだよ」
一瞬どうしたものかと思ったが、すぐに答えは出た。

「どうやら、全滅らしい。」

新学期一日目。

今日は、恒例の期首テストがあった。

とりあえず、夏休みの間の勉強の成果をはかるためのものみたいだが、僕達生徒にしてみれば、嫌がらせとしか思えない。

ただでさえ、宿題だけで、息切れを起こしそうなのに、その上、期首テストの勉強までするとなると、遊ぶ暇なんてなくなってしまう。だから、たいてい、よっぽど真面目な生徒じゃない限り、期首テストなんかの勉強なんてしない。

その結果、誠次のようになってしまうのだ。

まあ、誠次の場合、宿題すらやつていなかから、そうなつて当然なんだろうけど。

「自業自得だ、諦める」

真っ白になりかけている誠次の肩をぽんと叩き、そう言つ。結局、ちゃんと勉強しなかつたのが悪いだけだ。

宿題しかやっていない僕でさえなんとか、半分は出来たのだ。それすらサボつた誠次がそうなつてしまつのは、当然の事だらう。同情してやる余地もない。

ただ、一人虚空を見つめながら、ぶつぶつと言つてゐるその姿は、背筋が冷えるほど気持ち悪い。

「んじゃ、先帰るな」

それに、まともに反応を返してくれるようすもないのに、誠次の事は放つて廊下に出る。

テストも終わつたばかりのそこは、下校途中か、はたまた部活に行く途中の生徒であふれかえつてゐる。

そんな中に見知つた顔を見つけた。

たくさんの人の中、遠目からでも分かる整つた顔。

そして、それ以上に独特の凛と澄んだ雰囲気。

志穂だ。

けれど、何故彼女がここにいるのかが、分からぬ。

本来、僕の一つ下の彼女は、僕達の学年とは校舎は同じでも、階は違う。

そのため、用事がないと、こんなところに来る事はない。

「あ、先輩」

それを疑問に思いながら、歩み寄ると、彼女もそれに気付いたらしく、走つて近づいてくる。

「何してるんだ？」

彼女が僕の傍まで歩み寄つて来たところで、そう尋ねる。いつの間にか、野次馬が集まり、周りからは好奇の視線が集まつて来ている。

その中には、わざまで死んでいたはずの誠次の姿もあるが、この際、それは無視する。

「昨日の事で、ちょっと先輩にお話があるんです」

「昨日の？ああ、あれね。分かった。」

どうやら、用事は僕らしく、その内容は、昨日の事。間違いなく、姫関連の事だらう。

けれど、さすがに、それをここで話すのも憚れる。

こんなたくさんの人間が聞き耳を立ててゐるような場所でする内容ではない。

「でも、ここで話すのは、なんだし、場所を変えようか？」

「あ、いえ、そんな事は気にしないで下さい。ただ、うちに来て、父に会つてもらいたいだけですか？」

そう思つて、場所移動を提案してみたのだが、彼女はあつさうと言つてしまつた。

けれど、それは僕が危惧したようなものではなかつた。

父に会つてもらいたい。

それだけでは、確かに、姫の事を感づかれる事はない。

彼女も、それなりに考えて、そう言つたのだろう。

しかし、もう少し考えて欲しい。
周りの野次馬は騒ぎ始めている。

耳を済ませて見れば

「親に紹介？」

「もしかして、婚約？」

「まじかよ、俺、彼女の事、狙つてたのに」

「くそ、白雪なんて言う男とも女とも付かない奴の分際で、生意気な」

「人目がないところで、こっそりやつちまうか？」

恐ろしい会話が繰り広げられている。

特に最後の言葉は聞き逃せない。

ここしばらく、人目がない場所は通らないように気をつけなくてはいけないだろ？

でなければ、確実に、僕は次の日のお天道様を見る事が出来ないと思う。

女の嫉妬は、陰湿で怖いと言うが、やはり、男の嫉妬は、それはそれで怖い。

直球勝負過ぎるために、分かりやすい実害が出やすいのだ。

「うん、そつか。了解、さっさと行こつか」

分けが分からず、きょとんとしている彼女の手を握ると、その場から離れる。

途端に、僕に対する非難や暴言が聞こえるが、やはりここも無視。いちいち、相手にしていたら身が持たない。

とりあえず、後が怖いけれど、今は逃げるしかないだろ？

それに、落ち着いた頃合に、弁明できるようならば、弁明すればいいわけだし。

まあ、まともに相手してくれなさそうだが。

「せ、先輩。こんな人前で手を握るなんて、ちょっと、大胆すぎます」

それ以上に、志穂が勘違いしているのが、怖いが。

もしこれが、姫にばれたらと思つと……

怖すぎて、想像すら出来ない。

ただ、とりあえず、言える事は、きっと、なんらかの強硬手段で、操を狙われる事になつてしまつだらう。

そんな冗談のような笑い話を笑い飛ばす事も出来ず、ため息を付きながら、彼女の家に向かつた。

二十分ほどかけて歩いた後に、彼女の家に付いた。

もちろん、既に、手は離れている。

つなぐ必要がないのだから、当然だ。

これ以上、スキヤンダルを振りまきたくはない。

まあ、あの場で手を握つてしまつた時点で、ほとんど手遅れのような気がするが、気持ちの問題だ。

さて、それは、置いておくとして、田の前にある彼女の家を見る。そこには、いかにもその土地の名豪と言わんばかりの立派な屋敷が建つており、何度もここには来ているが、どうしても、この圧倒的な威圧感にはなれない。

たぶん、僕が妬ましく思われるのには、これも含まれると思つ。可愛くて、性格も良く、勉強も出来て、しかも、家はお金持ち。こんな絵に描いたようなお嬢様を奪つたのだ、そう思つてしまつても仕方ないのかもしれない。

もちろん、志穂の気持ちはどうであれ、眞実は全く異なつていて、そんなふうにねたまれても、僕としては、迷惑以外なんでもないのだけれども。

それに、確かに、家は大きいけれど、彼女の家がお金持ちと言つわけでもない。

家は、先祖伝来の物を、何度も修繕して使って入るらしいし、それにより、彼女の家の仕事上、表切つて言えるものでもなく、仕事自体も少なく、しかも、報酬は、リスクに比べると、少々安く、意外と儲けは少ないらしい。

「あの、どうかしましたか？」

と、どうやら、ぼんやりとしきりとしきりと、彼女が不思議そうに僕の事を見る。

「いや、なんでもないよ

「そうですか？なら、父が待っています。どうぞ」

彼女の方は、あまり納得していないようだが、深く突っ込む事はせず、僕の事を家に招き入れる。

どうやら、彼女のお父さんに会わせる事の方が、先決のようだ。と言つ事は、もしかすると、割と重要な話しなのかもしない。まあ、志穂ですら、手も足も出ない靈である姫と一緒にいるのだ、確かにそれは大問題なのかもしれない。

ただ、中身の方は本当にお粗末で、たいそれたことはしそうにもないけれど。

そんなたわいのない事を思いつつ、彼女に従つて中に入る。相変わらず、木と畳の良い匂いのする家だ。

一般的家庭のうちでは縁のない匂いだが、不思議と懐かしくて、心地いい。

先祖代々受け継がれて来た、僕の日本人としての性が、知らず知らずのうちに、それを求めていたのかもしない。

板張りの廊下は、古いはずなのに、きしむようすはない。

元々の材質が丈夫なのか、それとも、上手に使つているのか、いや、両方なのかもしれない。

元々、古来からある伝統の日本建築は、木しか使わないのに非常に丈夫で、長持ちする。

確かに、火に弱く、火事になりやすいと言う弱点はあるが、火元さえ気を付けて、上手に使つてやれば、存分に長持ちする。

「お父さん、先輩に来ていただきました。入りますよ」

「ああ。どうぞ」

鳥と目のない事を考えながら、彼女に従つて付いていくうちに、付いてしまつたらしい。

「失礼します」

二人そろつてそう言つと、中に入る。

屋敷の外見に似合わずそこまで広くない和室には、そんなに物はな

い。

せいぜい、少々日焼けしてしまっている本や掛け軸が、ある程度。そんな中に、彼女のお父さんはいた。

純日本人の顔をしたその人は、がつしりとしながらも、無駄な肉を持たない均整の取れた身体をしており、同じ年頃のはずの僕の父とは似ても似つかない。

「おひさしふりです」

僕は、頭を深々と下げる挨拶をする。

少々やりすぎの感が自分でもするのだが、どうしても、彼を目の前にするとそうしてしまう。

この家に来るたびに、何度も会っているのだけれども、どうしても、彼の独特的の雰囲気を前にすると、落ち着かず、萎縮してしまう。だからと言って、彼から威圧されているわけでもない。

見た目は、渋い大人の男性と感じなんだけど、中身はいたつて気さくな人で、志穂の父親だという事が頷ける、穏やかな表情をしている。僕の事だつて、かのじょにさんざんめいわくをかけたり、厄介事を押し付けてしまっているのだから、疎ましく思つても当然なのだろうに、娘に近づく悪い虫のような扱い方もせず、優しく接してくれる。

たぶん、こういう人の事を、男が憧れる男、と言うんだと思つ。ただ、そんなパーフェクトな人だからこそ、どこか、何か全てを見透かされているような気分がしてしまう。

特に、穏やかな表情を浮かべる顔に埋め込まれた瞳に見つめられてしまつと、何とも形容し難い不思議な感覚に陥つてしまつ。

「ひさしふりだね。最後に会つたのは、七月の初旬だつたかな?」「はい」

「確かに、あの時に憑いてたのは、綺麗に顔が剥げてた女性の靈だつたかな?」

「……ええ、そうですね」

「いや、失礼した。君にとつてはあまりいい思い出ではないのだが

ら、言うべきではなかつたな」

少々顔を引きつらせた僕を見ると、彼はそう言って苦笑する。

確かに、彼の言う通り、あまり良い思い出とは言えそうにない。

本来、靈は生前の姿を色濃く残し、傷などのない綺麗な姿をしている。

僕が見て来た靈だつて、普通の人とほとんど変わりない、それこそ普通に生きている人間と見間違つてしまつような姿をしていた。けれど、あの時に憑かれてしまつた靈に関しては、例外だつたらしく、死んだ直後の綺麗に顔が剥げていた姿をしていたのだ。

志穂や志穂のお父さんのように、そういう事を生業にして、経験を重ねている人達にして見れば、慣れているようなことかもしれないのだが、僕のような、そう言つた経験のない人間にしてみれば、恐怖意外なんでもなかつた。

初めて見た時は、本当に失神しそうになつたし、少々トラウマになつてゐる。

「あの、それで、お話つて、なんでしょうか？姫の事だと聞いたんですけど」

彼の言葉のせいか、今またちらほらと頭に、その時の気持ちの悪い姿が浮かんできたので、それを払拭するように、先に進める。

「ああ、そうだつたね。うん、その事は昨日、娘から聞いているけれど、その途端に、彼の表情が変わる。

先ほどまで、穏やかな表情は一変、非常に真剣で、穏やかとは対極に位置する緊張に満ちた表情をしている。

今まで何度もこの家に来て、憑かれていた靈を見てもらつたが、こんな表情を見た事は一度もない。

「ひめ、さん、だつたよね、確か」「はい」

「実体化できる靈。しかも、志穂が手も足も出ない程力を持つている。正直、初めて聞いた時は、自分の娘の言つてゐる事ながら、全く信じられなかつたよ」

彼の言葉は少なからず、ショックだった。

何も知らない一般人である僕は当然として、専門家ながらも、まだまだ若い志穂が知らない事があつたとしても、まさか彼ですら、おび付かないものだとは思わなかつた。

「君が知つてゐる通り、靈はあくまでも、精神エネルギー、思念、想いと言つてもいいだろう、その塊に過ぎない。よつて、普通に考えると人に直接物理的に干渉する事はできない。干渉できるようない存在ではないからだ。それでも、靈障が起きてしまうのは、その靈が間接的に干渉を起こすから、人やその他の物が持つ精神エネルギーに干渉して、間接的にその存在に心理的作用を引き起こすからだ。精神エネルギーにならば、同じ精神エネルギーである彼らも、干渉する事は可能だからね」

初めて、彼に出会つたとき。

その時も、彼はそう言つていた。

靈は直接触れる事は出来ない。

ただ、同じ精神エネルギーであるものになら、干渉する事も出来る。人の場合は魂だ。

現在、魂なんてあやふやで曖昧なものため、科学では認知されない概念なのだが、それでも、それがあると仮定をすれば、彼の言つてゐる事は、すんなりと筋が通る。

「けれど、君に今憑いているその靈。それは、異質だ。正直言つて、今まで見た事などないし、それどころか前例なんて聞いた事はない。全くの未知のものだ」

そして、だからこそ、姫はおかしいのだ。

姫は靈だ。

それは何があつても変わらない。

彼女からも靈特有の気配は感じられた。

それは、今まで感じてきた物と寸分の狂いもない全く同じ物だつた。だから、彼女が靈ではないなんて事はない。

第一、もし僕が分からなかつたとしても、志穂がいる。

まだまだ未熟な僕なら勘違いするかもしぬないが、志穂は間違える事はないはずだ。

今までやつてきた経験があるのだから。

「正直言つて、私は、その存在は危険だと思つ。実体化している以上、靈にある直接物理的に干渉ができないと言つ制限はなく、なんのしがらみもなく力を使える。しかも、一般の人には、実体化を解けば、見えなくなつてしまつだから、対応のしようもない。下手をすると、大惨事が起る可能性だつてある」

彼の言う事。

それは、僕も何度と考えた事。

僕には、靈にどんな力があるのかは、知らない。

せいぜい、知つてゐる事と言えば、呪いをかけたり、身体をのつとつたりする事ぐらいで、それ以外の事は何も知らない。

けれど、それだけでも、十分危険なのに違ひないのも確か。

人一人の命を軽く奪つてしまつのだ、危険でないはずがない。

そして、その上に、姫は実体化して、直接人に手を出す事が出来る。普通の靈以上の事が出来てしまつのだ。

「だから、私は……」

そこで、彼は一旦切つた。

もしかすると、逡巡しているのかもしれない。

はたまた、それ以外の疑惑があるのかもしれない。

が、どちらにしろ、僕には分からぬし、それに何より言つ事は分かつてゐる。

「祓つてしまつべきだと思つ」

それしかないだろう。

「例え、今実害がないとしても、未来、何もないとも限らないし、起こつてからでは遅い。対策は事前に行つべきだと思つ」

僕とは違つて、彼には甘さはない。

必要ならば、あつさりと切る。

もしかすると、僕が彼の前に出ると、緊張してしまつのは、そのせ

いなかもしない。

自分もいつか切られるのではないか、と。

「ただ、だからと言つて、あつさり祓つてしまつのも考え方だ」

「え？」

けれど、そんな考え方、彼の言葉を聞いて、搔き消える。

思わぬ言葉に頭が混乱する。

「と言うよりも、祓えるかどうかが怪しいと言つたところだらう。彼女は未知の存在だ。彼女の事を何も知らない以上、どう対応すればいいのかなど、分からぬ。それゆえに、私で彼女を相手に出来るかどうかは分からぬ。もしかすると、私も、娘同様、彼女に手も足も出ないかもしない」

しかし、そんな僕を置き去りにするかのように彼は続ける。

ただ、納得はできる。

不確定要素の強い相手と戦うのは、かなり危険が伴う。

ある程度の情報がなければ、下手をすれば、こちらが痛手を被る可能性がある。

「それに……」

彼は更に続ける。

ただ、その声はどこか少し逡巡しているように、何かに悩んでいるかのように思える。

その何かは、良く分からない。

それでも、僕ですら分かつてしまつほど、彼を悩ませるのだ、それは大きな問題なのかもしない。

「君の気持ちもある。」

しかし、その答えは、存外小さなものだつた。

「君は彼女の事を嫌つてはいないし、無理に祓おうとする様子もない。おそらく、君は君なりに彼女の存在を受け入れているんだろう。ならば、それを無理やり引き裂くわけにもいくまい。知人の気持ちを傷つけるような事はしたくない」

それは、彼からの僕への優しさ。

決して傷つけないようになるとする慈しみ。

その心遣いが、正直嬉しかった。

確かに、彼の言つ通り、祓つてしまつほつがいのは分かる。

彼女はあまりにも危険すぎる。

特に、彼ですら、うまく祓えるかどうかがわからなくなってしまつた今では、更に強く思つ。

けれど、どうしても、心がそれに付いていかない。

理性では、祓うべきと分かつていても、それに素直に頷けない。短い間だけ一緒にいたのだと、あっさりと切り捨てる事なんて出来ない。

だから、もし、やめられるのなら、やめて欲しい。

それが、自分勝手な自己満足だったとしても、そう思つ。

そして、彼は続ける。

「それに、祓わずに、彼女を抑える方法もある

「え？」

一瞬、彼の言つている言葉の意味が理解できず、思わずきょとんとしてしまつたが、その言葉を一度ほど反芻したところでは、ようやく理解で來た。

ただ、もし、それが出来るのなら、願つてもいい。非常に喜ばしい事だ。

思わず顔がほころび、ほつと一安心したのだが、目の前にいる彼は先ほどと変わらず、真剣そのもの。

「ただ、その代わり、それをすれば、確實に君は自由でなくなる」分けも分からず、再度きょとんとしていたが、それも彼の言葉を聞いてすぐに分かつた。

いや、予想すべき事だつたのかもしれない。

もし、何の問題もなく、簡単に抑える事が出来たのなら、彼は最初からそれを提案するはずだ。

無理に祓えば、僕は辛い思いをするし、自分自身良心の呵責を感じるかもしれない。

けれど、逆に祓わなければ、不確定要素を孕む危険を野放しにしてしまう事になる。

だから、何の問題がなければ、どちらの状態も回避できる方法を選ぶはずだ。

なのに、わざわざまじめこじい言い方をしたという事は、それはそれで問題があると取つてしかるべきだつた。

「自由がなくなると言う事はどういう事ですか？」

それでも、その可能性に賭けてみたかった。

もし、僕にできる事があるのなら、やつてみたいと思つた。

「それほどだね、君が彼女の主人になる事。彼女を自分に従属させる事だよ」

第一十一話 九月一日 妖しの風音

いつの間にか、日は落ち、既に世界には闇に満たされている。

意外と長居してしまったみたいで、そろそろ帰らないと、母に小言をぐちぐちと言わせてしまうだろう。

けれど、そんなことは裏腹に僕の足は、家へと向かっていない。

帰りたくない。

心のどこかでそう思つてゐるのだろう。

僕は夜道を一人で歩く。

途中まで、志穂が送るとは言つてくれたけど、それは断つておいた。今は一人になりたかった。

彼女のお父さんは、あの後、続けてこう言つた。

「主人、従属。そう言つと、なんだか仰々しく聞こえるが、簡単に言えば、守護霊のよくなものにする事。もちろん、君には、既に守護霊はいるし、それに何より、守護霊では、彼女を縛る事はできない。あくまでも、守護霊は任意の存在であつて、強制力はない。だから、より強い束縛と強制力を持たせるために、君と彼女を魂で繋ぐ。君の魂で作った鎖で彼女を絡み取り、逃げられないように、楔を打つ。そうすれば、君は彼女に対する強制力を持ち、抑圧する事が出来る」

それは、彼女に手錠をかけるよつなもの。

彼女の完全な自由意志を奪うよつなもの。

マリオネットに仕立て上げようとするもの。

「ただ、その代わり、そうする事で、君もまた、普通ではいられなくなる。一度繋いでしまったものは、もう一度と引き離す事は出来ず、彼女と死ぬまで一緒にいなくてはならない。そして、魂を繋いでしまえば、お互い、完全な他人ではいられず、影響を受け合い、変質してしまう。今の君は、靈を引き寄せやすい体質であるだけで、それ以外は、普通の人とは何も変わらない。ただ、もし変質してし

まあ、君は、私たちと同じような属性を持つ事になり、私たちと同じような生活を送らざるをえなくなる可能性もある

そして、逆に、僕自身もまた、見えない鎖で縛られる。

普通に生活をして、普通に恋をして、普通の家庭を築く。

それができなくなる。

それどころか、僕は、一般社会にいながらも、その世界で生きる事すら出来なくなる。

自分を隠し、誰にも何も言えず、ただただ、一人となる。

「本来、こんな事は、君ではなく、私たちのような人間の仕事だが、私たちでは彼女が頷くまい。だいたい、主従の関係を築くのであれば、よつほど力の差がなければ、無理やり押さえつける事は出来ない。それに、君の事を考えて、祓わないのだから、君が責任の一端を担うべきもあるしね。だから、すまないと思うが、君にお願いするしかない」

彼の言う事は最もなのだ。

僕の気持ちを配慮して、彼女を祓わない。

ならば、僕が彼女に対する責任を負わなくてはいけない。

当然の事だ。

「もちろん、それは君にとつては、あまりにも大きすぎる責任だ。それを君に押し付ける気もない。だから、君に決めて欲しい。彼女をどうするか。君はどうしたいのか。その事を決めて欲しい」

そして、彼は最後にそう言った。

つまり、全ては僕任せ。

彼女を祓うか、それとも、お互いがお互いを縛り付けるのか、それを決めるのは僕なのだ。

だけど、僕はそれに答えられなかつた。

周りを見回す。

気が付くと、いつの間にか、山の中にいた。

良く来る、あの納涼には最適な場所。

僕は、知らず知らずのうちに、一人でいられる場所を、誰にも邪魔

されない場所を求めて、ここに来てしまっていたみたいだ。

いつも、座っている場所まで行くと、そこに腰掛ける。

上を見上げても、枝や葉で隠されて、空は見えない。

そのため、辺りは暗く、不気味な雰囲気をしている。

そう言えば、夜にここに来るのは初めてだった。

ここに来る時はいつも、昼間で、夜になると帰っていた。

だから、こんな時間に来た事なんてないのだが、夜になつたと言つ

だけでこれだけ印象が変わるとは思わなかつた。

いつもの穏やかで優しく包み込んでくれるような雰囲気はなく、怪しく今にも闇に飲み込まれてしまいそうになる。

いや、もしかすると、こここの雰囲気は何も変わつていらないのかもしない。

ただ、僕の方が、周りが見えなくなつてしまつほど、悩みこんでいるだけなのかもしれない。

『彼女をどうするか。君はどうしたいのか。その事を決めて欲しい』

彼の言葉が脳裏に掠める。

自分の一生に関わる事なのだ。

自分で決めないといけないのは分かつてている。

そして、自分の性格を考えると、どれを選ぶべきなのかも分かつている。

僕には、姫を祓えない。

実際に、僕が祓うわけじゃないんだけれども、それでも祓えない。憎む事も恨む事もできない彼女を、あっさりと切り捨てられない。けれど、だからと言つて、彼女を受け入れる事も出来ない。

彼女を受け入れば、僕の一般人としての生活が終わる。

それは、きっと今まで育てて来てくれた両親を裏切る事になると思う。

なんだかんだと面倒事を押し付けてきたり、からかわれたりといろいろと嫌な事もされてきたけれど、それでも、大切にして来てくれた、好きでいてくれた両親。

その二人は、僕には当たり前の幸せを望んでいる。特別になろうとしなくても良い。

無理なんてしなくてもいい。

ただ、僕が僕としてあり、幸せでいてくれれば、それでいい、そう思ってくれている。

なのに、僕が彼女を受けいれれば、両親が望んでいる当たり前の幸せを捨てて、一人にしたら、何がなんだか良く分からぬ奇妙な世界に足を踏む込む事になる。

きっと納得なんてしてくれないと思う。

それに、それ以上に、僕には、姫を受け止める覚悟がない。

今、こんな状況になつて初めて、志穂の気持ちが分かるような気がする。

普通の人とは全く違う存在になつてしまつ。

普通の人には受け入れられない存在になつてしまつ。

嫌われ、排斥され、後ろ指を差され、笑われてしまつかもしれない。それが、怖い。

初めて会つた時の志穂もそんな感じがあつた。

自分が人と違う事に怯えていた。

できる事なら、自分も普通でありたかった。

そして、自分が普通じゃない事がばれたらどうしよう。

そんな思いがにじみ出していた。

僕はそれを軽く見ていた。

確かに、少しだけ人と違う。

人によつては、それを忌み嫌い、排斥しようとするかもしれない。

だけど、それでも、ただ、少しだけ人と違うだけで、何も変わらない、ちょっと人が持つてない力をもつてているだけに過ぎない。

そう思つていた。

だけど、今、自分がそなうとしている。

もしかすると、人から忌み嫌われるかもしれない。

家族にまで迷惑をかけてしまうかもしれない。

大切な人を傷つけてしまったかもしれない。

その事が、自分の一生だけでなく、家族の一生を左右するかもしない。

そんな事を考えたら、僕は答えが出せなかつた。

彼女を切り捨てる覚悟も、受け入れる覚悟もどちらもない。

こんな中途半端な気持ちじや、何も決められない。

結局、僕はこうしてここに逃げてきました。

ざわり、と風が吹く+。

暑い時期ではちょうど良い涼しさを保つこの場所は、暦的には秋になり、しかも夜になつてしまつて、今では、どこか肌寒く感じる。そして、さらに風が吹く。

今度は先ほどよりも強く、寒い。

思わず身をすくめる。

気が付けば、身体はすっかり冷えて、震えている。

どうやら、冷やしすぎたのかもしれない。

正直言つて、今の精神状態で家に帰りたくないが、だからと言つて、長居しすぎて風邪を引くわけにも行かない。

おもむろに立ち上がり、来た道を戻る。

暗く、見通しの悪い場所だが、それでも通り慣れた道。ポケットから出した携帯を明かりにして、山を降りる。ざわり、また、風が吹く。

先ほどよりも、また強く、寒い。

心の芯まで冷えてしまいそうなほど、強い冷気。

まるで、冬の風のようで、下着とカッターシャツの薄手では、非常に寒く、身体は次第に震えだしている。僕は、走り出した。

このまま、呑気にしてたら、本当に風を引きかねない。

それに、この風も何か嫌な予感がする。

初めて姫と会つた時。

あのときに、吹いた凜と張り詰めた冷たい風。

まるで、何かに狙われているような、絡み取られているような、そんな感じのする風を一身に浴びている。

第一十三話 九月一日 心残り

「はあ、はあ、はあ」

いつしか、僕の吐く息は荒くなっていた。

いくら慣れた山道とは言え、やはり、平らではない道を走れば、思つた以上に、走りにくく、体力の減り方も早いのかもしれない。ざわり、また、風が吹く。

更に、強い風。

予想外の強風に、思わず、バランスを崩し、その場に倒れこむ。慌てて、立ち上がるが

「痛つ」

どうやら、足をくじいたのだろうか、左足首に鈍い痛みがする。けれど、僕はそれを我慢して、再度走り出す。

左足を踏み込むたびに、痛むが、そんな事は言つていられない。何かが、そう正体の分からぬ何かが、僕の事を絡めとろいとしている。

もし、ここで止まれば、ここで止まってしまえば、取り返しの付かない状況になる。

だから、痛む足を引きずるよつこしながらも、走る。

一生懸命に走る。

だけど、

「……なんで」

気が付いたら、また最初の場所に戻つていた。

あの、いつも昼寝していた場所。先ほど、逃げ出したはずの場所。

ざわり、と、また風が吹く。

全てを奪い去るかのように。

全てを嘲笑うかのように。

僕は振り返る。

どうして、こんな事になつているのか分かない。

一対何が僕を絡めとつとしているのかなんて分からない。

ただ、背中から感じる独特的の気配。

身体中を舐めまわされているよつた不快な感覚。

前方を見据え、すつと田を細める。

確かに、そこには何かがいる。

靄に囲まれてはつきりとしないが、それでも、そこに自分にとつては良くないものがいる事が良く分かる。

何度も経験して来た事。

できる事なら、本当は経験したくなかった事。

「あびらつんけん・そわか」

虚空に円を描き、最後にその中心に点を置く。

志穂に教えてもらつた、簡易結界。

僕を守護してくれる存在から力を借りるための儀式。

普段は、簡略してしか使わないから、わざわざ言つたりしたりしないけれど、今回はそんな事は言つていられない。

自分でも分かるほど、空気がぴりぴりとしていて、肌がちくちくと痛む。

しかし、相変わらず身体中にまとわり付くよつた嫌な感じもなくならない。

はつきり言つて、僕が相手に出来るような相手じゃない事ぐらい分かっている。

かなりたちの悪い靈だつ。

けれど、諦めて、為されるがまま、あつさりと陥落する分けにもいかない。

明らかに、僕を狙つて来ている。

狩りをしている者の気配。

「臨・兵・鬪・者・皆・陣・烈・在・前
更に、九字の印を切る。

九字護身法と呼ばれる結界。

簡易ながらも、力のある結界を生み出す呪法。その一言一言に力を込め、言霊にする。

力は言葉に込められた想いの分だけ強くなる。

特に、未熟で力の足りない僕には、それをするのとしないのとでは、効果が大きく違う。

そして、ついに気配の主が動いた。

靄が搔き消え、そこから現れたのは異形の存在。

思わず、悲鳴をあげてしまいそうになるほど、醜悪な姿。

顔のパーツの位置はいびつで、骨格も歪んでいる。

更に、身体も四肢はついているが、折れているのかどうか分からな
いが、本来ならありえない方向を向いている。

「はっ！」

ともすれば、一瞬にして、恐怖のどん底に叩き落とされそうな状況。
けれど、大声で叫ぶ事で、恐怖を振り払い、力を込めて編んだ結界
を展開する。

付き進んできていた異形のそれは、展開した結界に激突すると、弾
き飛ばされる。

思いを込めた編んだ結界は意外と強靱で、簡単には壊れない。

とはいって、だからと言つて、そのまま攻勢に移れるわけでもない。

僕が出来るのは専守防衛。

守つて、守つて、守りきつて、逃げる。

攻撃手段なんてない。

けれど、このまま背を向けて逃げ出したところで、到底逃げ切れる
とは思えない。

彼らのような、靈が何を出来るのか、僕は知らないが、それでも、
今の状況を作ったのが、目の前にいる異形だと言う事ぐらいは分か
る。

いくら、夜道で暗く、明かりが携帯だけとは言え、迷うような事は
ない。

できる事なら、携帯を使って、このまま逃げ出したいのだけれども、

それも、目の前の靈の影響がどうかは分からないが、圈外になつて
いる。

「さあさああ

無様に倒れこんだ異形の靈は、起き上がると、また僕に襲いかかつ
てくる。

その喉から発せられる声は、醜惡な姿に見合つた醜いもの。
思わず居竦みそうになるが、必死にそれに耐える。

結界の強さは思いの強さ。

気持ちが折れれば、一瞬にして壊れてしまう。

異形の靈は再度結界に自身をするも、やはり僕の編んだ結界は壊せ
ず、吹き飛ぶ。

けれど、それもいつまでも持ちこたえるとは思えない。

「あびらうんけん・そわか・臨・兵・鬪・者・皆・陣・烈・在・前・

二重結界」

更に結界を編み、強化する。

とりあえず、考える時間が必要になる。

とはいって、できる事はそんなに多くはない。

攻撃手段がなく、おそらく結界のようなもので、逃げられないよう
に閉じ込めているんだろうが、それを打ち破る手段を僕が持つてい
ない以上、この場から出る事は不可能。

一番、可能性があるのは、このまま助けを待つ事だが、それもあま
り期待できない。

明日になれば、姫が探してくれる可能性もあるが、そんなに長い間
結界を保つ事は出来ない。

僕程度の力では、せいぜいもつても数時間程度だろう。

距離を取りつつ、攻撃を受けないようすれば、ある程度時間は延
びるだろうが、それでもどんなに頑張つても、次の日を迎える
自信はない。

それに、この空間内は、目の前にいる異形の世界なのだ、簡単に距
離を取る事も難しいだろう。

現状では、手は、ない。

なら、一か八か攻撃に移つてみるのもいいかもしない。
いくら、未熟とは言え、僕もそれなりに力はある。

志穂や彼女のお父さんのように、一撃でしとめられるような力はないが、それでも田くらましや気を散らす程度なら出来る可能性はあるし、うまく行けば結界に綻びが出来て、そこから逃げ出せるかもしない。

ただ、その難点をあげるとすれば、僕がその呪法を知らない事。もちろん、呪法なんてものがなくとも、効果は出せる。

そもそも、呪法というものは、よりイメージを強くしたり、精神を集中させたりと、補助的な役目しかない。

普段九字護法を使うとき、僕が簡易省略できたのも、うまくイメージして、それに言靈をのせる事が出来たからだ。

もちろん、省略している分、効果は落ちるが、それでも使えないわけではない。

「ぎいいやああ

異形の靈があざましい雄叫びをあげて、体当たりをしてくる。

途端に、何とか先ほどまでは、持ちこたえていた九字護法の結界に、ひびが入る。

思わず舌打ちをする。

思考に意識がいっていた分、結界が少し脆くなつてしまつたのだろう。

次にそこを狙われてしまえば、確実に壊れてしまう。

一度ひびが入れば、もうそれは使い物にならない。

再度九字護法の結界を編みなおすしかないだろう。やはり、今は攻撃云々の話をしている暇はない。

とりあえずは、身の安全の確保。

そして、ゆっくりと考える時間が出来てからだ。

「あびらうんけん……」

再度九字の印を切るうと、用意をし始めたところで、異形の靈が動

くのを止め、僕をじっと見る。

その行動を見て、何故か嫌な予感がした。

ただ、立ち止まっているだけで、何もしていない。

だから、不安に思つ事は何もないはずなのだが、それでも、払拭出来ない嫌な気配。

まるで、何かを見落としているような感じがする。

それでも、慌てて、印の続きを切る。

心が揺れているせいか、先ほどまで張り詰めていた集中力は途切れさせいか、思うように力をコントロールできないが、それでも、補修をしないわけにはいかない。

「臨・兵・鬪・者・皆・陣・烈・在・前」

指先に、言葉に、力が籠らないが、無理やり編みこむ。

その言葉によつて、おぼろげながらも生み出された力は、ひび割れた結界を修復し、完全な状態に戻る。

これで、直接攻撃を受ける事はない。

ほつと、一息を付き、再度、心を落ち着かせる。

その間、それは、なんのアクションを起こしてきていない。

もしかすると、単に攻撃できない状況にいただけで、僕の思い過ごしだったのかもしれない。

平静を取り戻していくうちに、先ほどまであった、不安は完全に過ぎ消えていた。

もう一度、視線を異形の靈に戻し、見据える。相変わらず、ただただ、突つ立つているだけ。

これなら、注意する必要はない。

このままいけば、諦めてくれるかもしれない。

思わず、そんな安易な事まで浮かんできた。

けれど、目の前の異形の靈が、不意に、にたり、と笑つた次の瞬間、すっと身体が重くなつた。

結界は、傷一つついていない。

と言つよりも、目の前のそれは全く動いていないのだから、何かが

起こつたはずはない。

なのだが、全く身体が動かない。

いや、それどころから、視界がぼやけて来て、はっきりと物が見えなくなってきた。

「くつ」

思わず、その場に崩れこむ。

わけがわからない。

なぜ、こんな事になつているのか。

どうして、身体が動かないのか。

まるで、金縛りにあつたかのよつて。

「……しまつた」

そこまで、考えが言つたところで、結論にたどり着いた。

そして、それと同時に、嫌な予感の分けも分かつた。

九字護法の結界。

あくまでも、それは靈を近づけない、浸入させないためのものであり、靈が引き起こした靈障までは、防ぐ事は出来ない。

それを防ぐためには、また別の結界が必要になる。

「ぐつ」

身体中から力が抜け、起き上がることも出来ず、自分の身体のはずなのに、他人の身体のようと思えてくる。

その間に、異形の靈は、九字護法の結界を壊し、僕の目の前に立っている。

身体の自由が利かない以上、僕にはもうどうしようもない。

確実に、しとめられてしまうだろう。

それは、つまり、終わりと言つ事。

その事実に気付いた途端に、身体中に恐怖が走る。

喉がカラカラに渴き、ひり付く。

必死になつて、抵抗したいのに、身体は動いてくれない。

その事実が、更に恐怖を助長させる。

そして、それと同時に、姫についての答えが出せなかつた事が、や

るせなかつた。

あれだけ悩んだのに、元へ答えも出せずに、終わる。

それが悔しかつた。

第一二三話 九月一日 心残り（後書き）

この作品では初バトルでした。
まあ、戦う手段を持つてないので、闘いと言えるものでもあります。
せんでしたがね。
次回決着編です。

第一十四話 九月一日 導き出された答え

ひゅつ、と風きり音がした。

それは、おそらく、僕の止めを差すのだひつ。

靈が人を殺すとき。

それは、どうやって、殺すのだひつ。

直接手段には訴えられない以上、普通の人があるようになつても殺せない。

もしかすると、単に身体を奪われるだけなのかもしれない。

殺されるわけじゃないのかもしれない。

だけど、結局は、僕がいなくなつてしまつ以上、それは死と同じ意味だと思つ。

更に、もう一度、ひゅつ、と風きり音がした。

しかし、感触は何も来ない。

それどころか、逆に、頭の冴えが戻ってきて、先ほどまであつた、身体にかかる重圧が全くなくなつてしまつてしている。

分からぬ。

いきなりの展開に、思考が追いつかない。

「間に合いましたか」

頭の中がぐちゃぐちゃに混乱して、それでも、動けるはずなのに、動こうとせず、その場につづぶせにしていたら、不意に天から声がした。

いや、頭上だ。

しかも、その声は、良く聞き慣れたもの。

「大丈夫ですか？」

そつと、その声の主が、僕を支える。

そろそろと田を開ける。

先ほどまでぼやけていた視界は、綺麗に澄みわたり、しっかりと捉える事ができる。

「すみません、遅くなつてしまつて。本当は、もう少し早く助けるつもりだつたんですが、道に迷つてしまつたんです」

けれど、意識はなかなか戻つて来ない。

「まだに、混乱して、脳の処理が追いつかない。

「ううん、ありがとう。助かつたよ、志穂」

それでも、なんとか礼だけは言つ。

目の前にいるのは、志穂。

そして、少し離れたところで、先ほど、僕が相手をしていた、異形の靈を相手にしている姫の姿がある。

どうやら、一人が僕を助けてくれたらしく。

「どうして、ここで襲われているつて分かつたんだ？」

彼女の肩を借りながら、なんとか立ち上がると、そう尋ねる。僕が、ここにいるのも知らなければ、襲われている事も当然知らなはず。

なのに、なぜ、こんなところで、いつもタイミング良く助けてくれたのか、不思議で仕方ない。

「すみません、つけてたんです」

けれど、その答えは思いのほか簡単な事だつた。

あまり気持ちのいい物ではないが。

「やっぱり、心配だつたんです。姫さんの事で、先輩すごく悩んでましたし。だから、勇気付けたくて、でも、どうすればいいのか分からなくて、それで、つけてたんです」

とはいって、それは、仕方ないのかもしれない。

もし、僕が逆の立場だつたら、志穂の立場だつたら、同じ事をしていたかも知れない。

例え、しなかつたとしても、彼女の事を心配して、気を揉んでいたと思う。

「そうしたら、先輩は山の中に入つて行つちやつたから、慌てましたよ。先輩は知らないかもしれません、ここは危険なんですよ?」

けれど、次の言葉は驚きだつた。

ここには、いつも、心を休めるために来ていた。

昼過ぎだつたから、というのがあるのかもしれないが、それでも、姫とあの異形の靈以外は、一度も見た事はない。

「独特的の磁場を持っているせいいか、たちが悪くて、しかもかなり強い靈がたくさんいるんです。私たちだって、あんまり好んで近づくようなところではないのに、先輩のように無意識に引き寄せてしまふ体質の人に入つたら、それこそ、格好の獲物になってしまいますから」

けれど、志穂がそういうと言う事は、それが真実なんだろう。ならば、どうして、今まで、僕は姫と異形の靈以外見た事なかつたのだろう。

「そつか、ありがとう」

だが、いくら考えてみたといひで、きっと答えは出ないと想つ。僕は何も知らなさ過ぎる。

何も知らずに、何も出来ずに、何も決められない。だから、殺されそうになつたし、助けてもらつてはいる。余りにも情けなさ過ぎる話だ。

女の子に、しかも、自分より年下の女の子に助けられるなんて。「なあ、どうすればいいと思う?」
こんな事じやダメな事ぐらい分かつてはいる。

自分の事ぐらい、自分で決めないといけない事ぐらい分かつてはいる。でも、それでも、僕は、彼女に頼つてしまつた。

頭の中がぐちゃぐちゃで、何がどうなつてはいるのか分からなくて、そもそも自分はどんな人間で、何を為したいのか、それすら分からない。

だから、今、この弱つてはいる機会を使つてしまつてはいる。

襲われ、殺されかけ、一人では立つていられない状況。すがりつく事も、必死になつて手を伸ばして、助けを請う事も、ある意味許される状況。

それを利用して、僕は必死になつて助けを求めてはいる。

「『めんなさい。私には答えられません』

けれど、彼女は、その手を握り返してはくれなかつた。

当然と言えば当然の事。

これは、僕の人生であり、僕が責任を持たないといけない事。そんな事はわかつていて、彼女がそうする事も予測していたのに、やっぱりショックが隠せなかつた。

「ただ、私は先輩がしたいようにすればいいと思います」

そして、彼女は続けて、そう言う。

だけど、そんな言葉なんて聞きたくなかった。

自由意志と言えば、聞こえはいいが、結局、僕に押し付けているだけの事。

僕には決められない。

姫を切る事、家族を裏切る事、そのどちらかを選ぶ事なんて出来ない。

「先輩は何がしたいんですか？どうしたいんですか？」

できる事なら、耳を塞ぎたかった。

これ以上、そんな言葉を聞いていたら、僕は、自分がどうなるか分からぬ。

だから、追い込まれるような、そんな志穂の言葉なんて聞きたくなない。

「先輩が辛いのは、分かります。姫さんを切る事ができない。だからと言つて、私たちと同じ世界に飛び込む事だつて出来ない。もし、同じ立場に立たされれば、私だって、決める事なんてできません。どっちも大切ですから」

そう、どっちも大切なのだ。

家族も、姫も。

いや、それだけじゃない、志穂も、誠次も、その他の友人達の事が大切だ。

一緒にいてくれて、一緒に笑ってくれて、一緒に悲しんでくれて、一緒に悩んでくれて、いろんな時を一緒に過ごしてくれた。

それは姫だつて変わらない。

例え、その付き合いが短い時間だつたとしても、靈だつたとしても、それでも大切なのは代わらない。

「ねえ、先輩。先輩が、守りたい物はなんですか？先輩が大切にしたいものはなんですか？先輩が失いたくないものはなんですか？そんなに悩むものなんですか？」

「そんなの全部に決まつている」

「なら、それでいいじゃないですか」

「え？」

切り捨てるような事なんて出来ない。

どちらかを選ぶ事なんて出来ない。

だから、選べない。

そう思つて言つた。

そして、そんな事を言えば、笑われるかもしれない。
はたまた、なじられるかもしれない。

そう思つていた。

けれど、彼女の言つた言葉は違つた。

笑うわけでも、なじるわけでも、否定するわけでもなく、肯定だつた。

「先輩。父の言つた言葉を気にしそぎです。先輩は、別に父の言った通りにしなくてはいけない義務なんてないんです。確かに、父が言つた事のどちらかを選べば、間違いなんて起きないかもしません。大損害が出る前に対応できるかもしません。だけど、それに先輩が縛られる必要はないんです。先輩は先輩で、父は父。確かに知人かもしれませんけど、ただの知人でしかない父には、先輩に対する強制力なんてないんです。先輩が好きなようにやつても文句は言つては出来ないんです。何も問題を起こして居ない以上」

僕の言葉を認めてくれた。

だけど、実際、それは真実だと思つ。

彼には、僕を縛る事は出来ない。

僕の行動を制限する権利なんてないんだ。

「んじゃ、今のままの生活を望んでもいいのかな？」

「はい、先輩がそれを望むんだつたら、そうすればいいと思います」確認するように言った言葉に、彼女は頷いてくれた。

「だったら、答えは決まったよ。姫は祓わない。だけど、彼女を縛るような事もしない。今のままでいる。どちらも選ばない」

どちらも選ばない。

やつぱり、僕はどこまでも弱い人間だから。

切り捨てる事も、自分が一般人でなくなる事も、覚悟を決める事も、何も出来ない。

だから、僕は、今のままを望む。

例え、その結果として、大惨事を起こす事に鳴つたとしても。

「ああ、やだやだ、ホント弱いくせに、手のかかる相手つて嫌なも

のね。余計な力を使つちゃつたわ。あ、由貴、大丈夫だつた？」

異形の靈を倒し終わつたのだろう、姫が戻ってきた。

その表情は、どこか優しくて、安堵しているようにみえる。もしかしないでも、心配してくれたんだね。

「ああ、大丈夫だよ。ありがとうね、姫」

「あら、感謝してるなら、そのついでに、ちょうどいいから、キスさせてよ。お腹すいちゃつて、たまんないのよ」

「ダメです！ どさくさにまぎれて、なんて事を言つてるんですか」

「頑張つたんだから、当然の権利よ。貴方みたいに、どこにいるのか分からず迷いに迷つた拳銃、戦闘にも参加しなかつたわけじゃないんだから」

「し、しかたないでしょ、貴方みたいに、変なレーダーがついてないんです」

「と言う事は、あなたの愛もそれまで、と言つたところがしり？」

「そんな事はありません！ 絶対に、私の方が上です」

それが嬉しくて、素直にお礼を言つたんだけど、それが原因で喧嘩になってしまった。

「どうか、志穂の場合、もう僕への気持ちを、隠す気なんてないんだろうか。」

今まで、全くそんなそぶりも見せなかつたといつのこと、どういう心境の変化だろうか。

女の子と言つものは、本当に謎だ。

ただ、それでも、分かるものだつてある。

それは、

「さあ、帰ろう。皆で仲良く、ね」

そんな二人が大好きで、一緒にいたい、と言つ事。

まあ、姫に関しては、今一なんとも言えないが、志穂の好きとは少し違うかもしねりないが。

第一十四話 九月一日 導き出された答え（後書き）

次回エピローグになります。
お付き合いありがとうございました。

「相変わらず、暑いな」

夏の暑さはまだまだ残っているのか、日がむすりそろそろ落ちると言うのに、身体中から汗が吹き出している。

「ふーん、たいへんね」

そんな僕とは対照的に、隣にいる姫は、汗一つかいておらず、呑気な表情をしている。

靈である姫は、実体化していなければ、熱かろうと寒かろうと、関係ない。

靈だから、と言つてしまえば、おしまいだけど、正直ちょっとだけ羨ましい。

夕暮れ時の空は、茜色に染まり、その光を受けている僕達自身もまた、茜色に染まっている。

今日の僕達は、ちょっとしたお出かけをしていた。

一応、名田上はデートとなっていたんだけど、実際は、志穂の家に行つて来ただけの事。

昨日の今日だけれども、自分が出した答えを、志穂のお父さんに言いに行つてきたのだ。

そのついでに、姫を紹介しておいた。

もちろん、そんなところにつれていけば、姫の身に何か起きるかもしない。

姫だって、あんな危険なところに行きたがらないかもしない。
それでも、連れていったのは、逃げるような事はしたくなかったから。

切り捨てる事も、一般人でなくなる事も、覚悟を決める事も出来ないけれど、それでも、決めた以上、その答えからは逃げたくなかつた。

認めてもらわないといけないと思つた。

だから、連れていったのだ。

もちろん、決めた以上は、もし反対されたとしても、僕の事を無視して、強硬手段に出たとしても、しっかりと自分の意思を貫き、姫の事を守るつもりでもいた。

まあ、実際は、反対されるような事はなかつたけれども。

こっちの方が拍子抜けるほど、あつさりと快諾してくれた。

それどころか、

「うん、いろいろと苦労するだらうが、志穂共々三人で仲良く楽しくやつてくれたまえ」

穏やかに笑みを浮かべながら、応援までしてくれたのだ。

そこまで言つたところで、なんとなくだけど、彼の気持ちが分かつたような気がする。

たぶん、試したんだと思う。

それは、別に僕が何を選ぶか、ではない。

もし、どんな答えでも、僕が悩み、しっかりと考えた結果として出てきたものなら、彼は何も言わなかつたと思う。

ただ、彼が見たかったのは、僕の姿勢。

何を大切に思い、何を守りたいと思い、何を選ぶのか。

そして、その時の態度はどんなものなのか。

それを見たかつただけなんだと思う。

相変わらず、空は赤い。

ただ、逆方向を見てみれば、すでに、少しづつ色は闇色に近づいている。

夜は靈の時間。

闇の濃い時間帯は、僕のような一般人では、耐えられない恐怖の時間。

それが、昨日の体験で良く分かった。

だけど、その日は、それ以上にもつと大切な事を知る事が出来た。僕の弱さと気持ち、願い、望み。

僕が大切にしようとしている価値観。

そして、

「ねえ、姫。夏休みのあの日。初めて会った日だけど、僕に憑いたのは、気まぐれでも何でもなく、ただ、守るつとしてくれたんだろう? いつものように」

姫の事。

あれから、何度も考えていた。

強く、たちの悪い靈がたくさんいるはずなのに、寄つてこなかつたのか。

どうして、姫が僕に憑いたのか。

なぜ、きまぐれのような感覚で憑いたはずなのに、志穂と奪い合ひのような事をしたのか。

そして、あの時感じた嫌な感触の正体。

一杯一杯考えて、そして出てきた答え。

姫が僕を守つて居てくれていた、それだつた。

姫と初めて会つた時と昨日のあの異形の靈が出た時。

あの一つの雰囲気は、本当にそつくり、と言つよりも、そのままだつた。

全く、同じ存在の出現。

そう考へたほうがしつくり来るぐらいだつたのだ。

「あら、ばれちゃつた? まあ、由貴の言つ通りよ。見てて危なっかしいから、眼が離せなかつたのよ」

それを彼女は頷く。

今まで隠してきた事が、ばれたのだ。

しかも、人に知られたら恥ずかしい類の話しなのだ、照れたり、否定したりする場面だつて、彼女はどこか嬉しそうにしている。そう言へば、志穂の時もそうだつた気がした。

隠している事。

人には話したくない恥ずかしい話。

なのに、それが、僕にばれた時、僕が感づいた時、その事を嬉しそうにしていた。

やはり、女の子は分からぬ。

いつたい、どういう精神構造をしていると重いのだらうか。

「ホント、危なっかしそうのよ、あなたは。もう少し『氣』をつける

のよ? もう一度とあんなのは『ごめん』だからね」

「分かってる。あそこには、もう行かない」

それが不思議で、出来れば、聞いてみたいのだけれども、あえて聞かない。

たぶん、聞いたって、分かんないし、それになにより、

「とりあえず、また、新しく涼めるところを探すよ」

今は、呑気な話をずっとしていたい。

そう思つから。

ハピローグ（後書き）

一応、これで終了です。

終了ですが、まあ、始まりといえば始まりです。

なので作者のやる気と要望があれば続きを書こうかなと思います。

お付き合ってありがとうございました。ww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4323d/>

僕と妖し

2010年10月9日15時08分発行